MIYANOUE , HARABATAKE

松本市 宮の上遺跡II
原 畑 遺 跡

—緊急発掘調査報告書—

1994. 3

長野県松本市教育委員会

序

松本市の北部に位置する岡田本郷地区は、開発に伴う発掘調査が幾度となく行われ、遺跡が広範囲に分布していると知られておりました。

このたび当地の原地籍に県営ほ場整備事業が及び、宮の上・原畑遺跡を含む地域もその対象となったことから、文化財の保護を図るため、松本市が松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うことになりました。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団が、平成4年5月から7月に宮の上遺跡を、同年10月から翌5年1月にかけて原畑遺跡の調査を行いました。作業は夏の猛暑、冬の厳寒に悩まされるなど大変なものでしたが、参加者の皆様の並々ならぬ御尽力により無事遂行することができました。その結果、どちらも奈良・平安時代の集落遺跡であり、住居址33軒をはじめとする数多くの遺構と、同時期の土器などの遺物を得て、多大なる成果を収めることができました。これらの資料は、今後地域の歴史解明に大変役立つものとなることでしょう。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前庭とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めて頂ければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、苛酷な状況のなか発掘作業に御協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解をいただいた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成6年3月

松本市教育委員会　教育長　守　屋　立　秋

例　言

1　本書は平成４年５月26日～７月25日に行われた宮の上遺跡(松本市大字原)、および10月23日～１月20日に行われた原畑遺跡(松本市大字原)の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は平成４年度県営ほ場整備事業に伴う発掘調査であり、長野県松本地方事務所より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。

3　本調査および本書の作成は松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。

4　本書の執筆は第１章：事務局、第２章第１節：森　義直、同第２節・第３章第３節３・４：今村　克、同第３節１・２：三村竜一、同５：木下　守、その他を竹原　学が行った。

5　本書作成にあたっての作業分担は以下の通りである。

遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内田和子、上条尚美、倉科祥恵、髙山一恵、堤　加代子、丸山惠子、村松恵美子、村山牧枝

遺物実測：赤羽包子、石合英子、木下　守、関澤　聡、竹原久子、中村朝香、林　和子、平出貴史、松尾明恵、MIN AUNG THWE、村田昇司、望月　映

遺構図整理：石合英子

トレース：開嶋八重子、久根下三枝子、玉井あずさ、望月　映

図版作成：石合英子、大谷千晴、林　和子

写真撮影：今村　克、竹原　学(遺構)、宮嶋洋一（遺物）

6　本書で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P

7　図・表中の方位の内、地図類および原畑遺跡の遺構図・全体図は真北を、宮の上遺跡については磁北を指している。

8　本文中の土器の用語のうち、黒色処理のなされた土師器については「黒色土器」の名称を用い土師器と区別しているが、第３章第２節の遺構の報文では記述を簡略化するため必要な場合を除いて土師器に含めている。

9　本文中で用いている時期区分の内、土器様相○期、○期と示したものは(財)長野県埋蔵文化財センターによる中央自動車道長野線関係調査遺跡の土器編年を用いている。文献については第３章第３節１において挙げているので参照されたい。

10　本書作成に際し、以下の方々より助言・協力を得た。記して感謝申し上げる。

大竹憲昭、関澤　聡、竹内靖長、直井雅尚、山田真一

11　本調査で得られた出土遺物および記録類は松本市教育委員会が保管している。

目　次

序
例　言
目　次
挿図目次
図版目次
第1章　調査経過
　第1節　文書記録 …… 1
　第2節　調査体制 …… 2
第2章　遺跡の環境
　第1節　地形と地質 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 5
第3章　調査結果
　第1節　調査の概要 …… 16
　第2節　遺　構
　　1　宮の上遺跡 …… 17
　　2　原畑遺跡 …… 23
　第3節　遺　物
　　1　土器・陶磁器 …… 33
　　2　瓦 …… 38
　　3　石　器 …… 39
　　4　土製品 …… 39
　　5　金属製品 …… 40
第4章　調査のまとめ …… 42

挿図目次

挿図 1　調査地の位置と周辺遺跡 …… 7
挿図 2　調査範囲 …… 10
挿図 3　宮の上遺跡遺構配置 …… 11・12
挿図 4　原畑遺跡遺構配置(1) …… 13
挿図 5　原畑遺跡遺構配置(2) …… 14
挿図 6　原畑遺跡遺構配置(3) …… 15
挿図 7　古代の土器器種一覧(1) …… 35
挿図 8　古代の土器器種一覧(2) …… 36
挿図 9　岡田地区における 7 ・ 8 期の住居址規模分布 …… 43
挿図10　宮の上・原畑遺跡における集落の変遷 …… 47
挿図11　岡田地区における古代集落の消長 …… 49

図版目次

図版 1　宮の上遺跡　第 4 ・ 5 号住居址
図版 2　宮の上遺跡　第 6 ・ 7 号住居址
図版 3　宮の上遺跡　第 8 ～10号住居址
図版 4　宮の上遺跡　第11～13号住居址
図版 5　宮の上遺跡　第14・15号住居址
図版 6　宮の上遺跡　土坑
図版 7　原畑遺跡　第 1 ～ 3 号住居址
図版 8　原畑遺跡　第 4 ・ 7 号住居址
図版 9　原畑遺跡　第 5 ・ 6 ・ 9 号住居址
図版10　原畑遺跡　第 8 ・10・22号住居址
図版11　原畑遺跡　第11・12・17号住居址
図版12　原畑遺跡　第13～15号住居址
図版13　原畑遺跡　第16・18・21号住居址
図版14　原畑遺跡　第19・20号住居址
図版15　原畑遺跡　土坑(1)
図版16　原畑遺跡　土坑(2)
図版17　原畑遺跡　土坑(3)・溝状遺構
図版18　土器(1)
〃　〃
図版45　土器(28)
図版46　瓦(1)
図版47　瓦(2)
図版48　石器・土製品(1)
図版49　石器・土製品(2)
図版50　金属製品

第１章　調査経過

第１節　文書記録

平成３年９月19日　埋蔵文化財保護協議を市役所および現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

10月２日　平成４年度補助事業計画書提出。

平成４年４月22日　宮の上遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

５月１日　平成４年度県営ほ場整備事業岡田本郷地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。

６月８日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。

６月27日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。

７月９日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）内示。

７月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

９月７日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

９月11日　平成４年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出。

９月16日　原畑遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。

９月17日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

９月22日　平成５年度補助事業計画書提出。

９月24日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

９月28日　埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。

12月10日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。

平成５年２月26日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。
平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。

３月12日　平成４年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

３月17日　宮の上・原畑遺跡埋蔵文化財拾得届け及び発掘調査終了届け（通知）提出。

３月31日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知。
平成４年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知。

４月30日　平成５年度県営ほ場整備事業岡田本郷地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。

５月10日　平成４年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。

５月20日　平成５年度文化財保護事業補助金（国庫）交付申請書提出。

５月21日　平成５年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。

５月24日　平成５年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。

９月27日　平成５年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
平成５年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

第2節　調査体制

調査団長　松村好雄（～H4.6）、守屋立秋（H4.7～）（松本市教育長）

調査担当者　竹原　学、今村　克（考古博物館）

調　査　員　太田守夫、竹原久子、田中正次郎、西沢寿晃、松尾明恵、三村　肇、望月　映

協　力　者　赤羽包子、青柳洋子、荒井由美、飯田三男、飯沼　忠、五十嵐周子、池田穂積、石合英子、石合利加子、石川末四郎、臼井秀明、内澤紀代子、内田和子、小穴仁美、大久保たつ子、大崎悦正、大澤武子、大角けさ子、太田千尋、大谷成嘉、大谷房夫、大塚袈裟六、大月育英子、大月みやこ、大月八十喜、大野健二、大堀一男、岡村行夫、小野光信、開嶋八重子、神田栄次、久根下さやか、黒木　清、小池愛子、小池直人、小岩井美代子、小松正子、斉藤政雄、坂口ふみ代、下里末子、下里千代子、鷲見昇司、袖山勝美、高橋登喜雄、田口吉重、竹平悦子、田多井　亘、田中雅子、玉井あずさ、土橋幸子、鵜川　登、寺島貞友、中島新嗣、中村朝香、中村恵子、中村安雄、巾崎助治、林　昭雄、林　和子、原　とみ、原田晋太郎、平出貴史、深井美登利、深井やすの、藤井源吾、藤井マツエ、藤井道明、藤本利子、洞沢文江、本澤　香、増澤　治、松尾さだ子、松田秀子、丸山恵子、丸山久司、丸山隆香、三沢元太郎、三村康子、道浦久美子、MIN AUNG THWE、村松恵美子、甕　國成、百瀬厚利、百瀬典子、百瀬二三子、百瀬義友、森井柳三郎、矢崎寛子、山岸弥生、矢満田伸子、横山小夜子、横山真理、横山保子、吉江園子、吉江孝子、吉澤克彦、吉田昌彦、吉田　勝、米山禎興

事　務　局

松本市教育委員会　島村昌代（社会教育課長）、田口　勝（～H4.3）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

㈶松本市教育文化振興財団

事務局：深澤　豊（～H5.3）、大池　光（事務局長）、牟禮　弘（局次長）、青木孝文（次長補佐）

考古博物館：神澤昌二郎（～H5.3）、熊谷康治（館長）、直井雅尚（～H5.3）、松澤憲一（主任）、木下　守、久保田　剛（主事）、遠藤　守（事務員）、藤原美智子

第2章　遺跡の環境

第1節　地形と地質

1　地形と地質

原畑・宮の上遺跡は松本市北方の岡田地区にあり、女鳥羽川が第3紀層の山地を南に開せきして形成した細長い扇状地の扇頂寄りで、先年調査した扇頂付近にある塩辛遺跡の南、岡田町遺跡の東に位置している。標高は675m～690mの間に細長く分布し、現女鳥羽川の右岸・第2段丘面と第3段丘面との間の亜段丘面から最下位の第3段丘面上にある。女鳥羽川は武石峠（1810m）付近から流れ出す中の沢と、三才山峠（1500m）から流れ出す本沢、袴越山（1752m）から流れ出す舟ヶ沢の三つの沢が、三才山の一の瀬で合流し西に向かって流れ、稲倉から流路を120°くらい向きをかえて本遺跡付近を南流している。松本市内に入って90°流路を西に変え、白板付近で田川と合流している。延長は17.3km、高度差は1200mあり稲倉より上流は120/1000の勾配をもつ急流で、下流は21/1000の勾配である。そのため稲倉付近を扇頂として、本郷や岡田に広い扇状地を形成し、湯川の線を境として薄川の扇状地と接している。この扇状地堆積物は第3紀層の内村層および玢岩、各種安山岩などの砕屑物により形成されている。現在稲倉付近で急角度に曲っているこの川も、同様な堆積物が城山一帯に見られ、波田ロームを載せていることから、更新世末頃は南西方向に流れていたことがわかる。その後城山一帯の山地の隆起によって流路を次第に東にとり、稲倉→岡田西→大門沢へと流れを変え、更に、山地の傾動と度重なる洪水で、流路は東西に首を振り女鳥羽川扇状地を形成した。岡田西の南北性の低地は、女鳥羽川の自然流路のあとで、岡田町付近が少し高くなっているのは、女鳥羽川がつくった自然堤防と推定される。

2　遺跡付近の段丘について

この女鳥羽川扇状地は堆積しつつ地盤の傾動により河岸段丘を形成し、現女鳥羽川の右岸に三段の河岸段丘が認められる。この地盤の隆起は、上述した如く一様なものではなく、西側の方が東側より大きく傾動した可能性があり、上段から矢作・神沢の第1面、伊深・岡田・反目・中原に至る第2面、最下位の第3の段丘面におよそ区別することができる。しかし、第2段丘面は複雑で、小段差面（亜段丘）が、所どころに見られ、原畑付近も第2段丘面と最下位段丘面との間の亜段丘面とみられるが、宮の上遺跡は、最下位の第3段丘面にある。

3　女鳥羽川扇状地地形の特殊性

松本市北部の遺跡群を考える上で、女鳥羽川の果たした役割は極めて重要であるので、他の扇状

地と異なる特徴をあげると、第1に出水率・河況係数（年間の最少水量に対する最大水量の比）共に極めて大である。即ち荒れ川であること。第2に扇頂付近の稲倉で流路が120°位曲っていること。これは前述した如く城山一帯が西側程激しく傾動したためであるが、更に加えてカーブする付近の左岸は硬い玢岩が露出し、護岸の働きをして浸食されにくいため急カーブが永く維持されている。第3に本来流路の首振りにより、貝殻を伏せたように滑らかな扇状地地形ができるはずであるのに、扇頂付近で流路が急カーブで曲っているため、洪水時には稲倉－伊深間で勢い余って曲がり切れず、西の山麓寄りを流れることもあり、その時の自己堆積物（自然堤防）により、東の山麓を流れることもあるなど、扇状地の両端を流路がしばしば繰り返されたため、扇状地の中央部が高く、両側が低い変則的な扇状地を形成するに至ったものと考えられる。しかし、西側からの地形の傾動は引き続き継続されているらしく、西側を流れたのは9c頃を最後にして以後東側に移り現在に至っている。このため段丘も西側（右岸）にのみ認められる。

4　歴史時代に入ってからの女鳥羽川の流路について

歴史時代に入ってたどった女鳥羽川の流路を、今回までの発掘によって得られた土層を基にして、岡田町付近を推定すると、次の三つの時期になることが判明した。

①　奈良時代以前は現在とほぼ同じ東端を流れており、岡田町面の第2段丘面に小さな亜段丘面（原畑遺跡面）を残しながら下刻作用が進行していた。その後奈良時代始め頃？の洪水により、押し出された土石で流路が阻まれ、岡田町一帯に含巨礫黒色土層を堆積させながら西山沿いに向きを変えた。

②　奈良時代～9Cには、女鳥羽川の本流又は、大きな支流が西山沿いの岡田町付近を流れており、原畑遺跡もこの頃に、営まれていた。なお、現女鳥羽川付近には、支流程度の流れがあった可能性もある。

③　9c末～10c始め頃の大洪水で、岡田町や原畑一帯は、上流から押し出された土砂で厚く覆われ、流路は堆積物にはばまれて大きく東側に向きを変え、旧女鳥羽川に戻り現在に至っている。

5　発掘地点の土層について

原畑とその周辺の土層は、古い時代の黄褐色砂礫土層の上に、奈良時代以前の洪水による含巨礫黒色土が載り、この黒色土面に9cの住居が営まれた。その後9c～10c始めの大洪水による含巨礫黒色土が80cm～1mの厚さで堆積し、住居跡は埋没した。

その後も地盤の傾動的隆起は続き、女鳥羽の流路は再び西に首を振ることはなく、下刻作用も進んで原畑付近の比高が増したため、洪水に襲われることもなく現在に至ったか、下流の第3段丘面（最下位）にある宮の上遺跡付近は、その後も小洪水を受けて、土砂が堆積している。

第2節　歴史的環境

原畑、宮の上遺跡の周辺には旧石器時代～中世にかけて多くの遺跡が分布している。しかし、このうち本章で扱った遺跡の半数以上は、過去に土器等の遺物が採取されているものの、発掘調査が行われていないため、実態は不明な部分が多い。そこで周辺遺跡一覧表には1979年以降発掘が行われた遺跡については発掘年を表示し、その他の遺跡については参考文献を表示した。また、遺跡名については松本市が所有する遺跡地図の見直し作業に伴い若干の変更があるため、一覧表の遺跡名の跡に（）表示で旧遺跡名を掲載した。

次に、各遺跡について時代別に概観してみたい（挿図1・表1参照）。

1　旧石器時代

2ヶ所ある。5では神子柴型の石斧の出土が確認されている。49塩倉池遺跡では拇指状掻器が出土している。この地域では旧石器時代の遺跡の発掘例はなく今後の調査が待たれる。

2　縄文時代

早期　2稲倉和田（住居址1）、22矢作遺跡（楕円押型文土器）、3稲倉桜田（早期後半住居址2）

前期　4堂田（住居址1）、15下屋敷、45柳田遺跡

中期　1稲倉鎮守、2稲倉和田（土器）、11岡田西裏（住居址1）、12樋渡し（住居址2）、15下屋敷、22矢作（住居址）、24田溝、30松岡、41高田、45柳田（住居址）、49塩倉池

後期　8岡田町、12樋渡し（土器）、20根利尾、45柳田

晩期　8岡田町、13原畑、32狐塚、45柳田

このほかに時期を特定することはできないが縄文時代の遺物が出土している遺跡として6高山から打製石斧、17宮池から石鏃、19北ノ窪から打製石斧・石鏃がある。また、最近の成果で注目されるのは3稲倉桜田遺跡からこの地域として初めて早期後半の住居址が発見されたことがあげられる。

3　弥生時代

8岡田町（弥生土器、磨製石鏃）、23向山（磨製石鏃）、25宮の前、26岡田神社裏、32狐塚（太型蛤刃石斧、箱清水式土器）、36水汲西原（太型蛤刃石斧）、42鳥居前、43大音寺、46大村（箱清水式土器）。

この地域では弥生時代の遺物の発見はあるものの住居址の発掘調査例はまだなく今後の調査に期待したい。

4　古墳時代

7塩辛（後期末住居址1）、8岡田町（前期住居址4）、9二反田（前期住居址6）、10下出口、11岡田西裏（前期住居址1）、15下屋敷、18穴田前、24田溝（前期銅鏃・ガラス小玉）、30松岡（中期住居址2）、31とうこん原、32狐塚、36水汲西原、40本郷小学校敷地（後期住居址1）、42鳥居前、43大音寺

岡田町周辺では古墳時代前期の住居址は発掘調査例が増えつつある。中期および後期の住居址はまとまって発見されていないため即断は避けたいが、30松岡からは中期の土器が相当出土していることから集落の存在が予想される。また南へ2km程離れた大村古屋敷遺跡では中期の住居址が17軒発見されていることから、当期の拠点的集落はこの周辺に存在した可能性がある。

次にこの地域の古墳の特徴として、1：群集墳を形成せず女鳥羽川の両岸に点在すること、2：大型の古墳として金銅製の天冠が出土した桜ヶ丘古墳と妙義山1号墳があること（桜ヶ丘古墳は中期末に、妙義山1号墳は葺石を伴う直径35mの大型古墳であることから桜ヶ丘古墳に前後する時期と推定される）、3：積石塚と考えられる古墳が数基あること（発掘調査を経ていないため正確な数字は不明。さらに山辺の積石塚との関連も注目されている）、などがある。

5　奈良・平安時代

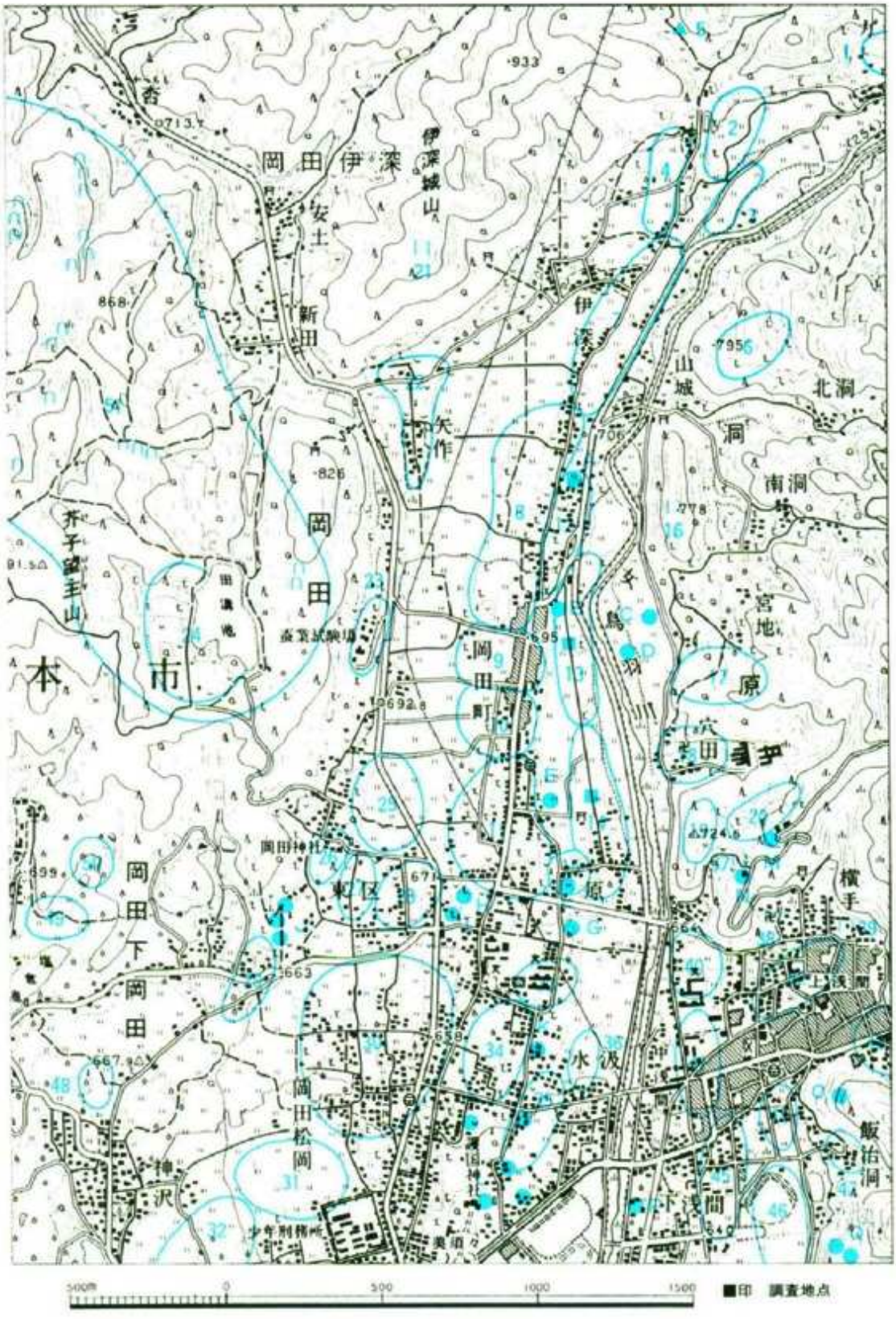
2稲倉和田（平安住居址10）、4堂田、7塩辛（奈良住居址6・平安住居址4）、8岡田町（奈良・平安住居址99）、9二反田（平安住居址1）、11岡田西裏（平安住居址53）、12樋渡し（奈良住居址1・平安住居址2）、13・14原畑・宮の上（本報告）、15下屋敷、18穴田前、23向山、25宮の前（奈良・平安住居址29）、26岡田神社裏、27堀ノ内、28田中、29天神の木、30松岡、31とうこん原、32狐塚、33杵坂、34七日市場、35たて、40本郷小学校敷地（奈良・平安住居址4）、41高田、45柳田（奈良住居址1）、46大村（奈良・平安住居址50）、47真観寺、48土田、50御宝殿、51北部古窯址群

近年多くの発掘による成果が得られている時代である。中でも女鳥羽川と遺跡の立地に関する見解として、女鳥羽川によって形成された段丘は、下から第1～第3段丘面まであり、第3段丘面に乗る7～12の遺跡と第二段丘面に乗る13・14の遺跡はこの時代に限れば一つの遺跡とみなす考え方がある。集落の変遷や遺跡の範囲などを考える上で参考になるものと思われる。

6　中　世

4堂田、9二反田、13・14原畑・宮の上（本報告）、16早落城址、21伊深城址、22矢作（火葬墓2）、25宮の前（住居址1）、37茶臼山城址、38神宮寺館址、39城之内館址

発掘例が少なく、今後の調査に期待したい。



挿図１　調査地の位置と周辺遺跡

表1　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	発掘年・参考文献
1	稲倉鎮守		○						東筑P59
2	稲倉和田		○				○		発掘H5
3	稲倉桜田		○						発掘H5
4	堂田		○				○	○	発掘H5
5	神子柴型石斧出土地	○							表採
6	高山		○						東筑P59、信濃史料
7	塩辛		○		○	○	○		発掘H2・3、市№95・105
8	岡田町		○	○	○	○	○		発掘H3・4、市№99
9	二反田				○		○	○	発掘H3、市№99
10	下出口				○	○	○		
11	岡田西裏		○		○	○	○		発掘S54・58・60、H1・2・3
12	樋渡し		○			○	○		発掘H5
13	原畑		○			○	○	○	発掘H4
14	宮の上					○	○	○	発掘H4
15	下屋敷		○		○	○	○		東筑P503
16	早落城址							○	県教委報告
17	宮地（穴田峰）		○						
18	穴田前				○	○	○		東筑P503
19	北ノ窪		○						本郷村誌P323
20	根利尾		○						本郷村誌P323
21	伊深城址							○	県教委報告
22	矢作		○					○	発掘H2、市№105
23	向山（西光寺畑）		○	○			○		東筑P309
24	田溝		○		○				東筑P71
25	宮の前			○		○	○	○	発掘H2、市№94
26	岡田神社裏			○			○		松本市史
27	堀ノ内						○		
28	田中（中田）						○		
29	天神の木（矢崎）						○		
30	松岡（下り・山伏塚・上ノ段）		○		○	○	○		東筑P72、信濃史料P203
31	トウコン原		○		○	○	○		発掘H2・3・4、市№92
32	狐塚（白金）		○	○			○		東筑P72・309
33	枠坂		○				○		発掘S62、H2・5、市№66
34	七日市場（反目）				○		○		信濃史料P556
35	たて（反目）		○				○		東筑P503、本郷村誌P324
36	水汲西原（反目）		○	○	○				東筑P303

No	遺　跡　名	旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	発掘年・参考文献
37	茶臼山城址							○	県教委報告
38	神宮寺館址							○	
39	城之内館址							○	
40	本郷小学校敷地		○		○		○		発掘S62、H4、市No.66
41	高田		○		○		○		東筑P72
42	鳥居前			○	○				東筑P516、信濃史料
43	大音寺		○	○					東筑P72
44	新湯南裏		○						
45	柳田（からおけ）		○			○	○		発掘S54、H2
46	大村（旧ペニシリン工場敷地）			○		○	○		発掘S61・62・63、H1
47	真観寺				○		○		
48	土田						○		東筑P503
49	塩倉池	○	○						東筑P35・71
50	御宝殿						○		信濃史料
51	北部古窯址群					○	○		東筑P723・724

※東筑：東筑摩郡・松本市・塩尻市誌の略。

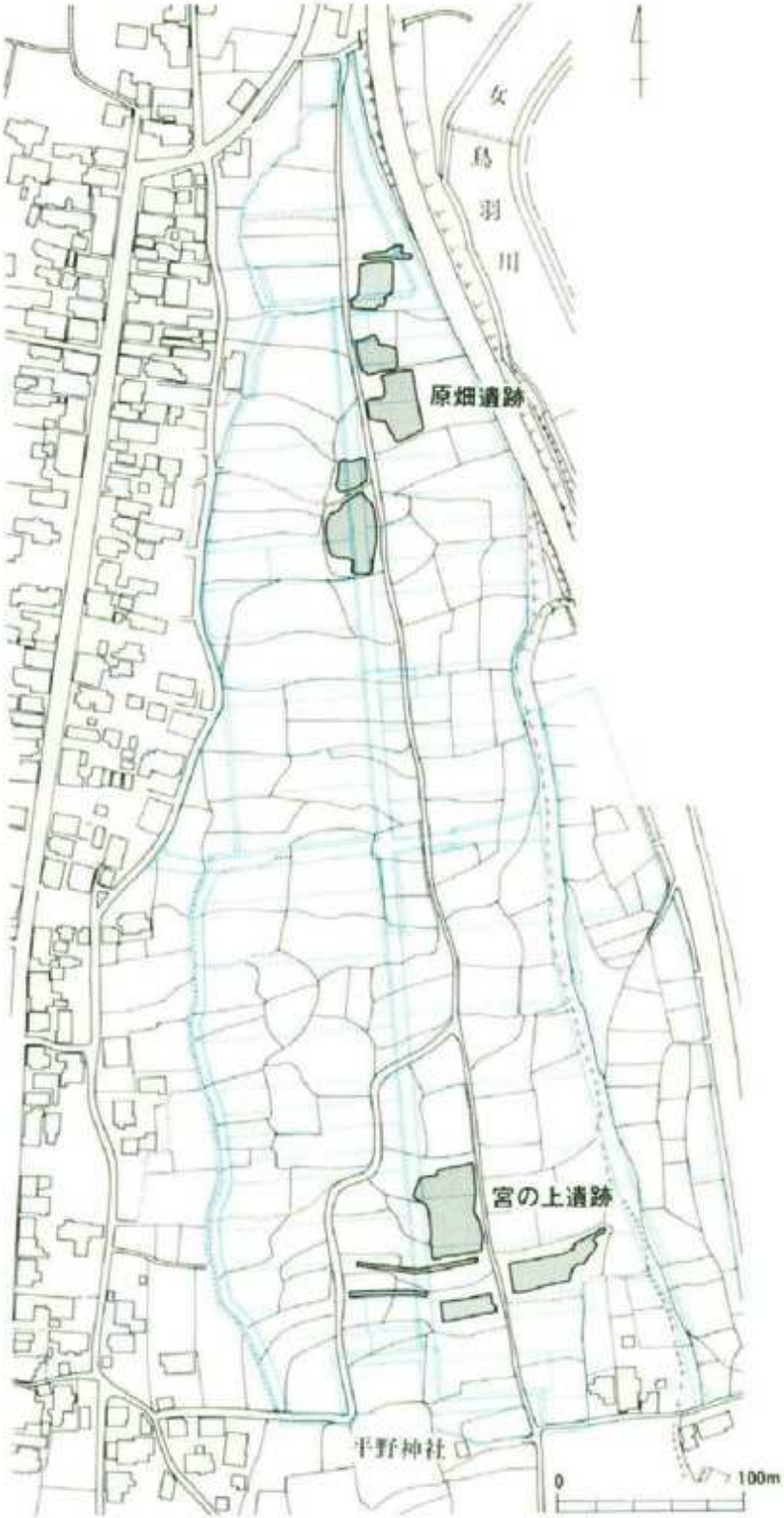
※発掘年は1979（昭和54）年以降のものについて掲載した。

※県教委報告：長野県教育委員会編『長野県の中世城館跡分布調査報告書』の略。

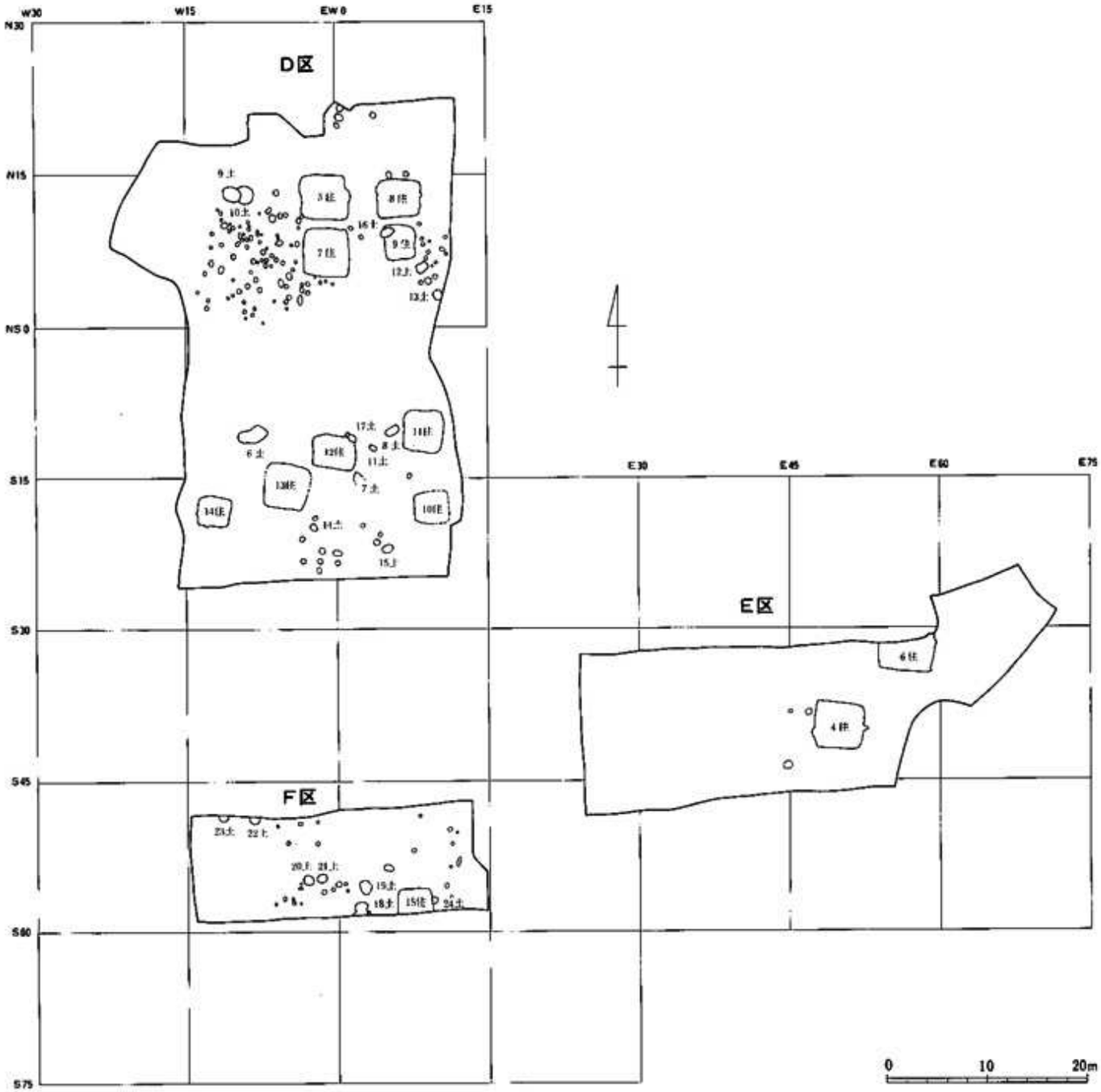
※市No.：松本市文化財調査報告No.の略。

古　墳　名

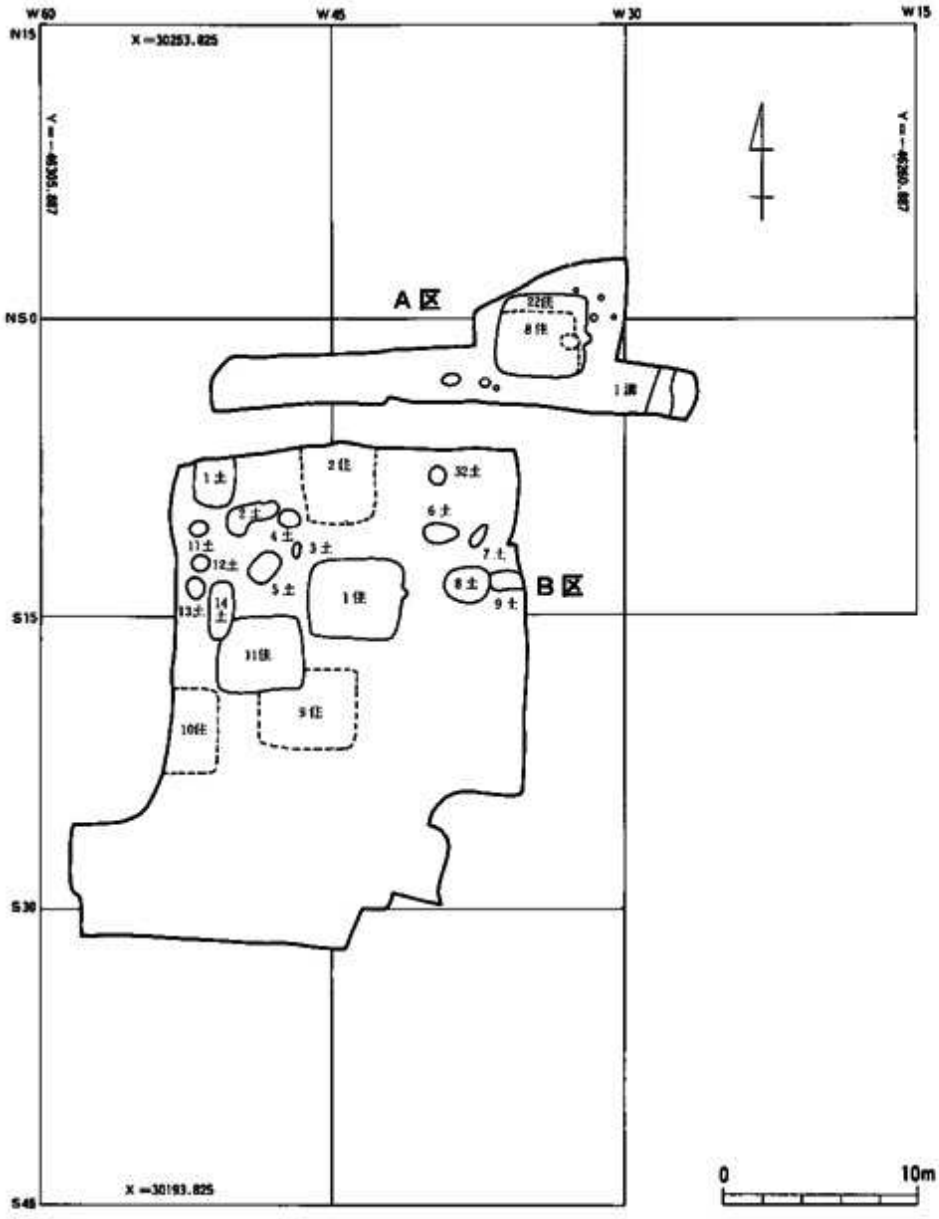
A　山　城	F　下屋敷	K　松　岡	P　大屋敷
B　高根塚	G　塚　畑	L　水汲１～５号	Q　妙義山１～３号
C　土取場	H　円筒埴輪出土地点	M　本社峯	
D　塚　田	I　猫　塚	N　茶臼山	
E　西　原	J　矢崎１～３号	O　桜ヶ丘（中期末）	



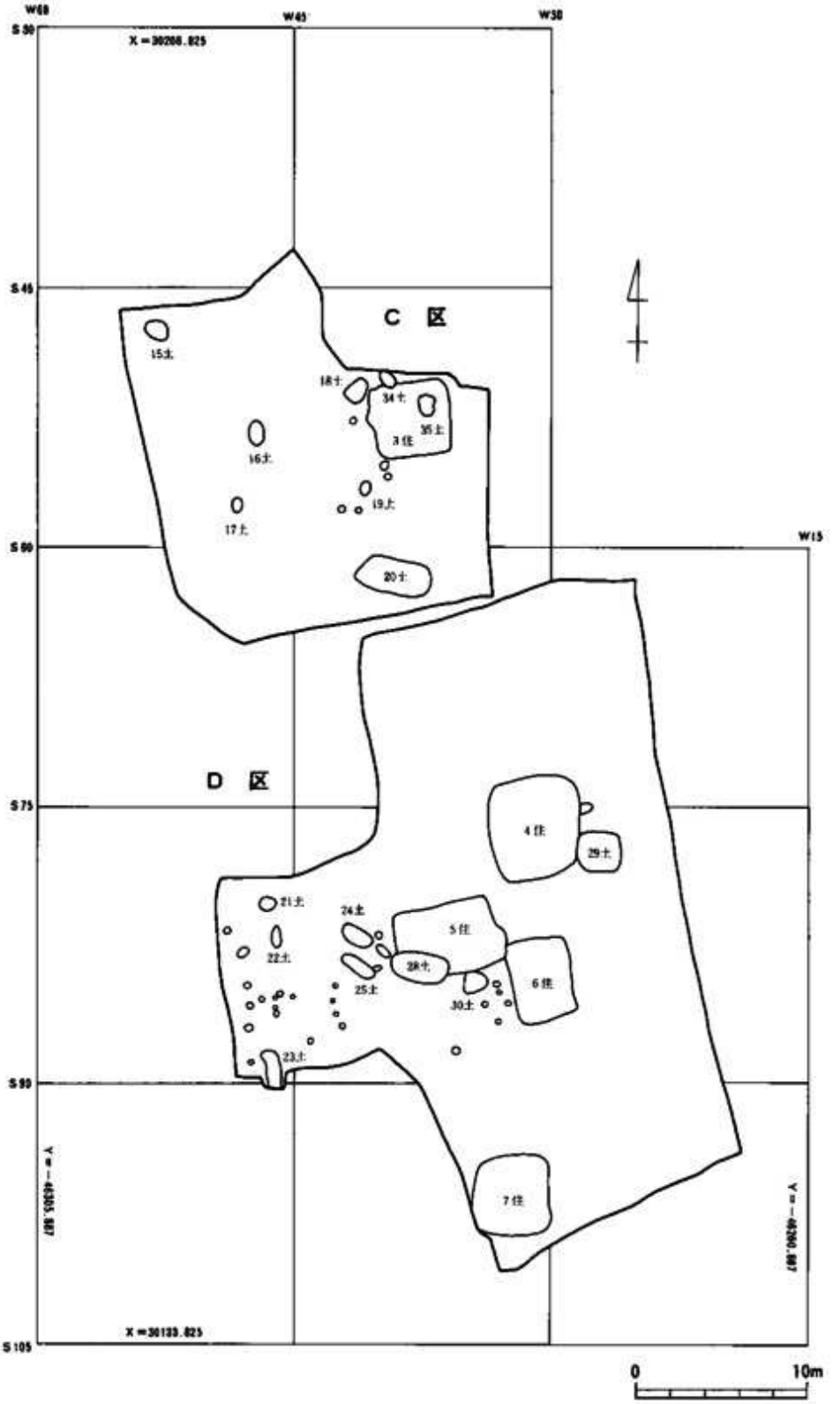
挿図2　調査範囲



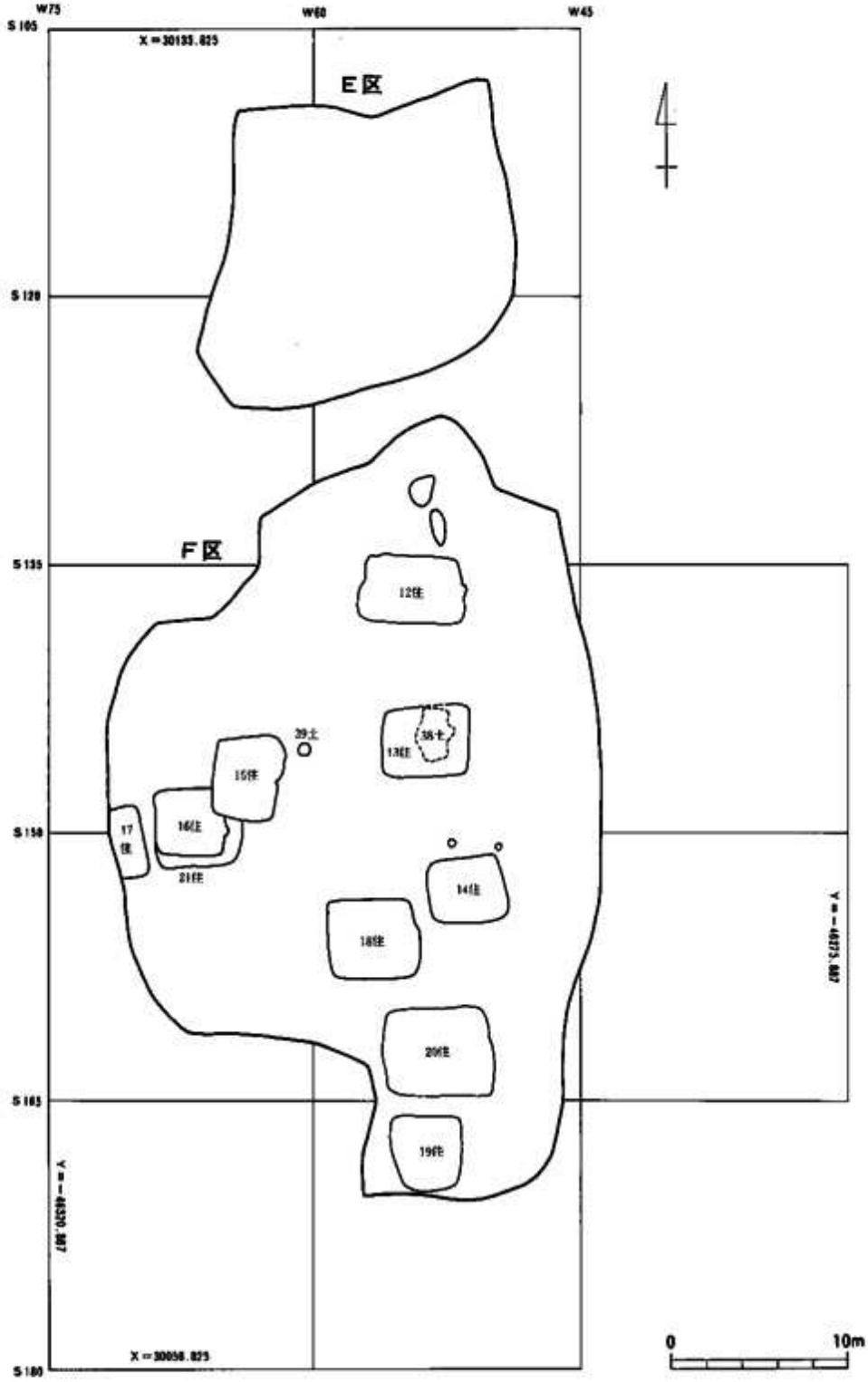
挿図3　宮の上遺跡遺構配置



挿図4　原畑遺跡遺構配置（1）



挿図5　原畑遺跡遺構配置 (2)



挿図6　原畑遺跡遺構配置 (3)

第３章　調査結果

第１節　調査の概要

今回の調査は岡田町集落と国道142号線に挟まれた水田地帯が対象となった。この地域は東側、国道に沿って南北に落差１～３ｍの段丘崖が、西側では岡田町集落の載る段丘面との間に低地面がそれぞれ走り、この間の微高地面に集落址が存在するものと推定し、２遺跡７地区を設定、調査を実施した。宮の上遺跡は第１次調査からの連番で北からＤ区（1277㎡）・Ｅ区（606㎡）・Ｆ区（299㎡）とし、原畑遺跡では北からＡ区（94㎡）・Ｂ区（436㎡）・Ｃ区（330㎡）・Ｄ区（717㎡）・Ｅ区（249㎡）・Ｆ区（85㎡）と命名、調査面積の合計は宮の上遺跡2182㎡、原畑遺跡は2676㎡である。宮の上遺跡Ｄ地区と原畑遺跡Ｆ地区とは直線距離で320ｍを測る。

調査遺構の測量については宮の上遺跡と原畑遺跡で異なり、前者では任意の点から磁北を基準線として１辺３ｍの方眼区画を設定したのに対し、後者、原畑遺跡では近在の国家座標値の判明する基準点から振り出し、真北を基準として３ｍ区画の設定を行っている。

最後に今回の調査で検出された遺構、および出土遺物を以下、列記しておく。

宮の上遺跡

検出遺構	竪穴住居址	12棟（奈良１・平安11）
	土坑	24基（平安・中世）
	ピット	176基（平安・中世）
出土遺物	縄文時代	土器（中期）
		石器（打製石斧）
	奈良・平安時代	土器・陶器類（土師器・須恵器・灰釉陶器）
		石器（砥石）
		金属製品（鉄器）
	中世	陶磁器（陶器・青磁）
		金属製品（銭貨）

原畑遺跡

検出遺構	竪穴住居址	22棟（平安）
	土坑	32基（平安・中世）
	ピット	38基（平安・中世）
	溝状遺構	１基（平安）
出土遺物	縄文時代	土器（中期）
		石器（打製石斧）
	奈良・平安時代	土器・陶器（土師器・須恵器・灰釉陶器）
		石器（砥石）
		金属製品（鉄器）
	中世	陶磁器（陶器・青磁）
		金属製品（銭貨）

第2節　遺　構

1　宮の上遺跡

(1)　住居址（図版1～5）

①　第4号住居址（図版1）

位　置：E区　　**平面形**：隅丸長方形　　**規　模**：長480×短444×深32cm

床面積：18.9㎡　**主軸方位**：N－94°－E　　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：覆土は黒褐色を呈し、他地区に比較して粘性が強い。遺構の中央部を主体に拳～人頭大の礫が、破片化した土器類とともに中・下層に投げ込まれている。床面は暗褐色土層中にあり、若干堅い面をなす。P4～6に囲まれる範囲では両側より2～5cm程低い面をなす。

カマドは両袖を残存し、右袖3石、左袖2石を用いている。火床面はさほど焼けていないが中央に支脚石を残し、焚口底面に土師器杯2個体が置かれている。

他の床面施設としてピットが8基検出された。このうちP3～P6は東西壁に食い込んで設けられ、主柱穴と考えられる。P1は浅い皿状を呈し、床面レベルまで黒褐色土で埋立後、黄白色粘土を置いている。粘土は総量70kgを計り、水簸されていない原土である。この東端上面より鉄器片が1点出土している。

遺　物：土器類はカマド内に土師器杯・甕、および北壁～西壁下に杯類が完形あるいは一括で見られるほかはまとまったものはない。大半は礫とともに投げ込まれたり流入した破片である。器種は土師器杯・皿・椀・甕・小型甕、須恵器壺類、灰釉陶器皿が見られる。

その他、刀子・鎌等の鉄器が3点出土している。

帰属時期：7期

②　第5号住居址（図版1）

位　置：D区　　**平面形**：隅丸方形　　**規　模**：長456×短444×深32cm

床面積：16.7㎡　**主軸方位**：N－90°－E　　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：覆土は小礫を混入する暗褐色土で、やや砂質である。カマドから遺構中央部にかけての中・下層に10～40cm大の礫が多量に投げ込まれている。床面は黄褐色土中に構築され、薄く貼床を行うもののさほど堅くはない。

カマドは新旧2基が見られる。新カマドの残存状況は良好である。袖石は偏平な川原石や板状の石材をハの字状に組み、黄褐色土を貼る。天井部は奥部の石材が原位置に近い状態で残るほかは失われる。火床面中央に支脚石を残し、焚口底面は舌状に掘りくぼめられる。

旧カマドは東壁やや北寄りにあり、新カマドと接する。火床の掘り込みと奥部～煙道の張り出し

のみ残存し、石材を抜去後埋め立て、貼床がなされている。

ピットは総数20基と多い。このうち南東隅のP14は位置・形状から貯蔵穴とみなされる。P1・11・15・16は主柱穴と考えられるが、P1・11は外方に傾斜して掘り込まれており、柱が斜めに立てられていたものとみられる。P18～20は貼床下より検出されたものである。

遺　物：一括遺物は皆無に等しく、覆土中より礫とともに出土した土器片がほとんどである。特に図化するには至らなかったが、カマドから中央部にかけての上・中層に須恵器大甕1個体分の胴部片が散乱していた。土器類は土師器杯・椀・耳皿・台付鉢・甕・小型甕、須恵器甕が見られる。他には鉄器2点が存在する。

帰属時期：7期

③　**第6号住居址**（図版2）

位　置：E区　**平面形**：（方形）　**規　模**：長516×短？×深20cm

床面積：？m²　**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央・粘土

遺　構：土色の判別が困難なため検出面より約20cm掘り下げてプランを確認した。北部は調査区外へ延びている。覆土は粘性の強い黒褐色土で、礫の投げ込みは見られない。床面は暗黄褐色土中にあり、カマド～中央部でやや堅緻な貼床を施すものの、大半は平坦だが軟弱である。壁は黒褐色土中のため不明瞭である。

カマドは粘土袖の基底部と良く被熱した火床面を残し、内部には天井崩落土とともに土師器甕片が散乱していた。

東壁・南壁下には周溝が巡り、カマド脇（P3）、コーナー（P4・6）、南壁中央（P5）に柱穴と思われるピットが見られる。床面上からはP1・2・7の3基が検出されたが、P1については柱穴の可能性がある。

遺　物：床面上に小数の一括品が見られた。カマド～前庭部にかけて土師器甕・須恵器杯、南東隅付近に土師器甕、中央西寄りに須恵質の紡錘車が検出された。土器類は土師器甕・小型甕、須恵器蓋・杯・壺等の器種が存在する。

帰属時期：3～4期

④　**第7号住居址**（図版2）

位　置：D区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長476×短450×深28cm

床面積：19.0m²　**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：本址は黄褐色土中に構築され、プランの把握は明瞭であった。覆土は黒褐色土だが、壁際には黄褐色土粒を多含する流入土が見られ、またカマド前を中心に中～下層に15～40cm大の礫が集中的に投げ込まれている。

床面は黄色ブロックを多量に混じた黒褐色土を貼り、カマド前～中央部では非常に堅緻である。入口部に関連してか西壁下では１×2.5mの範囲がわずかに高められる。

カマドは大形で左右の袖石、被熱の顕著な火床面、支脚石を残すが、煙道の作り出しは不明瞭である。火床面上には天井部の石材が載っており、取り除くと多量の土師器甕片が遺存していた。

柱穴はその形態、深さから見てP2･4･5･7が該当する。このうちP2･7はやや斜めに外方に向かって掘り込まれ、柱が傾斜して立てられたことを示している。５住と共通した柱配置である。

南東隅には貯蔵穴と考えられる楕円形ピットが検出され、偏平な礫と共に杯類が多く出土した。礫はその遺存状況からピットを閉塞したか、あるいは底面に敷いたものと考えられる。

遺　物：遺物は土器類を中心に豊富である。床面付近の一括遺物としては、カマド、貯蔵穴内および南壁沿いでまとまっている他、Ｐ３より円筒形土器（75）、中央西寄りに甑（76）等が見られる。

土器類は土師器皿・杯・椀・小型甕・甕・甑・円筒形土器、灰釉陶器椀等が挙げられる。

帰属時期：８期

⑤　**第８号住居址**（図版３）

位　置：Ｄ区　**平面形**：隅丸長方形　**規　模**：長416×短376×深24cm

床面積：13.4㎡　**主軸方位**：Ｎ－90°－Ｅ　**カマド**：西壁中央・石組

遺　構：黄褐色土層中に構築されるが、上面の暗褐色土層中で検出したためプランの把握はやや困難であった。覆土は均質な黒褐色土で、カマド周囲、北東隅に礫の投げ込みが観察された。壁・床は明瞭に検出される。床面は平坦で、貼床がなされる。中央部では非常に堅緻である。

カマドは天井部を除き非常に良好に存していた。両袖は３列に石材を断面形ハの字状に配し、外側に黄褐色土を厚く貼る。火床面は一段掘りくぼめられ、強く被熱する。支脚石は見られない。内部には土師器甕の破片が多量に見られ、焚口には土師器杯が置かれていた。

カマド左脇には壁に接して須恵器横瓶（92）が据えられており、一部袖土が被っている。この口頸部は埋没過程で破損し、中央付近まで移動していた。またカマド右脇には灯明に用いられていたものか、煤の付着した灰釉陶器皿（86）が置かれている。北西隅には楕円形の貯蔵穴と思われるピットがあるが、遺物は少なく掘り込みも浅い。

ピットは総数18基が検出され、そのうち主柱穴はP3･7･8･9が該当する。Ｐ８は楕円形の土坑状を呈し、P14～17と共に貼床下から検出された。その外、各壁下に周溝が見られた。

遺　物：先に挙げたものの他、南西隅および北東隅に土師器甕が横倒しで出土し（91･93）、南壁沿いでは土師器小型甕、杯・皿等が見られた。また覆土中より刀子と思われる鉄器片が出土している。

土器類の内訳は土師器杯・椀・小型甕・甕・羽釜、須恵器横瓶・甕、灰釉陶器皿等である。

帰属時期：８期

⑥ **第9号住居址**（図版3）

位　置：D区　**平面形**：隅丸長方形　**規　模**：長340×短296×深8cm

床面積：9.4m²　**主軸方位**：N－5°－W　**カマド**：なし？

遺　構：本遺構は暗褐色土層中から掘り込まれるため検出は甚だ困難で、検出面を黄褐色土面まで下げてようやくプランを把握した。その結果壁は高いところでも7cm程度で、南壁はほとんど残存していない。床面は礫混じりの黄褐色土のため軟弱で、凹凸が激しい。

ピットは合計8基が検出されたが、積極的に柱穴と捉えられるものはない。浅い楕円形を呈するP7は埋土上面が被熱するが、カマドと断定できない。P4は床面中央にあり、周囲に人頭大の礫が遺存する。礫はピットに伴い、何等かの構築がなされていたものと考えられるが、原位置を移動している。また礫、ピット等に特に被熱の痕跡は見られない。

遺　物：床面・覆土中共に出土量は少ない。土器類は土師器皿・甕等が存在し、他に鉄製紡錘車が出土している。

帰属時期：7期　**備　考**：16土に切られる。

⑦ **第10号住居址**（図版3）

位　置：D区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長（344）×短（324）×深18cm

床面積：9.5m²　**主軸方位**：N－90°－W　**カマド**：南西隅？・石組？

遺　構：黒色土帯に存在するため西半部を除きプランの把握が不可能であり、床面・遺物の範囲から推定した。床面は礫混じりの黄褐色土層中にあり、平坦だが堅くはない。ピットは検出されず、南西隅に礫がかためられている。カマドとも考えられたが、火床面が見られず性格不明である。

遺　物：南西隅の礫周囲に土師器甕片が散乱するほか、北壁下、南東隅付近に土師器杯・黒色土器蓋（106）等が完形で見られた。土器類の器種は土師器蓋・杯・椀・小型甕・甕、灰釉陶器椀・瓶が挙げられる。

帰属時期：8期

⑧ **第11号住居址**（図版4）

位　置：D区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長402×短390×深20cm

床面積：14.0m²　**主軸方位**：N－5°－E　**カマド**：東壁中央

遺　構：礫混じりの黄褐色土層中に構築される。覆土は黒褐色土の単層だが、壁際では黄褐色土粒を含む流入土が観察される。覆土下層には中央部～南部に礫の投げ込みが見られ、P2、およびその東側に集中が見られる。前者ではピット内に礫が達している。床面は平坦だが軟弱である。

カマドはわずかに被熱のみられるP4付近と考えられ、この上部に構築材と思われる礫15個がたたみ置かれていた。ピットは4基が検出された。P1・2は大形で皿状を呈し、P1は底面に白色

の生粘土を貼っている。Ｐ２は東隅に円形ピットを有し、上面に焼礫が見られた。

遺　物：完形品の一括出土は見られないものの、覆土中およびピット内から多量に土器類が出土している。その内訳は土師器皿・杯・椀・小型甕・甕・円筒形土器等である。Ｐ２内より出土した土師器杯には墨書が認められた（112）。その他特殊な石器として良く磨かれたチャートの円礫が124・130・131・133の土器とともに得られている。

帰属時期：７期

⑨　**第12号住居址**（図版４）

位　置：Ｄ区　**平面形**：隅丸長方形　**規　模**：長424×短336×深18cm

床面積：12.9㎡　**主軸方位**：Ｎ－５°－Ｅ　**カマド**：なし

遺　構：覆土は暗褐色を呈し、全体に拳～人頭大の礫が散在する。床面ははっきりせず、不明瞭である。カマド・ピット等床面施設は検出されなかった。

遺　物：小数の土器片が出土したのみで、図化可能なものはない。

帰属時期：不明　**備　考**：17土、Ｐ45に切られる。

⑩　**第13号住居址**（図版４）

位　置：Ｄ区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長440×短424×深28cm

床面積：15.7㎡　**主軸方位**：Ｎ－101°－Ｅ　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黄褐色礫混土層中に構築される。覆土内への礫の投げ込みは西壁下に集中が見られるほかは散在的である。床面は平坦だが、貼床は観察されない。カマドは左袖石および被熱の弱い火床面を残存する。ピットは３基が検出されたが、柱穴として捉えられるものはない。

遺　物：覆土中、床面の出土遺物は少ない。カマド付近、および西壁の礫集中部よりややまとまって土器片が出土したのみである。土器類は土師器皿・杯・椀・甕・円筒形土器がみられる。

帰属時期：７期

⑪　**第14号住居址**（図版５）

位　置：Ｄ区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長320×短296×深20cm

床面積：8.6㎡　**主軸方位**：Ｎ－89°－Ｗ　**カマド**：西壁やや南寄り・石組

遺　構：礫層中に構築され、暗褐色の覆土が観察される。中央部には拳～人頭大の礫が顕著に投げ込まれている。カマドは石材３列からなる両袖部、支脚石を残存するが、火床面の被熱はあまり観察されない。焚口～南西隅付近の床面には天井材と考えられる石材が散乱している。ピットは２基が検出されたが、明瞭な柱穴は見られない。

遺　物：カマド内および南西隅より土師器類がまとまって出土したが、遺物の大半は覆土中から破

片で出土したものである。土器類の器種は土師器杯・椀・甕が見られる。

帰属時期：8期

⑫ **第15号住居址**（図版5）

位　置：F区　**平面形**：（方形）　**規　模**：長340×短？×深24cm

床面積：？㎡　**南北軸方位**：N－90°－E　**カマド**：？

遺　構：礫層中に構築される。覆土は黒褐色砂質土で、礫の投げ込みは見られない。カマドは調査区外に存在するのか、調査部分では確認されない。柱穴は見られず、床面中央部に不定形の浅い落ち込みが検出された。

遺　物：出土量は少なく、大半は覆土中からの出土である。土師器杯、灰釉陶器椀等の土器類が出土している。

帰属時期：13期　**備　考**：24土を切る。区域外にかかる。

(2) **土　坑**（図版6）

D地区16基、F地区8基が検出された。D地区ではピットとともに住居址群の周辺に集中する傾向がある。住居址群と同様平安時代に属する確実なものは9・10・13・16・24土が挙げられる。9・10土はほぼ同形同大の円形すり鉢状の形態で、自然埋没による黒色土の堆積が観察されるが底面は明瞭である。16土は楕円形を呈し、底面に一部黄色の厚い貼土が見られる。上面には見慣れない形態の土師器鉢（152）が正位で、また覆土中より小形の鉄斧が1点出土している。24土は壁際に土師器杯・椀が並べて置かれている。

中世に属するものはいずれもF地区で検出された。18～21土が確実な例である。18土は調査区外にかかるため全形は不明だが、覆土中に礫が多く見られ、元祐通宝1点が出土している。墓址の可能性が高いものである。19・20・21土は円形で平坦な底面のの掘り方を有し、ブロックを多く混じる人為的な埋土が観察される。

その他の土坑は遺物の出土もなく年代の不明で、掘り込みも不定形かつ底面の不明瞭なものが多いことから人為的に掘り込まれたものか疑問が残る。6土は覆土や底面のあり方からいわゆる風倒木址に類するものと考えられる。

(3) **ピット**

総数176基が検出された。その分布はD区5・7住の西側一帯に大半が集中し、他にも9住東側、F区に若干のまとまりが見られる。D地区の群は住居址と同年代のものと推定され、F地区のまとまりは土坑と同じ中世のものと考えられる。

平安時代のものはそのほとんどが浅い円形ピットで、柱痕も見られず建物址や柵を構成するよう

な配置をとらない。他にこれといった特徴がなく、その性格は柱穴の可能性が低いという点を除き不明である。

中世のものも特に規則的な配置が見られないが、同時期によく見られる小径の円形ピットである。

2　原畑遺跡

(1)　住居址（図版７～14）

①　第１号住居址（図版７）

位　置：Ｂ区　　**平面形**：隅丸長方形　　**規　模**：長484×短420×深30cm

床面積：17.6㎡　**主軸方位**：Ｎ－90°－Ｅ　　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黄褐色土中に構築される遺構である。覆土は北～西にかけて壁際堆土が形成されるが、他は黒褐色の単層である。礫の投げ込みは中央から西側に散在的に見られる。床面はカマド～中央部に薄く貼床が施され、全体に平坦かつ堅緻である。

カマドは両袖および火床面が残存する。袖部は石芯の周囲に暗黄褐色土を貼っている。火床面はよく被熱し、土師器甕片や天井部の石材が載っている。

柱穴は判然としないが、大小20基のピットが検出された。そのうち特徴的なものとして北東隅のＰ２は直径1.5mの大形皿状を呈し、外周に沿って10～40cm大の礫が配されている。西壁に沿って存在する長方形のＰ１は平坦な底面をなし、北寄りに口頸部を欠き土師器甕下半部で蓋をした須恵器長頸壺（175）が立てられている。中央やや南寄りの上面では鉄製紡錘車が出土している。本址に伴うものとして捉えたが、あるいは本址以前に存在した土坑墓の可能性も残される。中央南寄りに位置するＰ５は円形掘り方内に土師器小型甕２個体（180）が並べられていた。Ｐ13～20は貼床下より検出されたものである。

遺　物：出土遺物は内容・量共に豊富である。南東隅では床面上に完形の杯・椀類が多く見られるほか、北西隅をはじめとする覆土中～下層に大形の土器片が目立つ。また鉄器の出土が多く、北東隅およびカマド南脇から刀子、南西隅寄りから鎌、さらに前述の紡錘車が出土している。

土器類の器種は土師器杯・椀・皿・鉢・小型甕・甕、須恵器長頸壺・四耳壺、灰釉陶器椀・皿が見られる。

帰属時期：７期　　**備　考**：10土を切る。

②　第２号住居址（図版７）

位　置：Ｂ区　　**平面形**：（長方形）　　**規　模**：長？×短356×深12cm

床面積：？㎡　**主軸方位**：Ｎ－1°－Ｅ　　**カマド**：？

遺　構：本址は北部が調査区外に延び、床面がほとんど検出面に露出していた住居址である。従って遺構の形態・規模は床面の範囲を手掛かりに推測した。暗黄褐色土中に構築され、薄く貼床を施

している。カマドは調査範囲内では検出されなかったが、中央部にわずかに焼土面が見られる。ピットは8基が検出されたが、明確に柱穴と見られるものはない。P2・3・6は内部に遺物・礫が存在した。

遺　物：ほとんど床面での検出となったため、出土量は少ない。土器類は土師器杯・椀・小型甕・盤等が存在、他に石器として砥石が見られる。

帰属時期：7～8期　　**備　考**：区域外にかかる。

③ **第3号住居址**（図版7）

位　置：C区　**平面形**：方形　**規　模**：長484×短420×深12cm

床面積：17.1m²　**主軸方位**：N－92°－W　**カマド**：西壁中央

遺　構：黄褐色礫混土層中に構築される。覆土中への礫の投げ込みは少ない。床面は黒色ブロックを混じる黄褐色土を貼り、中央部では堅緻である。カマドは火床面のみ残し、袖部は失われていた。床面上からは4基のピットが検出された。P3・4はそれぞれ南西、北東隅に存在する大形のピットで、後者には覆土中に礫が多く見られた。

遺　物：覆土中・床面より小数の土器完形品、破片が出土した。土師器杯・皿・椀・鉢・甕等が見られ、土器以外では鉄器、砥石が出土している。

帰属時期：7期　　**備　考**：34・35土に切られる。

④ **第4号住居址**（図版8）

位　置：D区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長568×短520×深44cm

床面積：23.6m²　**主軸方位**：N－87°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黄褐色砂礫層中に構築される。覆土上～下層に礫・土器片の投げ込みが顕著に見られる。床面は黒色と黄色の混土を薄く貼り、部分的にかなり締まる。壁の立ち上がりは他の住居址に比べ高い。カマドは両袖石、火床面を残存する。火床面は堅く焼け締まり、南東隅にはカマドに用いられたと思われる石材がかためられていた。主柱穴はP1・3・12・16、P2・4・11・14の2組が検出され、前者を新と捉えた。

遺　物：床面上の一括遺物は見られない。覆土中にはかなりの量の土器片に加え、5個体分の平瓦片が投げ込まれていた。須恵器大甕（227）は覆土全域に破片が散乱していた。

土器類の器種は土師器杯蓋・杯・皿・椀・盤・小型甕・甕・円筒形土器、灰釉陶器皿・椀が見られ、土師器杯（198）には「矢主？」の墨書が見られた。また珍しい器種として土師器の蓋（194）が出土している。その他土器以外ではチャートの円礫が出土している。

帰属時期：8期　　**備　考**：50土を切る。29土に切られる。

⑤ **第5号住居址**（図版9）

位　置：D区　**平面形**：長方形　**規　模**：長588×短416×深18cm

床面積：21.5㎡　**主軸方位**：N－77°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黄褐色砂礫層中に構築される。プランのあり方から2棟の切り合いを誤認した可能性もあるが、カマドは1基しか検出されなかった。覆土は薄く壁は5cm程残存するのみである。床面は貼床が軟弱で、凹凸が激しい。カマドは壁外に張り出し、袖は失われている。ピットはP1・3・4・13・14・16等柱穴の可能性があるものの他、南西隅に大形で内部に礫を含むP12等も検出された。

遺　物：床面付近からの出土はほとんどない。量的にはわずかで、土器類には土師器杯・椀・小型甕・甕、須恵器長頸壺、灰釉陶器耳皿等の器種が見られる。また南東覆土内よりミニチュア土器の体部と思われる土師器片が1点出土しているが、本址に伴うものと断定できない。

帰属時期：7～8期　**備　考**：6住を切る。28土に切られる。

⑥ **第6号住居址**（図版9）

位　置：D区　**平面形**：長方形　**規　模**：長484×短352×深20cm

床面積：14.9㎡　**主軸方位**：N－15°－W　**カマド**：なし

遺　構：黄褐色砂礫層中に構築される。覆土中には礫がほとんどなく、明瞭な床面が検出された。カマドは見られず、中央北寄りに存在するP3の周囲がわずかに焼けていた。柱穴はP1・2・4・5の4基が該当し、P1では直径10cm程の柱痕が空洞となって検出された。

遺　物：遺物はわずかな土器片と鉄器が1点出土したのみである。

帰属時期：不明　**備　考**：5住に切られる。

⑦ **第7号住居址**（図版8）

位　置：D区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長448×短428×深28cm

床面積：15.7㎡　**主軸方位**：N－87°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：本址はその形態において4住と似る。暗褐色土中で検出したためプランの把握に難渋を極めたが、壁、床の大半は黄褐色砂礫土中にある。床面は黄褐色土をわずかに貼り、平坦かつ非常に堅緻である。

カマドは右袖の一部を残すものの大半は失われる。火床面は煙り出しに向かい傾斜して厚く焼けており、土師器甕片が遺存していた。ピットは8基が検出されたがいずれも浅く、柱穴と断定できるものはない。

その他の施設として、床面中央付近に直径1.2m程の被熱面が存在し、北側に接して60×50cm、厚さ13cmの平石が底面を床面下に埋めこんで配されていた。石材の表面は若干の磨滅が見られる。

遺　物：中央部の覆土下層から床面に完形の土器類が見られたが、全体量はさほど多くない。土器

類は土師器杯・鉢・小型甕・甕、須恵器杯・蓋・長頸壺等の器種がある。このうち土師器杯1点（247)、須恵器杯2点（239・241）に「□葛野」の墨書が見られる。また本址への混入品だが美濃須衛産と考えられる高台付杯が1点見られる（238)。その他、鉄釘1点が出土している。

帰属時期：7期

⑧ **第8号住居址**（図版10)

位　置：A区　**平面形**：長方形　**規　模**：長408×短312×深32cm

床面積：11.3㎡　**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：遺構上半部が黒褐色土層中に存在し、プランの把握は困難であった。覆土は暗褐色を呈し、礫の投げ込みはさほど多くない。床面は平坦で、中央部を主体に貼床を施す。

カマドは天井部を除き良好に遺存する。両袖は芯材に平石を2～3石用い、黄褐色の粘質土を厚く貼る。煙り出し先端部は円形ピット状を呈している。

カマド脇～南東隅の床面上には1m四方の範囲に厚い平石8枚がかためて置かれ、この周囲の床面上に須恵器長頸壺（273)、土師器小型甕（269・270）等が石の上から転落したかのように横倒しになり、その他杯等の完形品が存していた。

ピットは7基が検出され、P1・2・4・5が柱穴にあたるものと考えられる。

遺　物：先に挙げたものの他、全域で中～下層に大形の土器片の出土が多い。土器類の器種は土師器杯・椀・長頸壺・小型甕・甕・円筒形土器、灰釉陶器皿等が存在する。

帰属時期：8期　**備　考**：22住を切る。

⑨ **第9号住居址**（図版9）

位　置：B区　**平面形**：（長方形）　**規　模**：（長492×短392×深8cm)

床面積：(18.9㎡)**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央

遺　構：本址は黒褐色土中に構築され、壁はおろか床面の把握も困難を極めた。従って遺物などの散布範囲やカマドから住居址の範囲を推定するにとどまった。床面は黒褐色礫混土層上面にあり、貼床等は見られない。カマドは火床面のみ残存する。

遺　物：床面中央付近に土器類が散在するほか、覆土が薄いため量は少ない。土器類の器種は土師器杯・椀が確認された。土器以外では鉄器、銭があるが後者は中世の混入品である。

帰属時期：7期　**備　考**：11住に切られる。

⑩ **第10号住居址**（図版10)

位　置：B区　**平面形**：（方形）　**規　模**：長－×短432×深10cm

床面積：不明　**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央北寄

遺　構：黒色土層中にあり、壁の確認が不可能であった。従ってカマド、遺物の散布状況からその範囲を推定した。覆土中には遺物とともに拳～人頭大の礫が多数投げ込まれている。床面は把握が困難で、貼床等見られない。カマドは火床面を残し、土師器甕が遺存していた。ピット・柱穴等も土色の分別が著しく困難なため検出できなかった。

遺　物：礫とともに完形に近い土器が投げ込まれている。その器種は土師器杯・椀・盤・小型甕・甕・円筒形土器等が存在する。その他刀子が１点見られる。

帰属時期：７期　　**備　考**：調査区外にかかる。

⑪　**第11号住居址**（図版11）

位　置：Ｂ区　**平面形**：長方形　**規　模**：長426×短380×深22cm

床面積：14.3㎡　**主軸方位**：Ｎ－90°－Ｗ　**カマド**：西壁中央

遺　構：本址は黒色土層中に構築される住居址のため、遺構輪郭、壁が不明瞭であった。覆土内への礫等の投げ込みもほとんどなく、遺物も少ない。床面は黄色土をわずかに貼るが堅くはなく、南半部は黒色土内に存在する。カマドは焼けの弱い火床面を残すのみで、袖、煙道等の施設は確認されなかった。ピットは４基検出されたが、明確に柱穴と捉えられるものはない。

遺　物：カマド～南西隅の床面上に土師器杯・甕等が遺されていたほかは遺物の出土は少ない。土器類は土師器杯、須恵器杯等の器種が見られる。

帰属時期：７期　　**備　考**：９住を切る。14土に切られる。

⑫　**第12号住居址**（図版11）

位　置：Ｆ区　**平面形**：長方形　**規　模**：長600×短380×深24cm

床面積：19.1㎡　**主軸方位**：Ｎ－90°－Ｅ　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黄褐色土層中に構築される。覆土は黒褐色の粘質土で、全体に下層まで礫の投げ込みが多い。床面は平坦で、中央部から西側を厚く貼床する。この貼床部分は方形プランをなし、東辺の中央に焼土面を伴うことから、本住居址の古い段階の遺構部分と捉えられ、東壁、カマドが東側に拡張されたものとみなされる。

カマドは火床面と基底部の袖石を遺し、内部に多量の土師器甕片が見られた。袖石はもろい砂岩質の小角礫を用いる点で他の住居址と異なっている。

柱穴は規則的な配置が見られず、特定できないが、Ｐ2･4･7･8･10･11･12･13等が可能性があろう。貯蔵穴の可能性が考えられるものとしてＰ1･3が挙げられる。Ｐ１は上部を欠いた須恵器甕を埋設している。その他、西壁南半部が外方に張り出し、直下に大形の円形ピットが見られる（Ｐ14）。この張り出し部分は掘り方底面が一段深く貼床が厚い。その北端に土師器杯類、小型甕等８個体が正位に重ね置かれ、埋められていた。

遺　物：覆土中全域より土器類の一括品が多く出土しており、また旧住居部分の貼床内からも土師器片が多く得られた。土器類の器種は土師器杯・椀・皿・鉢・小型甕・甕・円筒形土器、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀等が見られる。これらのうち北西隅付近床面からの土師器皿（326）と南壁中央付近の覆土中より得られた椀（318）に「得」、さらに前述の西壁床下に埋納されていた土師器杯（316）に「瀧」の墨書が認められた。

帰属時期：7期

⑬　**第13号住居址**（図版12）

位　置：F区　**平面形**：長方形　**規　模**：長480×短392×深20cm

床面積：16.5m²　**主軸方位**：N－90°－W　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黒色土層中に掘り込まれる住居址である。覆土内には主軸線上に礫の投げ込みが見られる。床面はわずかに貼床を行うものの大半は黒色土をそのまま用いており、覆土との分別は著しく困難であった。カマドは両袖石およびよく被熱した火床面を残し、天井等の構築材が周囲に散乱する。ピットはカマド両脇、および東壁下に検出されたが、柱穴は見られないようである。

遺　物：カマド付近に土師器甕・円筒形土器等、東壁寄りに土師器杯・甕等の一括遺物の集中が見られた。これらは投げ込まれた礫とほぼ同レベルで出土し、床面からは若干浮いている。土器類は土師器杯・椀・皿・鉢・小型甕・甕、灰釉陶器椀・皿等が見られ、土師器甕（361）には補修痕が観察された。

帰属時期：7～8期　**備　考**：38土を切る。

⑭　**第14号住居址**（図版12）

位　置：F区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長432×短380×深20cm

床面積：14.2m²　**主軸方位**：N－82°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黄褐色礫混土層中に掘り込まれ、プランの確認は容易であった。床面は平坦だがさほど堅くはなく、薄い貼床が見られる。

カマドは2列の石材からなる袖部と支脚石、火床面を残す。内部には土師器の甕片が多量に見られた。火床面の被熱はそれほど顕著でない。

ピットは8基確認されたが、柱穴は判然としない。P5は位置、形態から貯蔵穴と考えられ、土師器甕1個体分が遺存していた。P8はカマド構築の際の掘り方であろうか、住居使用時には塞がれていたものと思われる。

遺　物：カマド周辺に若干の一括遺物が遺されていたが、全体量は少ない。土師器杯・椀・皿・小型甕、須恵器椀・蓋等の土器類が見られる。

帰属時期：7期

⑮ **第15号住居址**（図版12）

位　置：F区　**平面形**：不整長方形　**規　模**：長472×短400×深20cm

床面積：15.8m²　**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央

遺　構：暗黄褐色土層中に掘り込まれる。覆土は暗褐色を呈する粘質土である。床面は全体に10～20cm程度黄褐色土と暗褐色土の混土で貼床される。カマドは良く焼けた火床面のみ残し、袖は失われている。ピットは床面上で4基、貼床除去後に5基が確認される。この内P1･2は位置･形態から貯蔵穴、P3･4は柱穴と見られる。

遺　物：床面上の一括遺物は少ないが、カマド内より土師器甕が、南西隅寄りより須恵器長頸壺が出土した。土器類は土師器杯・皿・椀・小型甕・甕・甑・円筒形土器、須恵器甕、灰釉陶器皿等の器種が見られる。その他珍しい遺物としてほぼ完形の鉄銛1点が出土している。

帰属時期：8期　**備　考**：16・21住を切る。

⑯ **第16号住居址**（図版13）

位　置：F区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長392×短372×深36cm

床面積：12.4m²　**主軸方位**：N－90°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：暗褐色土層中で検出された。中～南部に礫の投入が多く見られる。床面は中央部に黄褐色土の貼床が見られ、平坦である。カマドは袖石、火床面を残す。ピットはP1～5が見出されたが、いずれも浅い。柱穴は見当たらない。

遺　物：覆土中からの土器片の出土が多い。一括品はカマド内に土師器杯、南壁下に土師器小型甕が見られる程度である。土器類の器種は土師器杯・椀・小型甕等が挙げられ、杯（397）には「宗」の墨書がなされている。土器以外では鉄器として刀子の先端部が出土している。

帰属時期：8期　**備　考**：21住を切る。15住に切られる。

⑰ **第17号住居址**（図版11）

位　置：F区　**平面形**：（方形）　**規　模**：長？×短403×深23cm

床面積：？m²　**主軸方位**：N－82°－E　**カマド**：？

遺　構：暗褐色土層中で検出された住居址で、遺構の大半が調査区外にかかっている。覆土中北東寄りに礫の投げ込みが見られる。床面は中央部に黄褐色土中にあるが軟弱である。カマドは西壁に存在するものか、東壁には確認されなかった。ピットは2基が南東隅で検出されたがいずれも浅い。

遺　物：北寄りの東壁下に土師器杯・小型甕・甕等がまとまっているが、一部の調査のため全体量は少ない。

帰属時期：7期

⑱ **第18号住居址**（図版13）

位　置：F区　**平面形**：方形　**規　模**：長508×短464×深24cm

床面積：20.3m²　**主軸方位**：N－89°－E　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：黒色土層中に掘り込まれるため、プラン、床面の検出は著しく困難であった。西半部の覆土中～下層には礫の集中が見られる。床面は東半部で薄く黄褐色土の貼床が見られる。カマドは両袖、火床面を残し、内部には土師器甕片が多量に遺されていた。ピットは12基が検出されるが、柱穴と断定できるものはない。P12は内部に川原石が6石詰め込まれている。

遺　物：覆土中に土器片が多く見られた。一括遺物はカマド内の他、南壁中央下に完形の土師器円筒形土器2個体が遺されていた。土師器杯・皿・椀・鉢・盤・小型甕・台付小型甕・甕・円筒形土器、灰釉陶器椀・耳皿等の土器類が出土している。

帰属時期：8期

⑲ **第19号住居址**（図版14）

位　置：F区　**平面形**：隅丸方形　**規　模**：長408×短396×深20cm

床面積：13.5m²　**主軸方位**：N－90°－W　**カマド**：西壁中央

遺　構：黒褐色土層中に構築される遺構である。覆土中への礫の投げ込みは少ない。床面は東西方向に若干傾斜するが平らである。カマドは火床面のみ残し、袖は痕跡すら見出されなかった。ピットは6基が確認され、P1･3･4･7は位置的に柱穴の可能性もある。

遺　物：遺物はカマド周辺、および南東隅付近に一括品の集中が見られる。土師器杯・椀・皿・耳皿・盤・小型甕・甕、灰釉陶器皿等の土器類の他、布目の平瓦片が南東付近より散乱して出土している。

帰属時期：8期

⑳ **第20号住居址**（図版14）

位　置：F区　**平面形**：長方形　**規　模**：長628×短500×深28cm

床面積：26.6m²　**主軸方位**：N－90°－W　**カマド**：西壁中央・石組

遺　構：黒色土層中に設けられ、今回調査された住居址の中では最大規模である。覆土は上層で黒褐色を呈し、中央～東部に散在的な礫の投げ込みが見られる。床面は暗黄褐色土を貼るが、覆土との分別はやや不明瞭である。

カマドは袖石1列を残す。埋土上～中層からは土師器甕破片の他完形の土師器杯2個体が上向きに出土する。火床面は良く焼け、焚口寄りの右袖に接して土師器小型甕（469）を逆位に埋めこみ、その上に土師器杯2個体（444・450）を逆位に被せた施設が見られた。位置的に支脚とは考え難い。また中央には全く被熱していない黒色土器耳皿（461）が置かれていた。カマド廃棄時の祭祀にか

かわるものであろうか。

ピットは21基が検出される。この内カマド左脇のＰ１は大形皿状を呈し、内部に礫が見られる。上面では土師器杯・甕が一括で出土し、貯蔵穴と考えられる。南東隅のＰ14はやはり内部に土器が見られた。その他、Ｐ6･13･16･18･21等に柱穴の可能性を残すが、配置が整わず判然としない。

遺　物：カマド～南西隅にかけて一括遺物が存在するほか、中央～東部でも散在的に土師器杯・甕等がみられ、東寄りからは珍しい形態の土師器皿で補修痕を残すものが２個体分出土している（462・463）。土器類は土師器杯・椀・皿・小型甕・台付小型甕・甕、黒色土器耳皿、灰釉陶器椀・蓋等の器種、石器では良く磨かれたチャートの円礫が２点が存在する。なお土師器杯(447)・椀(452)各１点に墨書が認められ、後者は「春」と判読される。

帰属時期：７期

㉑　第21号住居址（図版13）

位　置：Ｆ区　　**平面形**：長方形　　**規　模**：長444×短372×深28cm

床面積：(16.5m²)**主軸方位**：Ｎ－90°－Ｅ　　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：暗褐色土層中に掘り込まれる。床面は黄褐色土層中に設けられ、16住よりわずかに高い。カマドは袖の大半を失うが、奥壁の２石は残存する。火床面の被熱はさほど顕著ではない。ピットは２基が検出されるが、柱穴は不明である。

本址と16住の関係は軸を揃え２壁を共有していることから建て替えによるものと考えられるが、新住居址が規模を縮小している点に疑問を残す。

遺　物：カマド周辺に土師器杯・甕等がわずかに残されるが、遺構の大半を16住に切られるため出土量は少ない。土師器杯等の土器類が見られる。

帰属時期：７期　　**備　考**：15・16住に切られる。

㉒　第22号住居址（図版10）

位　置：Ａ区　　**平面形**：隅丸方形　　**規　模**：長444×短408×深32cm

床面積：(15.5m²)**主軸方位**：Ｎ－90°－Ｅ　　**カマド**：東壁中央・石組

遺　構：覆土は黒褐色を呈し、８住との分別は非常に困難であった。床面は黄褐色土層中にあり、８住よりわずかに高い。カマドは８住構築時に袖の大半を破壊されるが、火床面は残存している。ピットは３基が検出されたが、柱穴は見られない。Ｐ３は位置的にみて貯蔵穴であろうか。

本址と８住の関係は同位置での建て替えと考えたいが、そのあり方は前述の16・21住のあり方と酷似し、軸・壁を共有しながら規模を縮小している。

遺　物：北東隅に礫とともに遺物の集中が見られる。土師器杯等の土器類が存在する。

帰属時期：７～８期　　**備　考**：８住に切られる。

(2) 土　坑（図版15～17）

B地区13基、C地区７基、D地区７基、F地区５基、合計32基が検出された。時代的には平安時代のものと中世のものが存在するが、出土遺物が少ないため確実に時期決定できるものは少ない。

平安時代に帰属するものとして１・23・28・29・38土が挙げられる。１土は長方形を呈するものと考えられ、平坦な底面を有する。覆土内には小礫、土器片等が混入している。23土は細長い形態で、北端の底面に土師器杯が伏せられており、墓址の可能性がある。28土は楕円形を呈し、浅く平坦な底面は黄色土と黒色土で堅く貼床がなされる。29土は方形の竪穴状を呈する。掘り込みは深く直だが、西壁だけは傾斜がつけられる。覆土は中央部に落ち込むように粘土層が存在し、その上下は流れ込みによる堆積が観察される。粘土層はその状況から本土坑を閉塞していたものが、埋没時に落ち込んだものと解釈される。平坦な底面には薄く貼床が施される。北東隅と中央部には円形の柱穴状を呈するピットが見られる。38土は13住床面精査時に検出され、長方形状を呈する。東壁中央に焼土面の張出があり、その状況から13住以前に存在した住居址の残痕の可能性もある。

中世に帰属するものは４・11～19・21・34・35土等が挙げられ、いずれもB～E地区に分布する。形態的には円形ないし楕円形を呈し、内部に礫の見られるものが多く、４・11～13・15・16・19・35が該当する。その他長楕円形で平坦な底面を呈し、内部に礫を集積する14土の様な形態が存在する。これらの使用目的を示唆するような遺物は16土で青磁片が１点出土したほかは皆無に等しい。

その他の土坑として、いわゆる風倒木址と考えられるものが多く存在し、２・５・８・９・20・24・25・37土等、楕円形ないし三日月形で底面が不安定なものが挙げられる。これらの形成時期については住居址に切られるものが見られ、平安時代かそれ以前のものと考えられよう。

(3) ピット

総数38基が検出された。時代的には平安時代～中世と考えられるが、遺物の出土がないため個々の帰属時期は特定できない。その分布は多くがD区西部にあり、小形の円形を呈する。一部直線状に配列する部分もあるが、建物址として捉えられるものはない。

(4) 溝状遺構（図版17）

A地区で１条検出された。幅70～120cm、深さ40～50cmを測り、底面には若干流水の痕跡が窺える。平安時代の土器片を含み、同時期の遺構と考えられる。ごく一部の調査のため、その全貌は不明である。

第3節　遺　物

1　土器・陶磁器

(1)　奈良・平安時代の土器・陶器（図版18～45）

宮の上遺跡・原畑遺跡から出土した土器・陶器は主として奈良・平安時代の範疇で捉えられる。本報告書では、これらのうち実測可能な480点を図化した。なお、本文内で使用する器種・器形・編年観は文献1に従った。

①　種類・器種（挿図7・8）

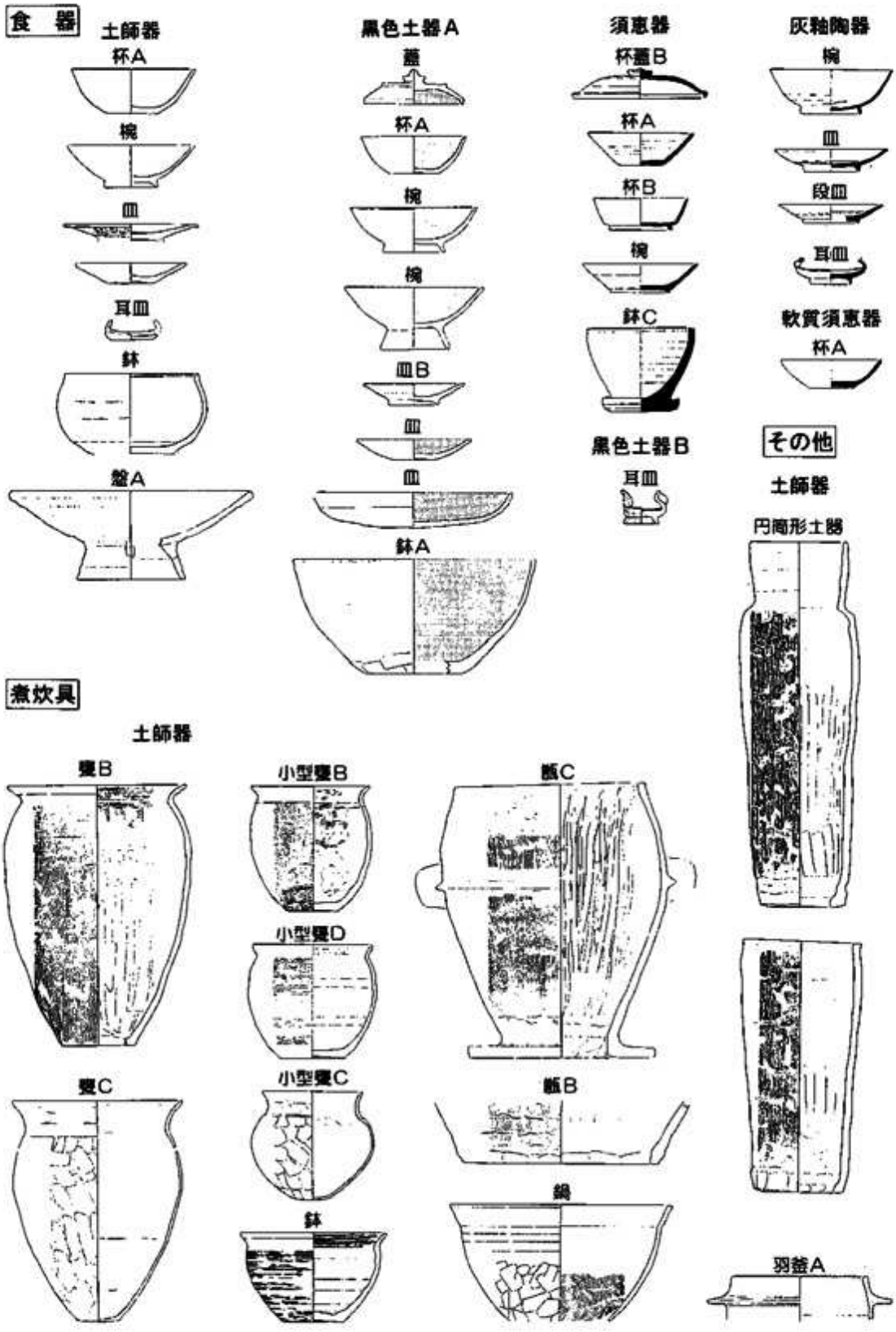
土師器　食器類では杯A・椀・皿・耳皿・盤Aがみられる。杯・椀は点数が少なく、すべてロクロ調整・底部糸切りである。347・375は住居址に混入した後代の矮小化した杯Aや皿Aとも考えたが形態的に異なり、むしろ黒色土器Aの皿Bから高台を取り去った形態をなす。あまり例をみないものであるが一応皿としておく。その他、原畑20住の459は形態的には黒色土器Aの皿Bの特徴を示すものの、内外を入念にミガキ調整している。胎土も他の土師器・黒色土器と異なり、きめ細かく金雲母の微粒を多く含んでいる。耳皿は2点（22・431）がある。ロクロ調整、底部糸切りで、22の底部には焼成以前に穿孔が行われている。431は無高台である。盤Aはすべて破片で、全形を復元できるものはない。9点の出土のなかで、脚部が残存するものは3点（31・293・436）があり、棒状工具で、3～4単位の楕円形の透かしを開けている。鉢は1点が存在する。152はロクロ成形され、口縁部で内湾する。底部は回転糸切り未調整で、高台の剝離痕がみえる。体部外面底部際には回転ヘラ削りがされる。

煮炊具には甕B・C、小型甕B・C・D、鉢、甑B・C、羽釜A、鍋がみられる。本遺跡にみられる土器群では、煮炊具の出土量が比較的多いことが特徴の1つとしてあげられる。甕Bは一般的な長胴甕がほとんどであるが、製作方法が特徴的なものも混じる。原畑13住出土の361には口縁部から体部中程にかけて補修痕がみられる。ひび割れた部分に粘土を付け、割れ目を塞いだのちに、器面をハケ目で調整し焼成している。また原畑4住出土の224は、体部外面底部際がヘラ削りがされるが、一部を削りすぎたためか粘土を付け足してから雑なナデを施している。原畑15住出土の395は体部下半の破片であるが、内面に縦方向のヘラ磨きがみられる。甕Cは原畑3住（193）・9住（96）、小型甕Bは宮の上6住（41）、小型甕Cは原畑18住（418・419）・宮の上5住（27）・6住（42・43）が出土している。これらはいずれも破片で全形は復元できない。このうち419は脚部の破片である。鉢は原畑土坑38の480があり、製作手法は小型甕Dに準ずる。体部外面に被熱が認められることから煮炊具と考えた。464はロクロ成形後、体部下半外面に手持ちヘラ削りを施し、体部下半内面にはハケ目がみられる。北信地方に見られる鍋と考えられる。177も同種のものと捉えた。

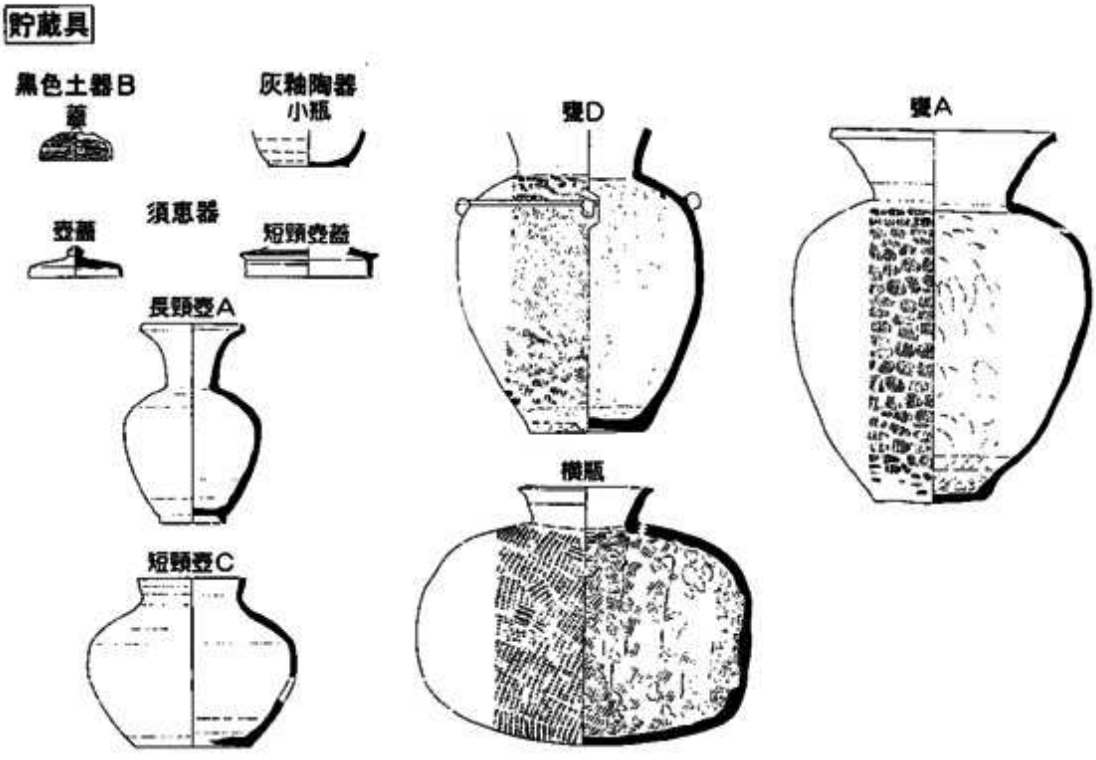
甑Bは原畑15住（396）からの出土した破片で、底径24.0cmを測る。外面はハケ目、内面はナデ調整がされ、底部際にはヘラ削りがされる。甑Cは宮の上７住から全形を復元できる76が出土している。法量は底径28.2cm、口径23.7cm、器高33.7cmを測る。底部には円盤状のタガが付き、体部には鍔状の凸帯が一巡している。体部外面はハケ目、内面は縦方向のヘラ磨きがされる。内湾する口縁部は外面にカキ目、横方向のヘラ磨きのち横ナデ、内面には横方向のヘラ磨きがされる。底部は外面ナデ、内面はヘラ削りがされる。羽釜は宮の上８住より89が出土するのみである。口縁部の破片で全形は復元ができない。口径は19.0cmを測り、口縁部下に鍔状の凸帯がある。内外面ナデ調整される。

その他の器種では円筒形土器がある。円筒形土器は今までの松本市内の調査では類例が少なかったが、今回の調査では全形を知ることのできる資料３点を含め、20点を図化することができた。法量については、底径が10.0（422）～12.6cm（342）、口径が10.7（74）～14.6cm（422）、器高は31.2（422）～45.2cm（360）を測る。423は、底径10.0、口径12.0、器高45.2cmを測る。径は底部から口縁部近くの段に向かって次第に太くなり、段を作って一旦細くなるが、口縁部で再び拡がる。底部には短い折り返しが認められる。体部外面には縦方向のハケ目、内面はナデ・ヘラ削りを施し、底部際と口縁部にはヨコナデがされる。原422は、底径11.0、口径14.6、器高31.2cmを測る。径は底部から口縁部に向かって次第に増す。体部外面には縦方向のハケ目、内面はナデを施し、底部際にはヘラ削り、口縁部にはヨコナデがされる。底部には僅かに折り返しが認められる。360は底径10.6、口径13.6、器高36.3cmを測る。調整方法は原422と同様であるが、底部には折り返しは認められない。

黒色土器A　器種は食器類に限定され、杯A・椀・蓋・皿B・鉢Aがみられる。杯A・椀・皿B・鉢Aは455の１点を除いてすべてロクロ調整・底部糸切りである。455は口径19.3、器高6.2cmを測り、高い高台と浅く大きく開く体部を有する。その形態は椀というよりむしろ盤に近い。調整は底部から体部外面下半にかけて回転ヘラ削り、上半にロクロナデ、口縁部にヨコナデが施される。内面には補修痕がみられ、ひび割れた部分に粘土を付けて接合を行った後に高台を貼付し、ヘラ磨きを施し焼成している。蓋は１点のみある。194はロクロ調整の蓋で、口径12.4、器高は4.2cmを測る。天井部には凸帯がリング状に巡り、宝珠形のつまみが付く。内面はヘラ磨き後に黒色処理を施し、口縁端部はヨコナデがされる。一般的にはみられない器形で、佐波理椀蓋を模倣した可能性がある。皿は一般的な皿Bのほか、無高台のものが原畑遺跡より３点出土している。４住出土の201は土師器にも見られた皿Bから高台を取り去った形態である。20住出土の462・463は当地方では見慣れない形態で、畿内地方の土師器に類例が求めらようか。463は底径17.0、口径27.8、器高3.4cmを測り、口径に比して器高が低く、浅い形態である。底部は糸切り後ナデ、体部外面はロクロナデ、内面は黒色処理、口縁部にはヨコナデを施している。462は底径15.7、口径24.8、器高4.3cmを測り、形態・調整は463と同様である。これら２点にも455と同じ方法で補修が行われ、後にヘラ磨きを施して焼成している。



挿図7　古代の土器器種一覧（1）



挿図8　古代の土器器種一覧（2）

黒色土器B　器種は食器類として蓋・耳皿がみられる。いずれも1点のみの出土である。蓋(106)は口径7.2、器高3.3cmを測り、器形は椀形の杯を伏せた形態に近く、乳頭状の小さなつまみを貼付している。外面の調整は天井部にヘラ削り、体部に横方向の細かなヘラ磨き、内面は横方向の細かなヘラ磨き、口縁端部はヨコナデが施される。耳皿（461）は底部糸切り、高台が付く。

須恵器　食器類では杯A・B、杯蓋B、椀、鉢Cがみられる。杯Aはすべてロクロ調整で37の1点が底部回転ヘラ切り、その他はすべて底部糸切りである。杯Bは2点あり、ロクロ調整で底部は回転ヘラ削りされる。238は住居址に伴わない混入品と考えられるが、胎土が緻密で白色を呈し、美濃須衛窯産の須恵器と思われる。杯蓋Bは32・33・237の3点がある。椀は370の1点がある。ロクロ調整で底部は回転糸切りされる。低い高台が付き、これをはずしてみると器形は杯Aに似る。皿とするには口径に比して器高が高く、椀として扱った。鉢Cは原畑6住より39の1点を得た。

貯蔵具類では長頸壺A・壺蓋A・短頸壺蓋・短頸壺C・甕A・D・横瓶がある。38は口径12.8cmを測る短頸壺蓋の破片である。ロクロ調整で天井部はヘラ削り、口縁部はヨコナデされる。椀形の杯を伏せた形態に近く、天井部端部に断面三角形状の凸帯が一巡する。類例は短頸壺とセットで群馬県八ヶ峰窯跡、県内では佐久地方の鋳物師屋遺跡群に出土例が知られ、皿状のつまみが付く。横瓶は92の1点があり、口径は13.8、器高は25.8cmを測る。

軟質須恵器　確実なものとして杯A 2点（103・167）が存在するのみで、大変少ない。

灰釉陶器　食器類では椀・皿・段皿・耳皿、貯蔵具類では短頸壺・小瓶がある。椀・皿類はいずれも器壁が薄く、灰白色の緻密な胎土で作られる。高台は断面三角形を呈し、刷毛塗り施釉、重ね焼き焼成のものが多い。

時期的にはこれらの大半は東濃の光ヶ丘１号窯式に帰属するものと考えられる。

②　各土器群の様相

宮の上遺跡・原畑遺跡から出土した土器・陶器は３～４期、７～８期、13期の様相がみられる。ほとんどの遺構が７～８期に属し、重複関係も少ないことから、一括資料に準ずるものが多い。以下、時期毎の土器群の様相を述べる。

３～４期　宮の上６住のみである。食器類はすべて須恵器で、杯Ａ・杯Ｂ・杯蓋Ｂ・杯蓋・鉢Ｃ、煮炊具には土師器甕Ｂ・Ｃ・小型甕Ｂ、貯蔵具類には須恵器長頸壺Ａがある。

７期　遺跡の主たる時期で、良好な土器群がみられる。原畑12住は43点を図示できた。食器類はほとんど黒色土器Ａの杯Ａ・椀・皿Ｂ・鉢Ａで構成され、他には少量の須恵器杯Ａ、軟質須恵器杯Ａ、灰釉陶器の椀・皿類が見られる。

煮炊具は土師器甕Ｂ・小型甕Ｄ・円筒形土器、貯蔵具類には須恵器甕がある。この他７期の土器様相を示す土器群は原畑１・７・10・12住、宮の上４・11住等があげられる。

８期　７期に続いて良好な土器群がみられる。宮の上８住は17点を図示できた。食器類は黒色土器Ａの杯Ａ・椀・皿Ｂを主として構成され、他に土師器杯Ａ、軟質須恵器の杯Ａ、灰釉陶器の椀・皿類がある。

煮炊具には土師器甕Ｂ・小型甕Ｄがある。貯蔵具類は須恵器横瓶、灰釉陶器の壺がある。この他８期の土器様相を示す土器群は原畑４・８・15・19住、宮の上７・10住等があげられる。

13期　８期以降の遺構は13期の宮の上15住と土坑24があるのみである。遺物は非常に少なく、土師器杯Ａ１点、黒色土器Ｂ椀１点、灰釉陶器椀２点を図化出来た。灰釉陶器椀は体部の腰の部分が強く張る器形で、体部外面下半のヘラ削りは省略されている。148には４単位の輪花がみられる。

総じてこれらの土器様相を見るならば、７・８期の資料、とりわけ土師器・黒色土器における質・量の卓越を指摘できよう。出土量は住居規模や構造に関わりなくどの住居址からも多量に出土し、また他地域の遺跡では見られないか、あっても破片で全形を知り得ないような希少器種が豊富に見られる。しかしその反面、灰釉陶器や軟質須恵器の割合が他地域に比べて著しく低い傾向を示し、岡田地区における７・８期の土器様相の特質と言えよう。

隣接する岡田西裏遺跡、宮の前遺跡における土師器焼成坑の存在、宮の上６住等粘土を貯蔵した住居址の存在は土師器生産の地としての性格を端的に示しており、土器様相における特質もそうした背景の下で理解されるのではないだろうか。

③ 文字関係資料

宮の上遺跡・原畑遺跡から出土した文字関係資料は、墨書土器・ヘラ描土器等がある。墨書土器は全て住居址からの出土で、総計13点を数える。このうち4点が原畑12住、3点が原畑7住に伴っている。

文字は単字句に『一』・『葛』・『得』・『瀧』・『宗』・『春』、複数字句に『矢主？』・『□田』・『□葛野』があり、『得』が3点、『□葛野』が2点を数え、その他は各1点である。

墨書が施される器種はすべて食器類で、黒色土器Aの杯Aが最も多く9点、須恵器杯Aが2点、黒色土器Aの皿B・椀が各1点ある。墨書部位についてはほとんどが体部外面で12点、底部は1点のみである。ヘラ描土器は2・165・451（黒色土器Aの杯A）の『×』、14（黒色土器Aの椀）の『ー』がある。

文献1　㈶長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』1990

(2) 中世の土器・陶磁器（図版26）

中世の土器は数点が出土しているが、いずれも細片のため僅かに1点を図化呈示し得たのみである。154は土師質の擂鉢の破片で、宮の上遺跡土坑20より出土している。口径26.0cmを計り、擂目は比較的粗い。口縁部はヨコナデし、面取りされる。体部外面はナデと一部に工具によるケズリ状のナデ、内面はハケ目が施される。所属時期は15世紀以降と考えたい。

その他、図化するに至らなかったが、原畑土坑16から13～14世紀代に位置付けられる龍泉窯系の青磁椀の破片が、また検出面や土坑・ピットから土師質土器、陶器、白磁が出土している。

2　瓦（図版46・47）

今回の調査では原畑遺跡から総数8点の瓦が出土しているが、7点を図化した。いずれも破片で完形品はない。種類は平瓦のみで、出土遺構は原畑4住に5点（1～5）、原畑19住に3点（6・7）である。

焼成はすべて還元焔による須恵質のものだが、還元不足のためか色調は橙褐色～灰白色を呈し、軟質なものが多い。

調整は上面に布目痕、下面に密なタタキ目が見られるもの（6・7）、上下面ともに指ナデもしくはヘラナデを行うもの（1～3・5）、上面にヘラナデ、下面に粗いタタキ目を行うもの（4）がある。布目痕の糸の本数は1cmあたり6×6本前後を数える。端部はすべてにナデが行われる。

法量については、幅の分かるものには1があり23cm、長さのわかるものには2があり31cmを測る。厚さは1.8cm前後のものが多いが、2は2.6cm、4は2.3cmと他に比べ厚い。

時期については、伴出した土器からみて、8期あるいはそれ以前に製作されたものと思われる。

3　石　器

(1)　宮の上遺跡（図版48）

縄文時代の石器　5点が出土した(2～6)。2はスクレイパーで完形品。小形で刃部は内湾し片面加工される。石材はチャート。3は打製石斧の頭部片。4も打製石斧で平面形は撥形。石材はいずれも千枚岩である。5は磨石で楕円礫を素材とし磨面を2面持つ。石材は安山岩である。6は硬砂岩の剝片である。

平安時代の石器　1は11住より出土した研磨礫で、上半部を欠く。全面に研磨がなされ、特に縁辺部には長軸に直交する線状痕が観察される。石材はチャートである。11住の床面から出土しており、本址に伴うものと捉えられた。

(2)　原畑遺跡（図版49）

縄文時代の石器　打製石斧が4点ある（4・5・7・8）。4は頭部の破片で胴～刃部を欠く。右側縁の下寄りに着柄痕と思われる磨耗が観察される。石材は頁岩である。5は刃部で頭～胴部を欠く。平面形は撥形、刃部の形状は円刃である。石材は頁岩である。7は刃部で頭～胴部を欠く。平面形は不明、刃部の形状は円刃である。石材は千枚岩である。8は頭～胴部片で刃部を欠く。平面形は撥形である。石材は砂岩である。

平安時代の石器　砥石が3点ある（1・2・6）。1は完形で重量910gである。3面に使用痕が認められる。石材は白色の粘土質岩である。2はほぼ完形。4面に使用痕がある。石材は砂岩である。なお、6は打製石斧であるが、上下、両側面に研磨面があり、特に上下の面は明瞭な線状痕が観察されることから、縄文時代の打製石斧を砥石に転用したものと考える。

これ以外に、研磨礫としたものがある(3)。宮の上遺跡出土品と同類のものと考えられ、全体に礫の主軸と直交する線状痕が観察される。その用途は不明であるが、あるいは土器製作時のミガキ・ナデの工具とは考えられないだろうか。

4　土製品

(1)　宮の上遺跡（図版48）

6住より紡錘車の紡輪が1点出土している。直径7.8cm、厚さ1.4cmを測る。須恵質で灰白色を呈し、一部に自然釉が掛かる。穿孔は焼成前に片側より雑に行われている。奈良時代に帰属する。

(2)　原畑遺跡（図版49）

2点がある。1は5住より出土した。古墳時代のミニチュア土器と思われ、混入品である。球形の器体を有し、その直径は推定で4.8cmを測る。胎土は緻密で、赤褐色を呈する。

2はスタンプ型土製品とした。直径1.3cm、長さ4.1cmの棒状の形態をなし、一端の小口を平坦に

し、焼成前に鳥居形に線刻がなされている。線刻が何を表し、また実際に印として使われたものかその性格は不明である。

5　金属製品（図版50）

(1)　鉄　器

鉄器の出土点数は宮の上遺跡で10点（図示できたものは８点）、原畑遺跡で14点の合計24点である。遺存状態は紡錘車や斧、刀子など完形に近いものもあり悪くない。種類も多岐にわたり良好な資料といえる。以下種類別に特徴的なものを中心に概観する。

刀子　宮の上遺跡で３点、原畑遺跡で５点出土している。原畑３（１住）は茎部の先端が曲がり僅かに欠損しているが完形に近い。刃部も一部が欠損しているが緩やかな両関をもち、身部は棟、刃の両側が徐々に減幅し尖端を構成する。木質の付着等も認められず、茎部の曲がりは故意かどうかは不明である。原畑４（９住）も茎部のみ残存し端部が曲っている。宮の上２（４住）・原畑６（10住）は両関をもち薄く鋭利な刃側が反りをもち減幅する。刃部のみ折れ曲がった原畑２（１住）もこの形態と推測される。このほかに膨張の著しい原畑５（16住）、関部が僅かに残存する小型の原畑１（20住）が出土している。

鎌　各遺跡１点ずつ出土している。原畑７（１住）は基部のみの出土で接合はしないが同一個体と考えられる。先端側は鋭利になり、刃部へ移行する様子が窺える。宮の上４（４住）も両端を欠損し、折返し部にかかるところが僅かに観察できる。全体的に非常に薄く、長狭25cmほどの刃部を残す。

銛　片側に逆刺をもつ茎部の長い原畑10（15住）が１点出土している。この時代の銛の出土は県内でも例がなく断定はできないが、鏃とするには①身部中央に鎬が見られる、②篦被がない、③茎部が長く端に向かうほど増幅する（茎部端は欠損か）などが不適当なため、ここでは敢えて銛として扱った。銛とすれば女鳥羽川で漁労が行われていたことの裏付けとなる貴重な資料となろう。今後の調査に期待したい。

鉄斧　小型の宮の上８（16土）が１点出土している。着柄部は袋状であるが、内部は錆が著しく折返しの重なりや厚さなど細部の観察は不可能である。刃部の造り出しは片刃と思われるが、折返して鍛造した過程が見て取れる。

紡錘車　宮の上５（９住）は紡輪のみの出土である。内部を一部欠き軸部の穿孔が認められる。縁辺部は表裏両面から徐々に減幅する。また、一部に木質の付着が認められるが廃棄後のものであろう。宮の上６（９住）は紡軸の一部であるが同一個体かどうかは不明である。原畑14（１住）は両端を欠き、紡輪は２㎜ほどの厚さで一定している。原畑13（６住）は紡軸のみ、原畑12（３住）も錆が落ちた部分の断面がやや角張っているようにも見えるが、紡軸の一部として扱った。

不明品　宮の上遺跡で図示できなかったものを含め３点、原畑遺跡で３点器種不明の製品がある。宮の上７（５住）は膨張が著しく一端を欠く。図示できなかった５住出土のものは最大２㎜角の方

形の断面を持ち先端が尖るので角釘の可能性が高い。上部を欠損し残存長25mmを測る。もう1点は6住南検出面からの出土で、最大、最大37×15mm、厚さ5mmの鋳鉄片である。原畑11（28土）は膨張しているが欠損部分の断面は2mm角の方形をなす。残存部の状況から鉸具の外縁部が想定される。原畑9（7住）は両端を欠くが、方形の断面と片端が細くなる点から工具類の茎部が想定される。原畑8（28土）は亀の子状のひび割れが著しい鋳鉄片で、上部には欠損が見られず全体が緩やかに湾曲する点から容器の一部が想定される。

(2) 銭　貨

宮の上、原畑の両遺跡で、1086年初鋳の宋銭である『元祐通宝』が1点ずつ出土している。宮の上遺跡の1枚は18土からの出土で破損状況が激しく、原畑遺跡の1枚は9住からの出土で完形品である。

宋銭の流入は日宋貿易に始まり、文治5年（1189）、建久3年（1192）・4年と相次いで宋銭の流通禁止例が出されていることから、12世紀末にはかなりの流通を見ていたことが窺える。『元祐通宝』は宋銭の中でも『皇宋通宝』『熙寧元宝』『元豊通宝』と共に大量に流通した銭種の一つであり、市内の小原遺跡の備蓄銭2701枚において1割弱にあたる257枚の出土を見ている。原畑遺跡9住の時期は平安時代であり、後に混入したものであろう。

第4章　調査のまとめ

今回の調査では今まで実態の不明であった宮の上・原畑遺跡の中心部分に調査が及ぶこととなった。ここ数年来岡田・本郷地区では古代の集落址の調査が相次ぎ、本書の作成年度においても和田・桜田、堂田、岡田町、樋渡し等の遺跡が調査され、やはり古代の集落址その他の遺構を多数検出するに至っている。当地区における大規模な発掘調査はこれらの調査、すなわち平成5年度をもって一応終了することとなり、今後はこれまでの調査成果から本地域における古代社会、とりわけ近接する松本平最大の窯址群と土器生産、この地を通過していたであろう東山道との関係からその特質を明らかにしなくてはならない。

ここではそのための基礎データとして本遺跡における奈良・平安時代の遺構・遺物のあり方について、既に公表されている周辺遺跡の調査成果もおりまぜながらまとめておきたい。

1　遺跡の立地について

宮の上・原畑の両遺跡は共に女鳥羽川右岸の段丘上にある。この段丘は南方原橋付近から上下2段の面をなし、北方樋渡し遺跡付近で下位段丘面が消滅する。この段差は下位面と氾濫原の比高に比べて落差は小さく、南に行くに従いその傾向が増す。またそれぞれの面は必ずしも平坦ではなく、中央部が尾根状に高まっている。

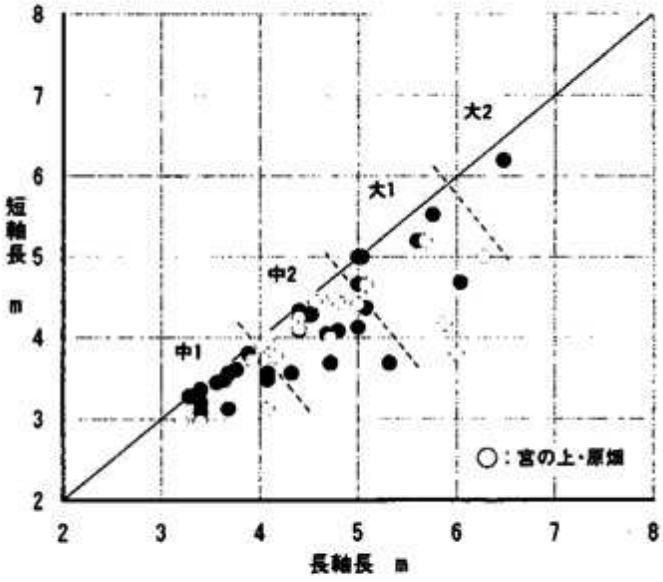
遺跡は下段の段丘面に位置し、尾根状の高まりを中心に南北に細長く展開していることになる。このように両遺跡は地形的に連続しており、また調査の成果から明らかなように、両遺跡における奈良・平安時代集落の時期はほぼ同期間である。従ってこれらは連続する一つの集落と捉えて差し支えないものと判断される。

同様に上段の段丘面に位置する塩辛・岡田町・樋渡し・二反田・西裏等の集落址もそれぞれ主体となる時期は異なるものの、その内容、地形の連続性からみて宮の上・原畑遺跡と南北に平行して位置する一つの集落群として捉えた方がよさそうである。従ってここでは個々の遺跡名とともに前者について下位段丘面の遺跡、後者を上位段丘面の遺跡と呼ぶことにする。

2　遺構について

(1)　住居址のあり方

形態・規模　宮の上・原畑遺跡からはこれまでに37棟の住居址が検出された。時期的には4期に帰属する宮の上6住、13期の同15住、時期不詳の同12住、原畑6住を除きいずれも7・8期（9世紀後半）のものである。この時期に帰属する住居址は（隅丸）方形ないし長方形プランを呈し、後者は東西に長軸をおくものが主体である。規模的には挿図9のように岡田地区諸集落址の7・8期の



挿図9　岡田地区における7・8期の住居址規模分布

住居址と同様な分布を示している。長野県文化財センターによる奈良井川西岸地域における住居址の規模分類に従えば、中1型4棟、中2型10棟、大1型5棟が見られる。宮の上・原畑遺跡をはじめ岡田地区でも松本平内の他地域と同様奈良時代から平安時代にかけて住居の小型化が看取される。

屋内施設　主柱穴のあり方は良好な資料に乏しいが、宮の上4・5・7・8住、原畑4・15住で明瞭な配置が見られる。このうち原畑15住は主軸と直交する2本柱、宮の上4・8住、原畑4住はカマド寄りあるいは入口寄りに長方形の柱配置をとる4本柱穴で、当概期の住居址に見られる一般的なあり方といえよう。しかし宮の上5・7住は同じ4本柱穴ではあるが配置がやや特異で、カマド側、あるいは入口側の壁に接して2本、もう2本は他の2壁の中央に接して、内向きに傾斜して配されている。壁に接したり食い込む柱穴が傾斜する例は近在の岡田町遺跡等でも見られるが、同じ柱配置をとるものは例を見ない。おそらくは片屋根等一般的な住居と異なる上部構造をなしていたものと考えられよう。

カマドはいずれも松本平の各遺跡に共通し東壁か西壁の中央に取り付く。構造はこの時期に通有の石組カマドで、煙出しが短い。今回の調査では袖部が残存良好なものが多く、偏平かつ細長い礫を3列に内傾して立て、外側に黄褐色土を貼る例が主体である。火床面に掘り方を設けるものが原畑18・20住で見られる。

カマド脇に貯蔵穴を有するものが大形の住居を中心に10例存在し、宮の上7住や原畑20住では豊富な遺物が遺存、また原畑12住では須恵器の甕を埋設していた。これと関連して原畑1住では掘り込み周囲に礫が積み置かれており、また原畑8住では住居廃絶時の行為の可能性もあるが、掘り込みを有さず上下の平坦な大形の礫を床面にかためて置いていた。宮の上8住ではカマド脇に横瓶を

据えている。いずれもカマドおよび周囲の空間の使用法を考える上で良好な資料となった。

特殊な屋内施設としては、宮の上9・11住で床面中央部より検出された円形ピットがある。断面観察から柱穴の可能性は薄く、ピット内に完形に近い土器や周囲に原位置を移動しているが礫を伴うのが特徴である。この構造物の性格がいかなるものか、他に物証がないため不明だが、宮の上9住ではカマドらしき施設が見あたらず、また原畑11住も屋内に粘土を貼った大形のピットが見られるなど、通常の住居址と異なる何等かの作業施設として捉えられ、密接に関連したものと受け取られる。

このほか、原畑7住ではやはり何等かの作業施設と考えられる焼土面および台石が存在し、また宮の上4住ではカマド寄りコーナーの床面上に未精製の白粘土が貯蔵されていた。屋内への粘土貯蔵の類例としては宮の前遺跡15住（7期）、岡田西裏遺跡17・19住等があり、これらの遺跡では共にほぼ同時期の土師器焼成坑が検出されていることから土器生産との関係が濃厚である。本遺跡の例についてもこれらの遺跡との位置的・時期的関係、後述する遺物の状況から考えて土器製作に用いた可能性を否定できないであろう。

住居廃絶時の行為　廃絶時にカマドの破壊や礫の投げ込みを行う住居址が多く見られた。すべての住居址について十分な検討を行うことはできないが、カマドについては完存する住居址：0棟、天井部を失うが両袖を残す住居址：13棟、袖・天井共にほとんど残存しない住居址：13棟が見られた。従ってすべてのカマドが何等かの破壊を受けているが、このうち積極的に人為的破壊の可能性を見出せるものとして天井部や袖部の構築材をカマド内外にかため置く宮の上7・10・11・14住、原畑4住があり、その置かれ方はカマド内（宮の上7・11住）、カマド脇（宮の上10・14住、原畑4住）等である。付随して支脚石の残存する住居址は5棟存在した（宮の上5・7・14住、原畑12・14住）。

カマドの破壊に関連して、これらも含め多くの住居址でカマド内に1～数個体の土師器甕の大形破片が多量に依存する例が多く見受けられる。その状況はあたかも破砕した甕を（破壊した）カマド内に故意に集積した、あるいは火床面を覆ったかの様であり、およそカマドに掛けられていたり周囲に置かれていたものが埋没時に崩れこんだものとは考えられない。甕以外にも土師器や黒色土器の杯・椀・皿類が火床面や焚口に置かれていたり、あるいは覆土内から完形で数個体遺されているものがしばしば見られる（宮の上4・8住、原畑20住等）。端的な例としては原畑20住では火床面中央に黒色土器の耳皿が置かれ、その上を土師器甕の大形破片、完形の黒色土器杯・椀が覆っていた。本住の例をはじめ、カマド内から見出された黒色土器はいずれも火熱による黒色処理の抜けが観察されず、従ってカマド使用時にもたらされたものとは言い難い。また出土状況はいずれも正位かそれに近いものばかりであり、置かれた状況を呈していた。

このような状況から、カマド廃絶時にその破壊や土器を用いた祭祀等の行為が頻繁に行われていたものと見ることができるが、あまり問題意識を持たずに調査を行ってしまったためより詳細な観

察記録や検討ができなかった点が惜しまれる。今後の課題としておきたい。

次に住居内での礫のあり方だが、明らかに埋没過程で人為的に投げ込みを行っていると考えられるものに宮の上4・5・7・8・14住、原畑4・10・12・13・16・18住がある。これらの礫の投げ込まれ方を見ると、特定の範囲・層位に人頭大あるいはそれ以上の大礫の集中が見られるもの（宮の上4・5・7・8住、原畑10・12・13・18住）と、やや小ぶりの礫が全域の上～下層に見られるものがある。前者のうち宮の上7住、原畑10・13・16・18住では大礫の集中範囲以外ではあまり礫が見られない。大礫の集中位置は住居中央部に主軸方向に沿ってやや長く分布するもの（宮の上4住、原畑10・12住）、カマド～住居中央部にかけて集中するもの（宮の上5・7住、原畑13・16住）、入口寄りの住居中央ないし隅寄り（宮の上8住、原畑18住）等に分けられる。礫と共に多数の遺物が投げ込まれるが、大礫の集中が見られる住居址には床面や礫集中の内外に完形に近い土器類が多く見られるのに対し（宮の上7・8住、原畑10・12住等）、小礫が散在する住居では遺物が少なかったり、多くても破片ばかりであったりする傾向が見られる。遺物のあり方は礫の投げ込みがさほど見られない住居址においても両者が観察される。

このように礫の投げ込み、遺物のあり方に幾つかの様相が見られることは、住居廃棄時の行為が一様でなかったことを示しているものと考えれ、先述のカマドの廃棄と合わせより広範に資料の集成と検証を重ねてゆく必要があろう。

最後に、住居構築時あるいは使用中に行われた行為として、いかなる性格か不明だが、原畑1住ではピット内に小型甕や須恵器長頸壺を埋設し、また12住では入口部の床面下に黒色土器の杯・椀や土師器の小型甕を一括埋設する例が見られた。

(2) その他の遺構のあり方

住居址以外の遺構のあり方として、まず掘建柱建物址が全く見られない。広範な調査の行われた岡田町遺跡では特定の範囲に建物址が集中する傾向が看取されており、本遺跡においてもあるいは調査範囲外のどこかにまとまって存在するのかも知れないが、単なる偶然とも考えにくい。土坑・ピットについても明らかに人為的な掘り込みで、かつ平安時代に帰属するものはかなり少ない。ピットも宮の上遺跡D区に最も顕著な集中が見られるが、いずれも掘り込みが浅く不安定で、少なくとも柱穴と考えられるものは存在しない。

このように住居址以外の遺構が著しく少ない点も本遺跡の特質と言え、集落の性格を物語っているものと捉えられよう。

3 遺物について

(1) 土器群のあり方

土器様相の特質　出土土器群の大半は7・8期（9c後半）の様相を示すものであることを前章で

述べたが、そこには松本平の諸遺跡に比較してやや異なる傾向も見られた。それは第1に、住居址1棟当たりの出土量が非常に多い点、第2に器種構成に占める土師器・黒色土器の割合が高く、灰釉陶器、軟質須恵器の量が他地域に比較して少ないこと、第3に、土師器・黒色土器の器種が豊富で、とりわけ周辺地域の集落遺跡では出土例の少ない器形、例えば円筒形土器やあまり一般的でない形態の椀・皿、更には集落遺跡との関係の希薄な瓦等の遺物が豊富であること、である。

これらの現象は岡田町遺跡、西裏遺跡等同時期の岡田地区の遺跡でも同じ傾向を示し、遺構のあり方と合わせ当地域が土師器生産に密接に関っていたことを示すものと理解できる。すなわち、土師器の出土量の卓越、希少器種の存在は生産地故の現象と考えられ、また東信、更には北信地域からの土師器の流入が顕著な反面、灰釉陶器の受容が少ない点は単に松本平北端部という地理的位置に起因するものだけでなく、他の焼物への排他的現象と受け取ることも可能かと思われる。

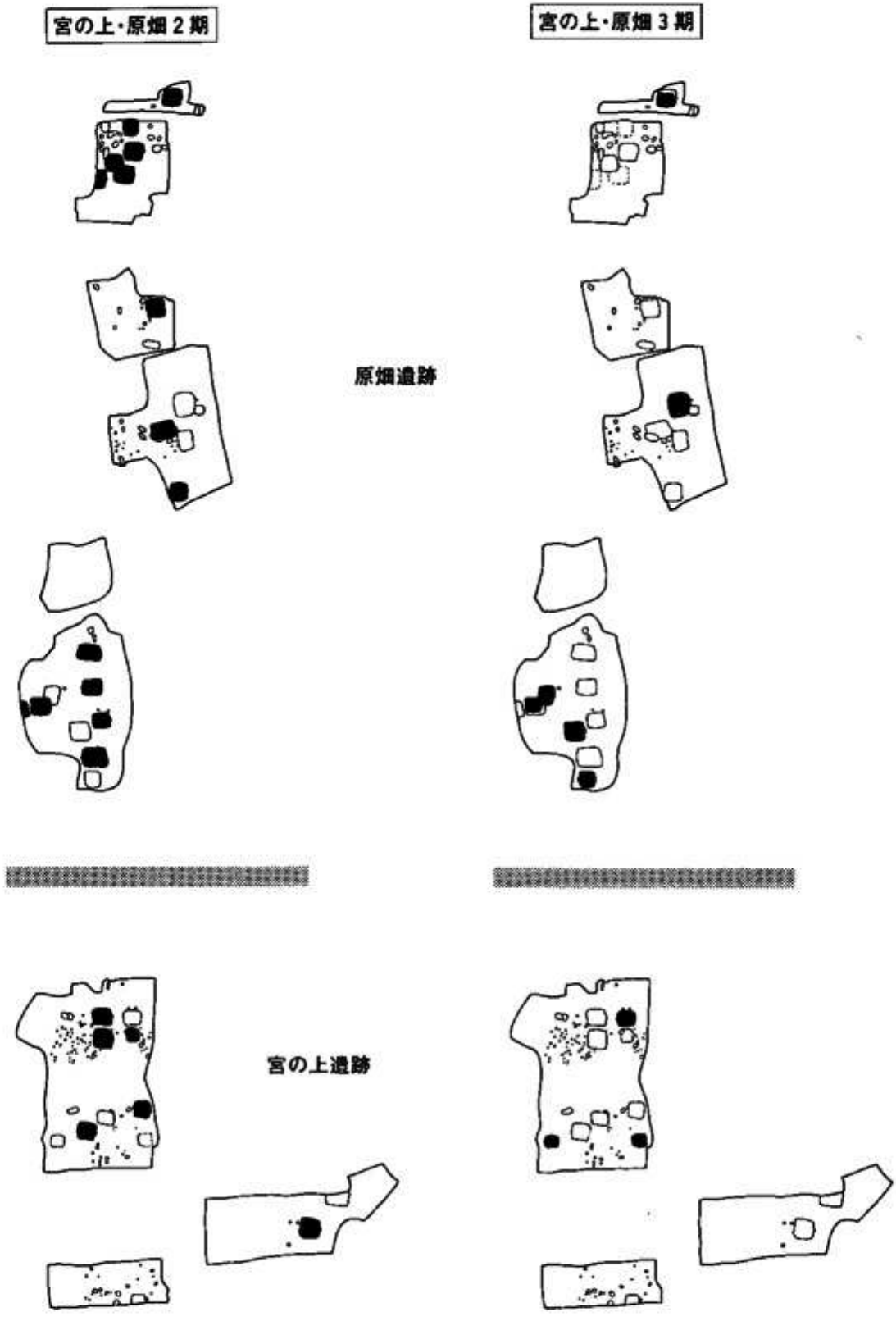
他方、軟質須恵器の欠如は須恵器生産から土師器生産への移行を考える上で興味深い現象と言えよう。後述するように、当地域の諸集落址は古墳時代末から連綿と継続しており、平安時代前期における土師器生産以前にも北部古窯址群における須恵器生産との濃厚な関係が遺構・遺物に指摘できるからである。9c代における土器生産の須恵器から土師器への移行過程の中で出現すると考えられている軟質須恵器が土器生産地域である当時域において見られないことは、すなわちその出自・生産地が他地域に存在し、土器生産の変容が松本平という一地域の中にあっても多様であったことを示すからである。

文字資料　岡田地区の古代集落址からの墨書土器等文字資料の出土は必ずしも多くはないが、本遺跡においては原畑遺跡より比較的まとまった量が出土した。その中で7住より出土した「□葛野」の墨書に注目したい。須恵器杯2点、黒色土器椀1点に見られ、筆跡も近似しているのでまとめて書かれたものと考えられる。「□葛野」の意味については地名を表すものと考えられるが、今のところ文献には見当たらない。

(2)　その他の遺物のあり方

土器製作に関わる遺物として、チャートの小円礫の存在を挙げることができる。本遺跡からは数点の出土が認められ、宮の上11住出土品には明らかな研磨痕が認められた。これらは従来とかく見過ごされがちな遺物であったが、土器製作の過程でナデ、ミガキに用いる道具と考えられないだろうか。手に持つ道具として程よい大きさを備え、硬質で平滑な表面は黒色土器等の器面の研磨に好都合と考えられる。今後注意を払うべき遺物と言えよう。

原畑15住からは銛と考えられる鉄器が出土している。逆刺が片側にしかなく、茎部も先端部が太くなっている点で鏃とは異なっている。長野県内において鉄銛の出土例は今のところなく、大変珍しい遺物である。女鳥羽川における漁労活動を想起させるが、これ以外に漁労具と思しき遺物が見られない点が残念である。



挿図10　宮の上・原畑遺跡における集落の変遷

4　宮の上・原畑遺跡における集落の変遷について（挿図９）

宮の上・原畑遺跡の集落は時期的には奈良時代後半から中世まで及ぶが継続的ではなく、３回の断絶を挟んでいる。以下時期毎にその変遷をたどってみる。

(1)　宮の上・原畑１期（土器様相４期）

宮の上遺跡６住が営まれる。原畑遺跡においても遺物の散布が認められる。この時期の集落は非常に小規模かつ散在的なものと考えられ、居住域としてあまり利用されなかったものと考えられる。そのため継起性がなく、集落は断絶する。

(2)　宮の上・原畑２期（土器様相７期）

原畑遺跡1～３・５・７・９～14・17・20～22住、宮の上遺跡４・５・７・９・11・13住が営まれる。この段階から両遺跡における大規模な居住活動が行われる。前段階からの継続性は全くなく、計画的な村落を窺わせる。

住居址の分布も南北に直線的な配列がなされ、原畑遺跡Ｆ区では12・13・14・20住が等間隔に4.5mの間隔をおいて、カマドの方向を交互に変えながら並んでいる状況が観察される。原畑Ｂ区ではやや住居址が込み合い、同時期内での切り合い関係が見られる。宮の上遺跡５・７住は本時期内における前者から後者への建て替えと考えられる。また住居址の大半は礫層帯への構築を避け、土質の良い部分を選地している。

住居址規模は中型を主体に若干の大形を伴うが、全体的に差があまり見られない。特殊な住居址として宮の上遺跡９・11住があり、作業場的な施設と考えられる。また宮の上４住では粘土の貯蔵が見られる。

(3)　宮の上・原畑３期（土器様相８期）

原畑４・８・15・16・19住、宮の上８・10・14住が営まれる。前時期より集落が継続するが、住居数が大幅に減少し、散在的になる。また本期をもって集落は再び断絶する。住居規模がやや縮小する中、原畑４住が卓越して大きい。住居址の配列については散在的となるため傾向を把握しにくいが、前時期に続き南北方向に並ぶようである。原畑８住、16住は前時期の22住、21住の建て替えによるものと捉えられる。

(4)　宮の上・原畑４期（土器様相13期）

宮の上15住が営まれる。原畑遺跡においても遺物の散布が見られるが、遺構は見られない。１期と同様、集落は散在的かつ小規模なものと考えられ、以後に継続しない。

地形面		遺跡	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	11期	12期	13期	14期	15期
北↑	女鳥羽川右岸 高位段丘面	塩辛	◎	△	○	△	○										
		岡田町D		○	◎	△	●	◎	○								
		岡田町E		┈	─	─	─	┈									
		岡田町B・C		○	△	○	○	◎	◎	○							
		岡田町A		△	○	△	●	◎	◎	○							
		火渡し		△				△	△							△	
		二反田								△							
↓南		西裏			┈	─	─	─	─	┈				┈	┈	┈	
北	女鳥羽川右岸 低位段丘面	原畑							●	●							
南		宮の上				△			○	○					△		
	大門沢川左岸	宮の前		○	○	△	△		○	△					△		

△：～2棟　○：～5棟　◎：～8棟　●：9棟～

挿図11　岡田地区における古代集落の消長

(5)　宮の上・原畑5期（中世）

原畑B・C区、宮の上F区に土坑・ピットの集中が見られる。遺物が乏しいが年代的には13c～15cと考えられる。土坑には墓址的なものがあり、掘立柱建物址が見当たらないことから墓域として利用されたのではないかと思われる。

5　岡田地区における古代集落について

挿図11にこれまで岡田地区で実施された発掘調査結果に基づき、住居址軒数の推移を示した。この内岡田町遺跡E区と樋渡し遺跡、および西裏遺跡は未整理または現在整理中のため実数を示し得ない点お断りしておく。この表を基に、古代における集落の動きを追ってみたい。

まずこの地域における居住の開始は古墳時代末（土器様相1期）に遡る。集落の中心は上位段丘の塩辛遺跡～岡田町遺跡D区付近と捉えられ、住居址と共に大形の掘建柱建物址が多数伴っている。また、この時期にあっては須恵器の保有量が多く、焼け歪みの大きい個体や窯滓の付着したものが見られる。今のところ北部古窯址群ではこの時期に遡る窯址は確認されていないが、本遺跡の資料から近在に窯址の存在が予想され、窯址群に連動して集落が成立したものと考えられる。

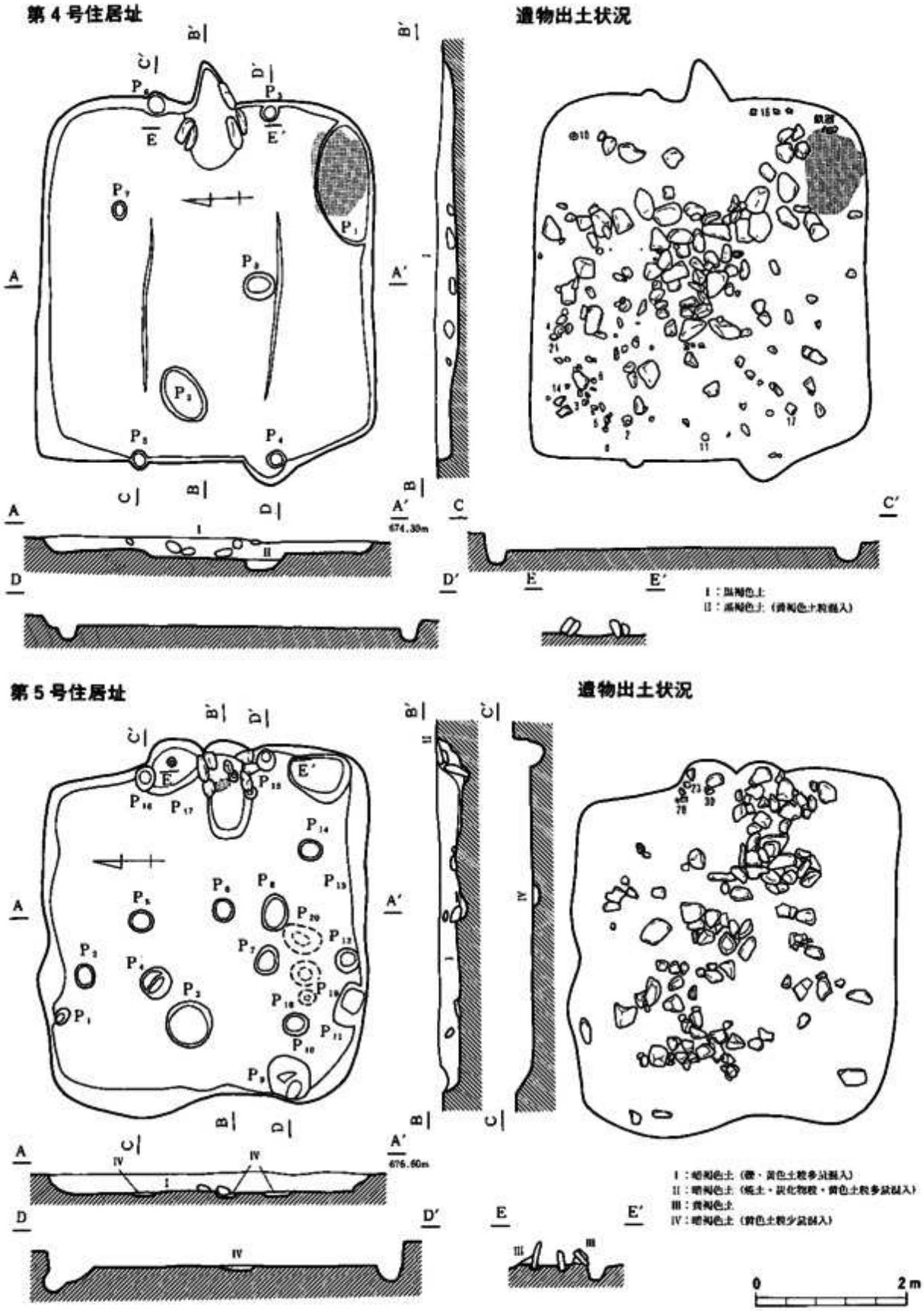
奈良時代、土器様相の2～4期になると、岡田町遺跡A地区付近まで大きく集落が拡大し、その中心も南下する。この時代も須恵器生産と密接に連動し、集落内を南北に貫く流路内に窯滓の付着した須恵器や焼け歪んだ瓦が数多く投棄されている。集落は計画的に構えられ、各規模の住居址、掘建柱建物址群が存在する。一方この時期、より窯址群に近い大門沢川左岸の宮の前遺跡でも集落が営まれ、超大型の住居址、庇を有する大規模な掘建柱建物址が構築される。出土遺物には岡田町遺跡出土品と同笵の瓦当があり、両集落が密接に関わっていたことを示す。このようなことから宮の前遺跡は須恵器生産を司る中枢的な集落と捉えられよう。

平安時代に入ると上位段丘では集落が更に南の西裏遺跡までに拡大し、その中心も移動する。西裏遺跡からは窯壁の破片が出土し、国府移転に伴い拡大した須恵器生産との濃厚な関係を示す。この頃には岡田地区内を東山道が通過していたと推定され、地形の状況から見て上位段丘の集落から程ない距離にあったのは間違いないところであり、あるいは道に沿って集落が展開していた可能性もあろう。9世紀半ばを過ぎると北部古窯址群における須恵器生産が縮小し、衰退へと向かうが、それに連動するかのように西裏遺跡や岡田町遺跡、宮の前遺跡で土師器生産が開始される。とりわけ西裏遺跡では、工房と考えられる長方形で深くカマドのない住居址を囲むように数多くの土師器焼成坑が密集し、周辺の住居址からは焼き損じたと思われる土師器や（黒色未処理の）黒色土器の杯類、甕類が出土している。また粘土採掘坑と考えられる不整形の掘りこみも検出され、多量の土師器片が廃棄されていた。この段階には低位段丘の宮の上・原畑遺跡にも集落が拡大するが、10世紀に入ると忽然と各集落とも居住が途絶えてしまう。土器様相では食器類の主体が黒色土器から土師器・灰釉陶器へ変化する時期でもあり、それを反映したかのようである。

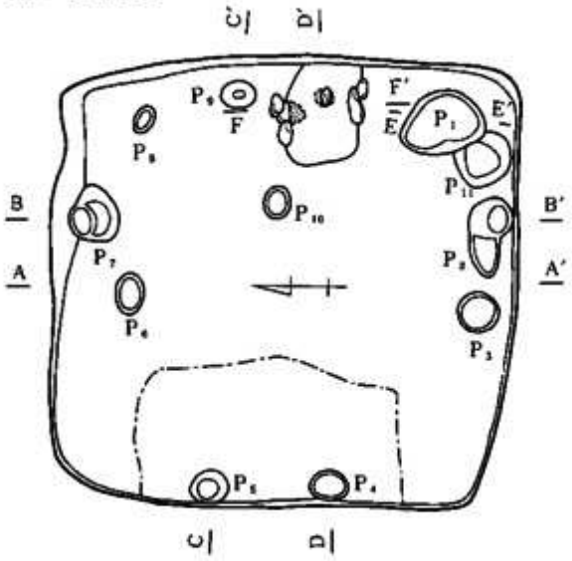
11世紀代になると再び点在的に集落が営まれるが、その規模は小さい。もはや土器生産との積極的関わりも見られないが、この時期の集落が中世に継続してゆくのかは不明である。

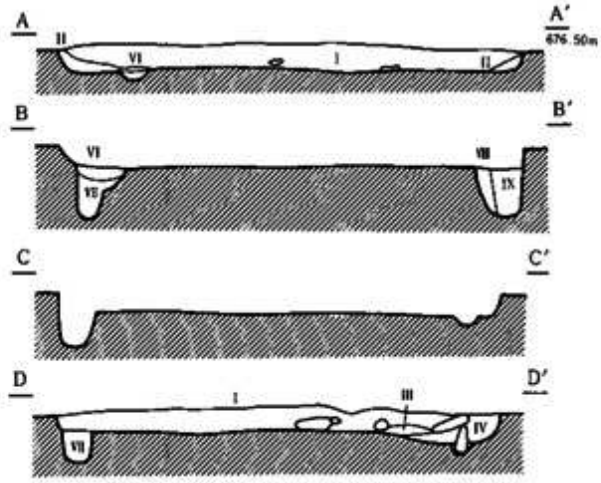
以上本遺跡の調査成果についてまとめ、周辺におけるこれまでの調査成果を踏まえながら雑駁に岡田地区における集落の流れを、土器生産地としての背景を交えて概観してきた。しかし一歩掘り下げてこれらのどの集落がどのような役割を果たしたのか、例えば工人層の集落はどこか、あるいは生産を司る官人層の拠点はどこか、あるいは製品の流通拠点はどこか、等今後詳細に検討されるべき課題は多い。まだ未整理の遺跡もあり、今後これらの作業を通して土器生産地の具体的な様相の解明に努めなければならない。

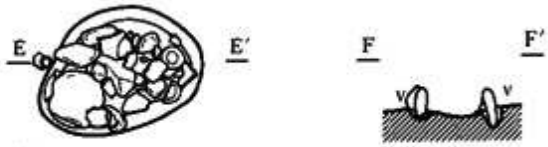
図　　版

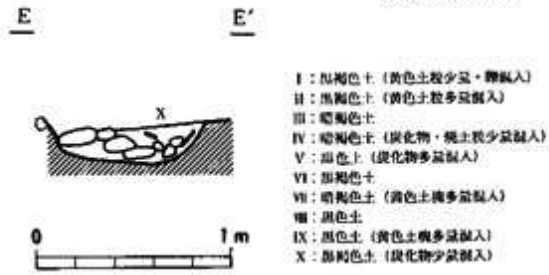

第4号住居址
遺物出土状況
674.30m
第5号住居址
遺物出土状況
676.60m
I：暗褐色土（礫・黄色土粒多量混入）
II：暗褐色土（炭土・炭化物粒・黄色土粒多量混入）
III：黄褐色土
IV：暗褐色土（黄色土粒少量混入）
0
2m

第7号住居址

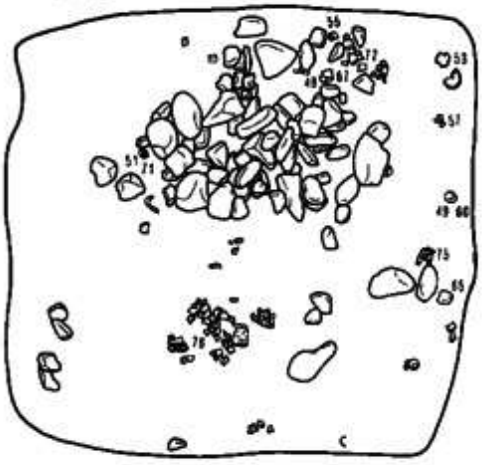




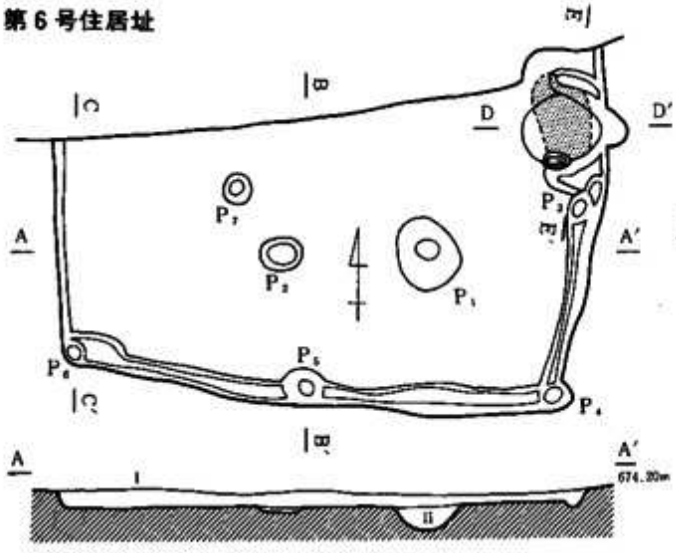


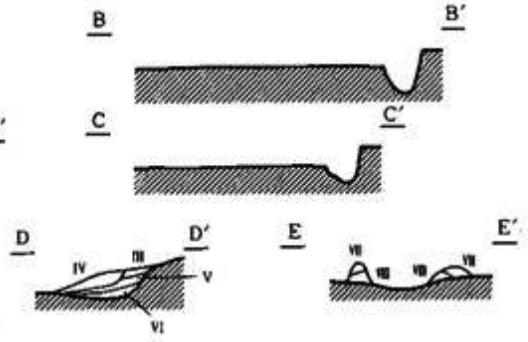


遺物出土状況

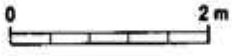


第6号住居址

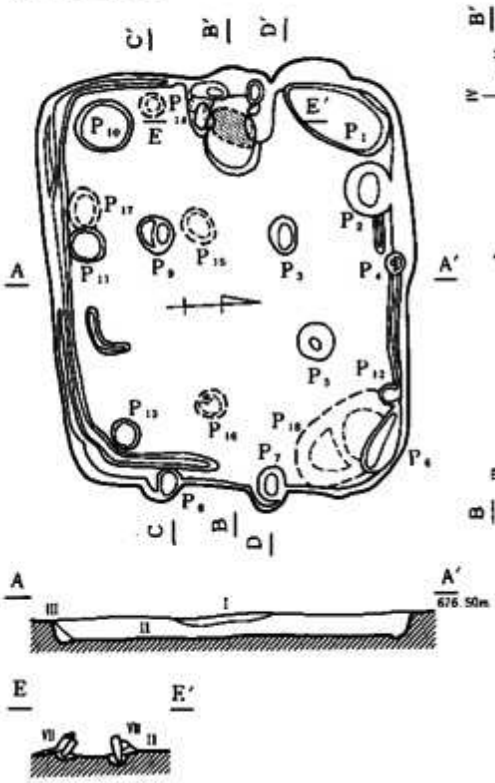




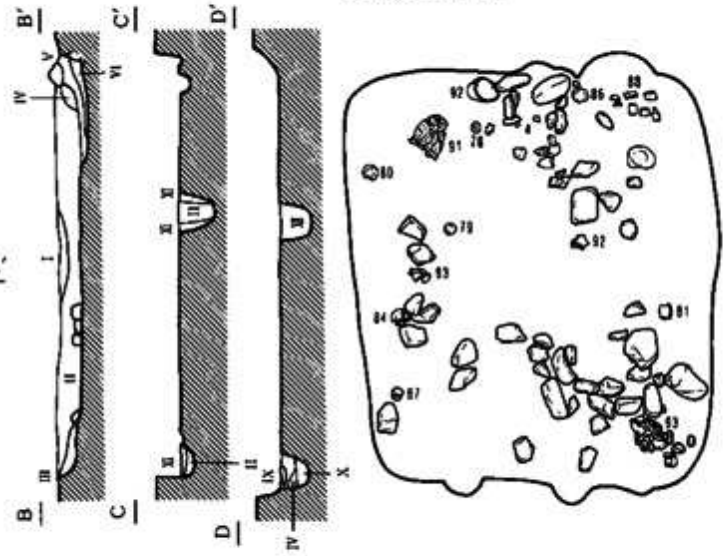
I：黒色土（礫少量混入）
II：黒褐色土（礫少量混入）、ピット埋土
III：黒褐色土（小礫・焼土粒混入）
IV：黒褐色土（焼土粒多量混入）
V：暗褐色土（焼土粒多量混入）
VI：黒褐色土（焼土塊多量混入）
VII：黄灰白色粘土
VIII：黒褐色土（焼土塊・灰多量混入）



第8号住居址

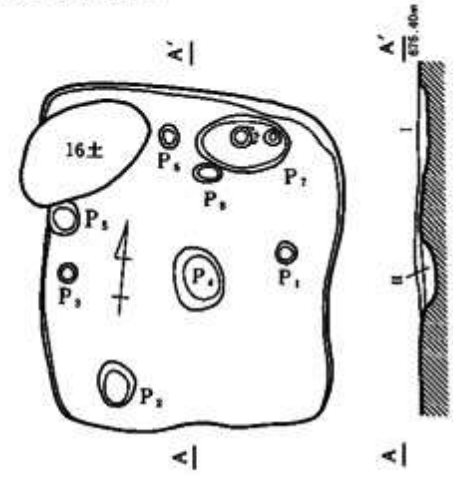


遺物出土状況



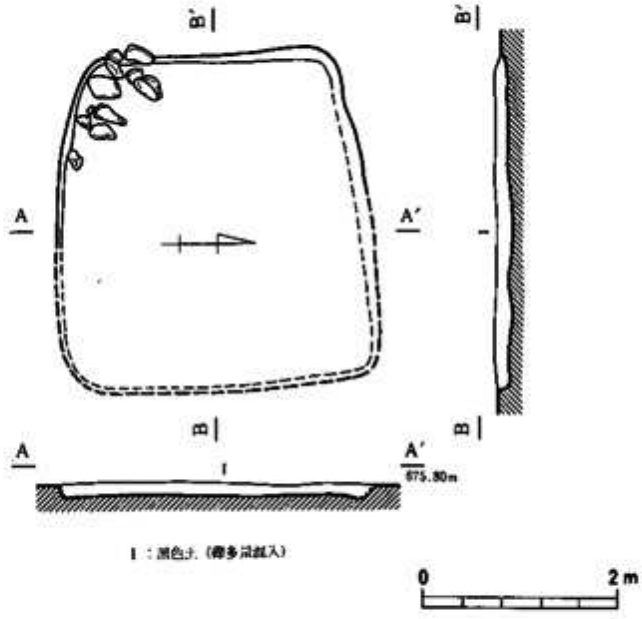
Ⅰ：黒褐色土（炭化物混入）
Ⅱ：黒褐色土
Ⅲ：黒褐色土（黄褐色土塊多量混入）
Ⅳ：黒褐色土（黄色土塊多量混入）
Ⅴ：黒褐色土（炭化物・黄色土塊少量混入）
Ⅵ：黒褐色土（焼土・炭化物多量混入）
Ⅶ：暗黄褐色土（暗褐色土塊多量混入）
Ⅷ：黒色土
Ⅸ：黒褐色土（黄色土塊少量混入）
Ⅹ：暗褐色土（黄色土塊多量混入）
Ⅺ：黒褐色土（黄色土粒多量混入）
Ⅻ：暗褐色土（小礫・黄色土粒多量混入）

第9号住居址



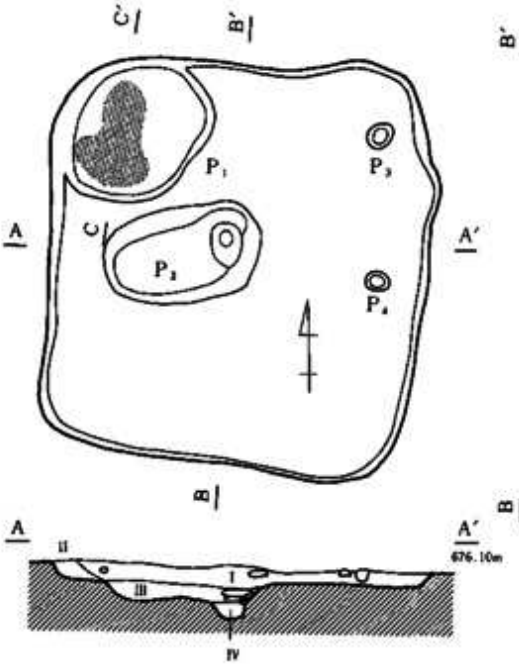
Ⅰ：黒褐色土（黄色土粒多量混入）
Ⅱ：黒色土

第10号住居址

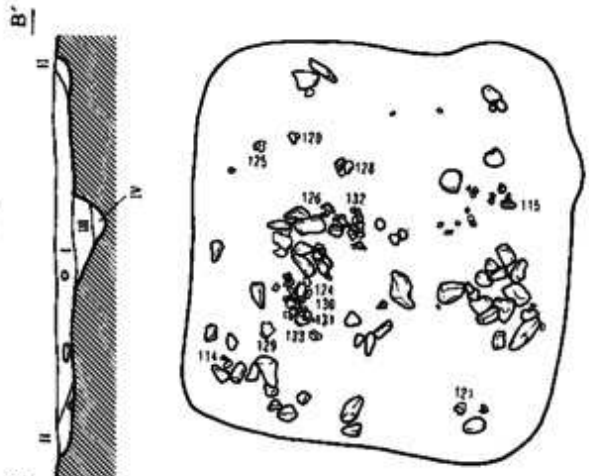


Ⅰ：黒色土（礫多量混入）

第11号住居址

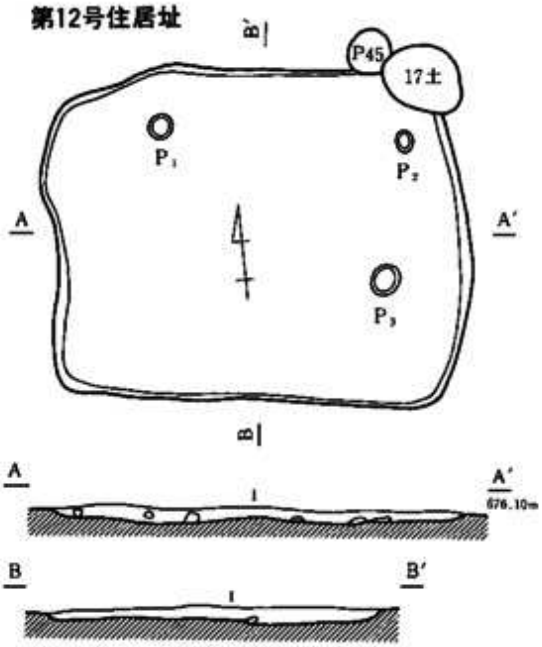


遺物出土状況



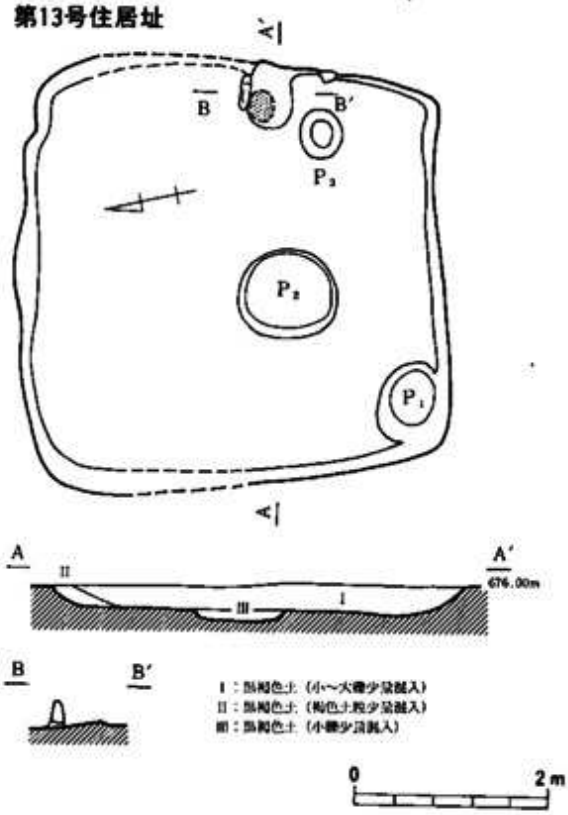
I：黒褐色土（礫多量混入）
II：黒褐色土（黄～茶褐色土粒多量混入）
III：黒褐色土（炭化物粒・黄色土粒少量混入）
IV：暗褐色土（黄色土粒・小礫多量混入）
V：黒色土（黄色土粒・小礫少量混入）
VI：黄白色粘土

第12号住居址



I：黒褐色土（小～大礫多量混入）

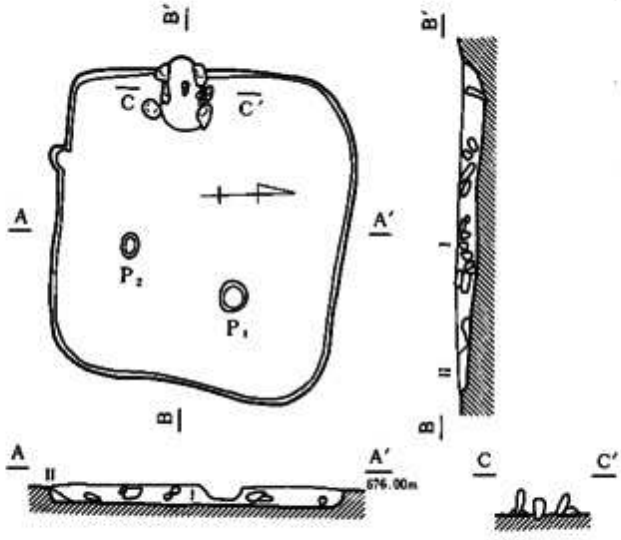
第13号住居址



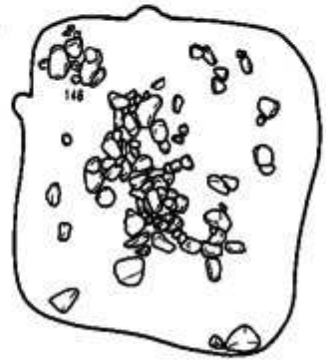
I：黒褐色土（小～大礫少量混入）
II：黒褐色土（褐色土粒少量混入）
III：黒褐色土（小礫少量混入）

0　2m

第14号住居址

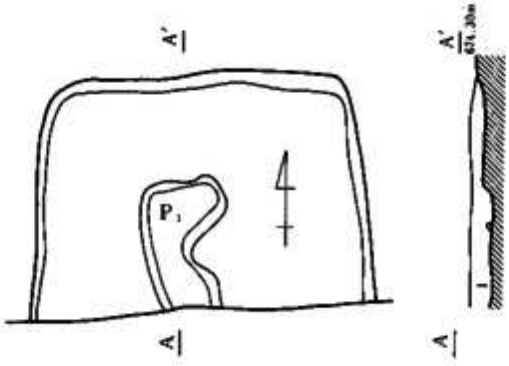


遺物出土状況



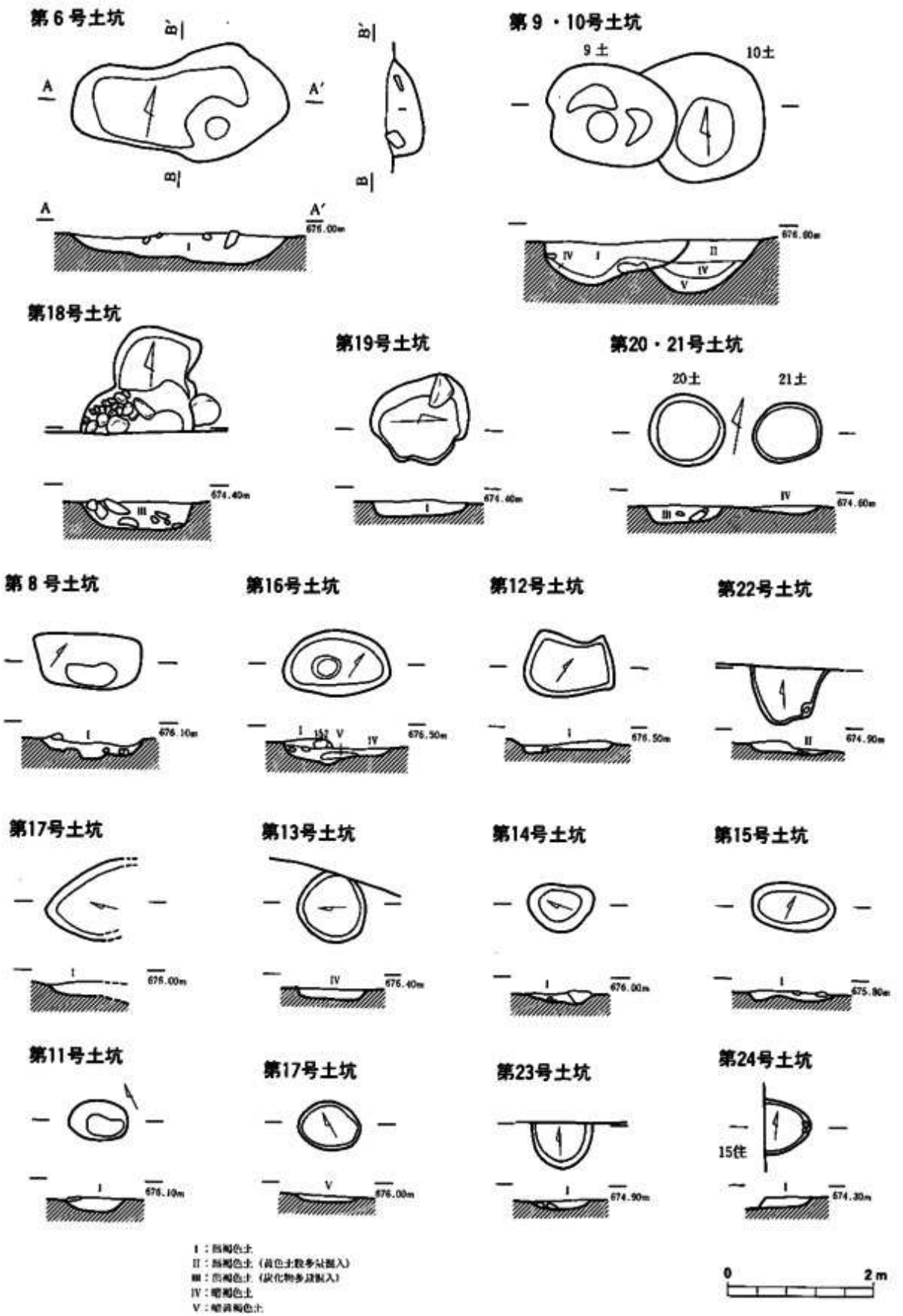
I：黒褐色土（小～大礫混入）
II：黒褐色土（黄色土粒・塊多量混入）

第15号住居址

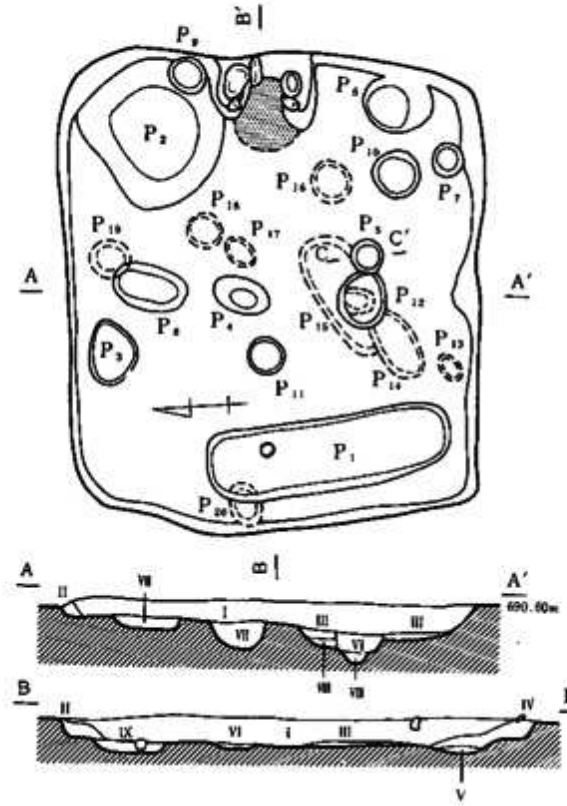


I：黒褐色土（礫混入）

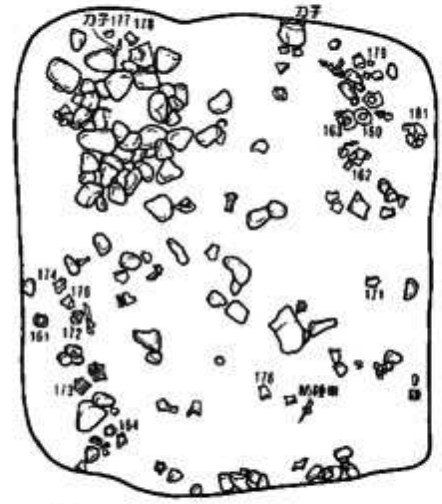
0　2m


第6号土坑
A
A′
B
B′
676.00m
第9・10号土坑
9土
10土
676.60m
第18号土坑
674.40m
第19号土坑
674.40m
第20・21号土坑
20土
21土
674.60m
第8号土坑
676.10m
第16号土坑
676.50m
第12号土坑
676.50m
第22号土坑
674.90m
第17号土坑
676.00m
第13号土坑
676.40m
第14号土坑
676.00m
第15号土坑
675.80m
第11号土坑
676.10m
第17号土坑
676.00m
第23号土坑
674.90m
第24号土坑
15住
674.30m
Ⅰ：黒褐色土
Ⅱ：黒褐色土（黄色土粒多量混入）
Ⅲ：黒褐色土（炭化物多量混入）
Ⅳ：暗褐色土
Ⅴ：暗黄褐色土
0
2m

第1号住居址

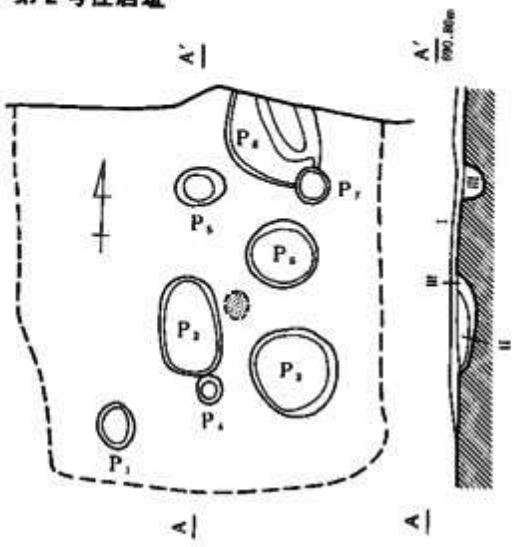


遺物出土状況



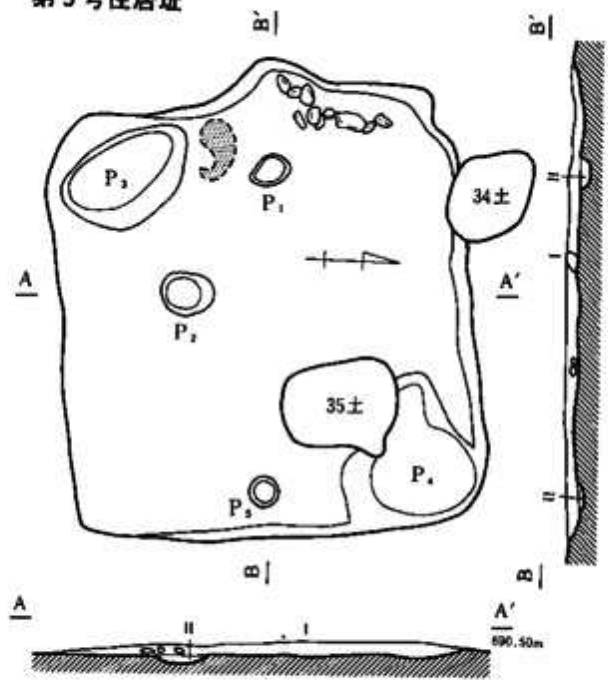
Ⅰ：暗褐色土（礫・黄色土粒少量混入）
Ⅱ：暗褐色土（礫・茶褐色土塊少量混入）
Ⅲ：暗褐色土（黄褐色土粒少量混入）、粘土
Ⅳ：暗褐色土（焼土粒・炭化物粒少量混入）
Ⅴ：粘土
Ⅵ：黒褐色土（小礫・炭化物粒・黄褐色土粒少量混入）
Ⅶ：暗褐色土（小礫少量混入）
Ⅷ：暗褐色土
Ⅸ：黒褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）

第2号住居址



Ⅰ：暗褐色土（焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒少量混入）
Ⅱ：黒褐色土（礫・黄褐色土粒少量混入）
Ⅲ：暗褐色土（黄褐色土粒少量混入）

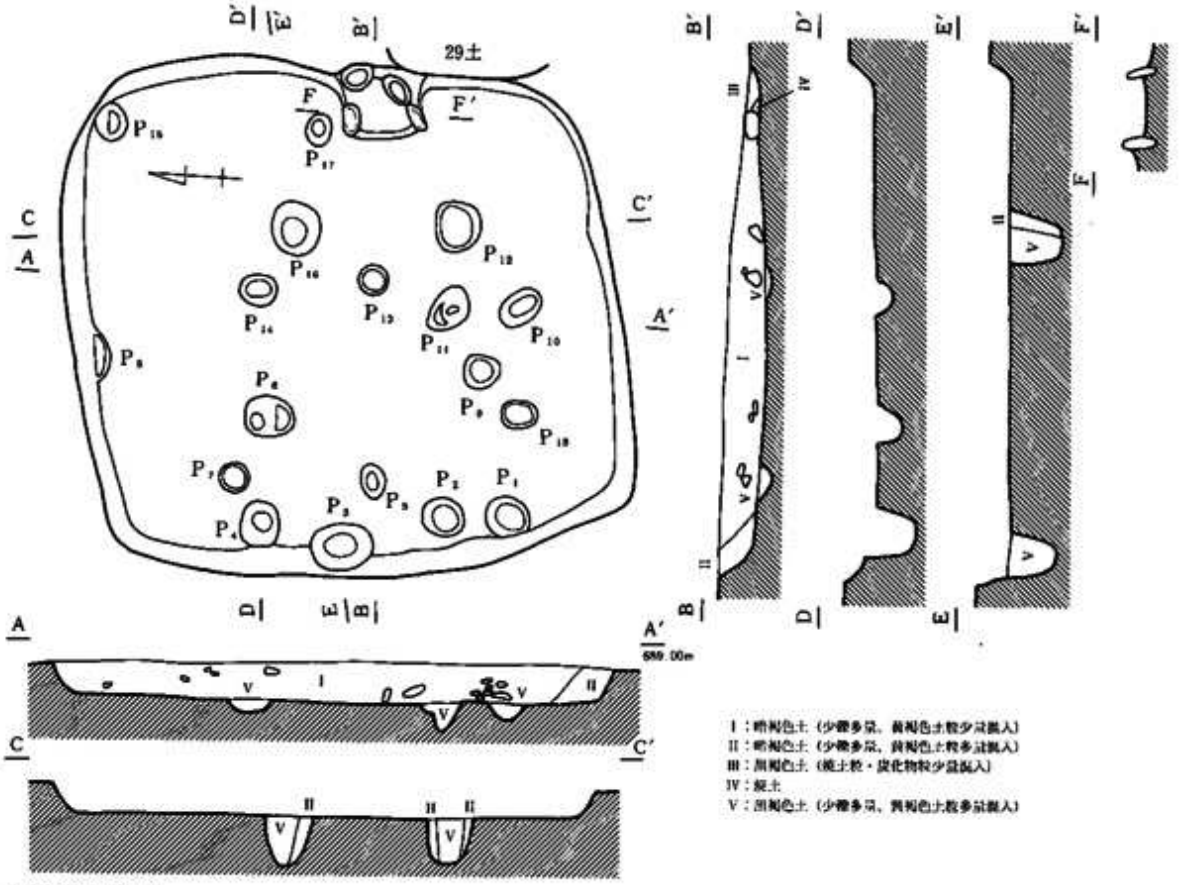
第3号住居址



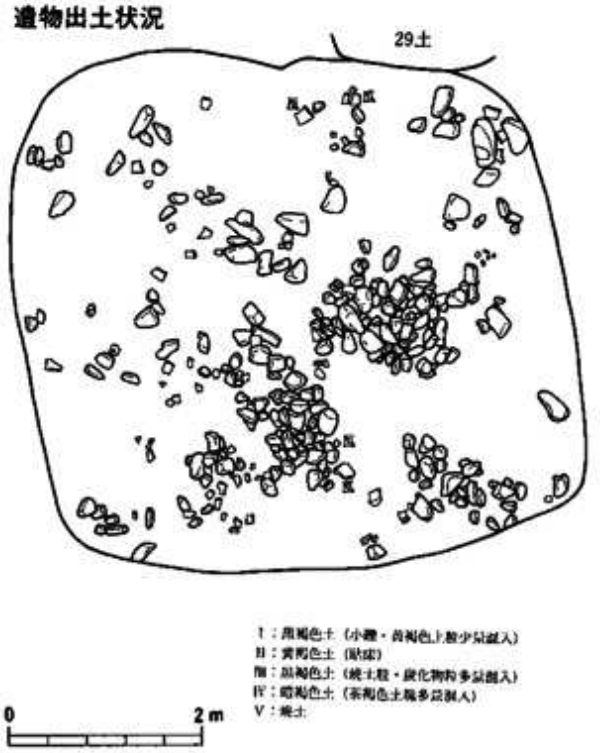
Ⅰ：黒褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
Ⅱ：暗褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）

0 2m

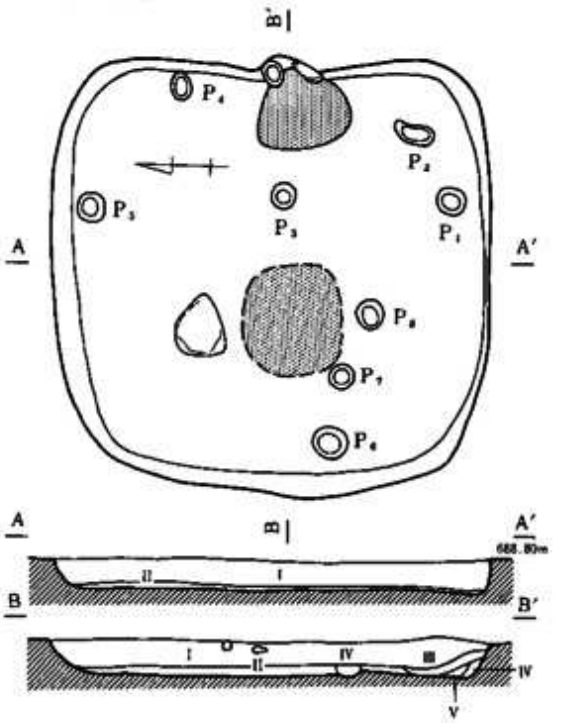
第4号住居址



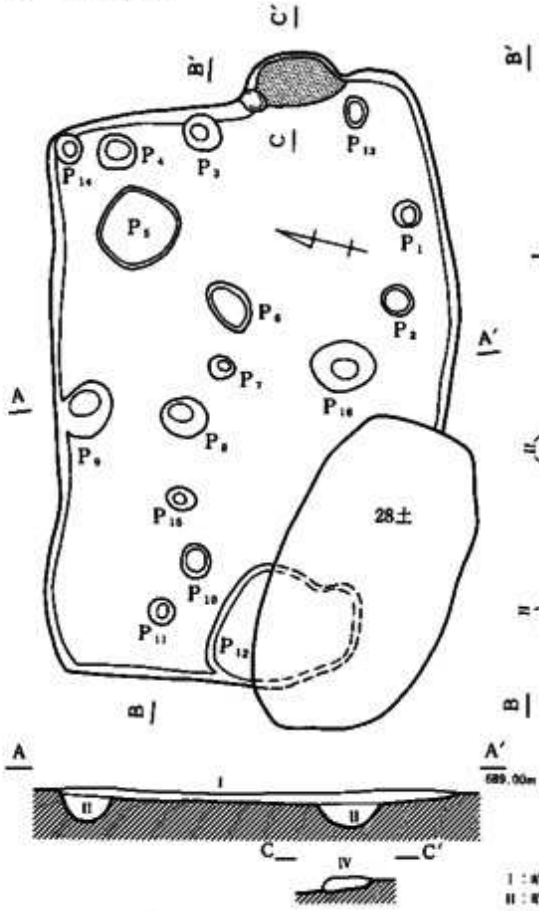
遺物出土状況



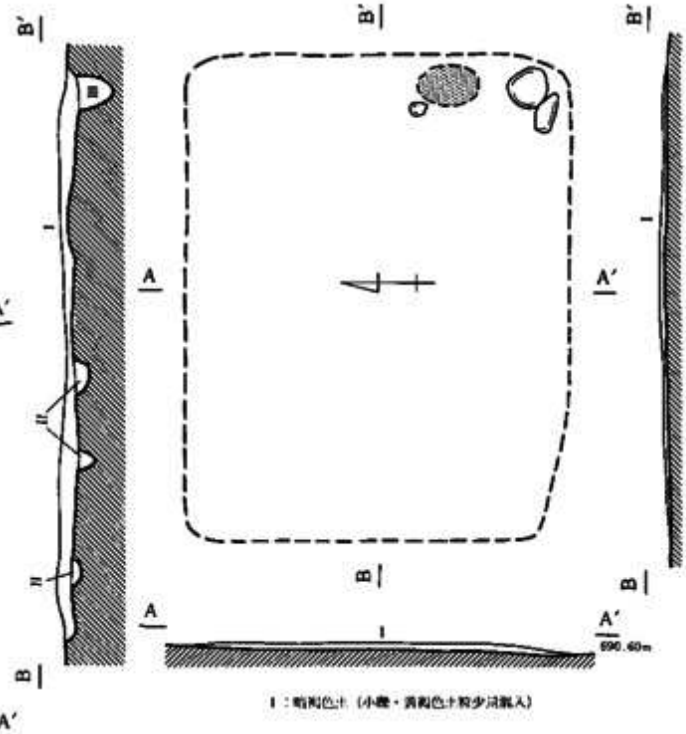
第7号住居址



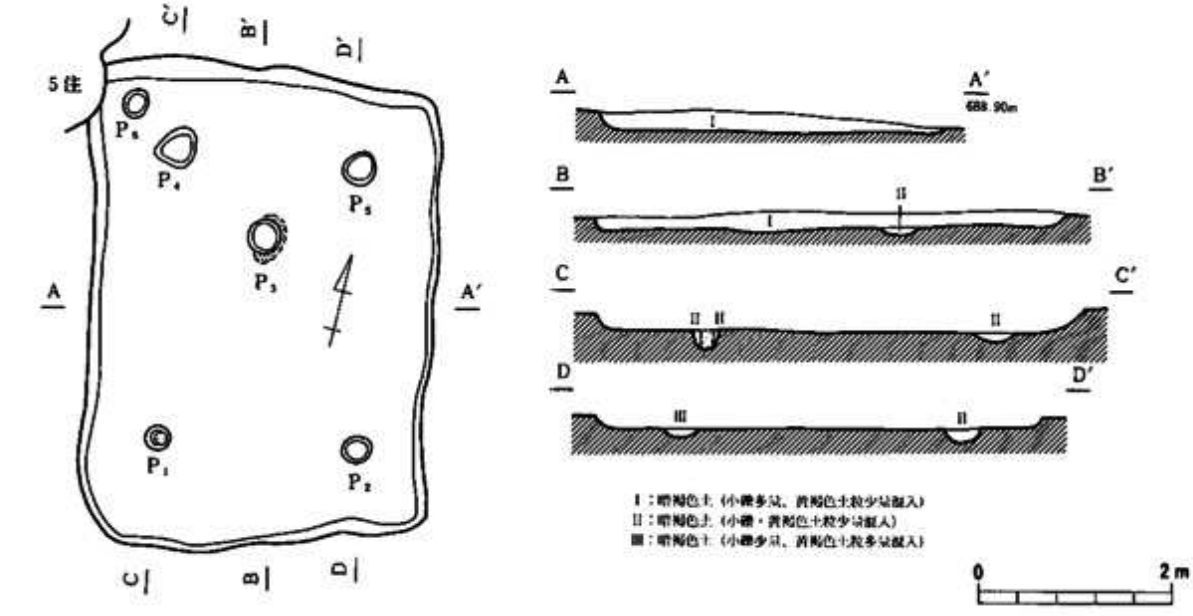
第5号住居址



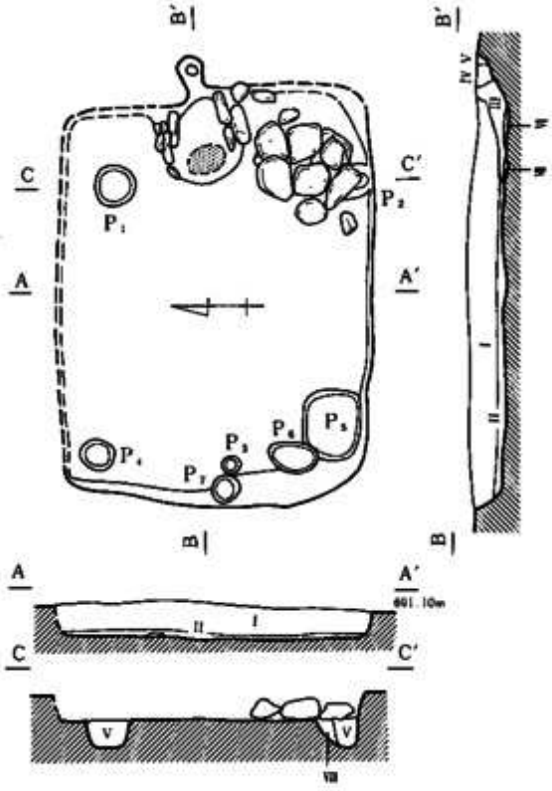
第9号住居址



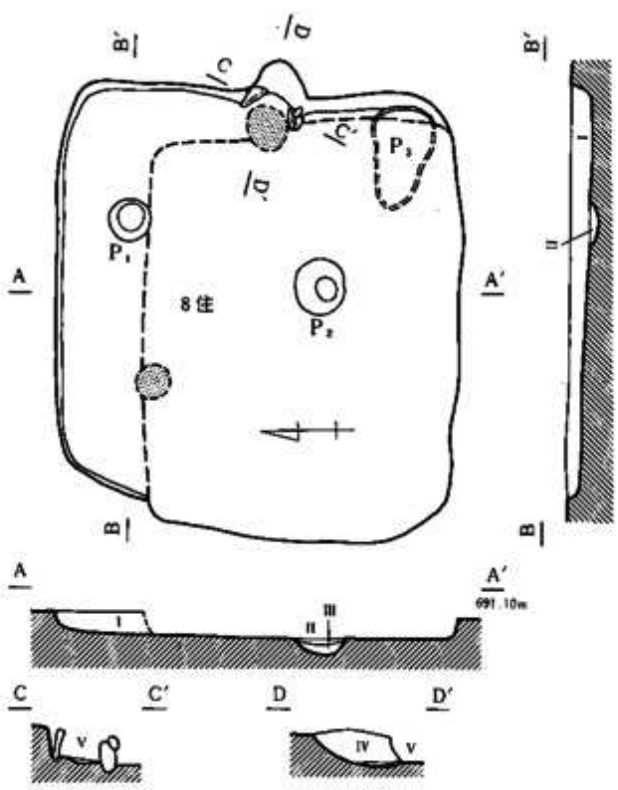
第6号住居址



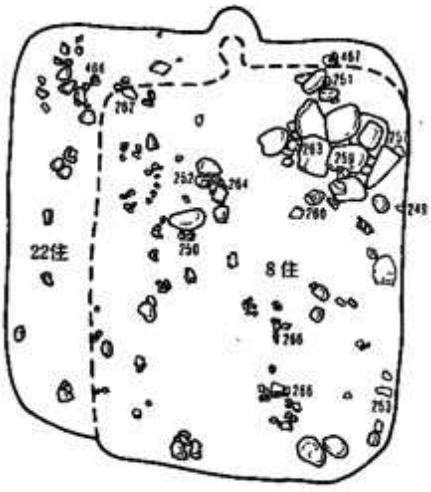
第8号住居址



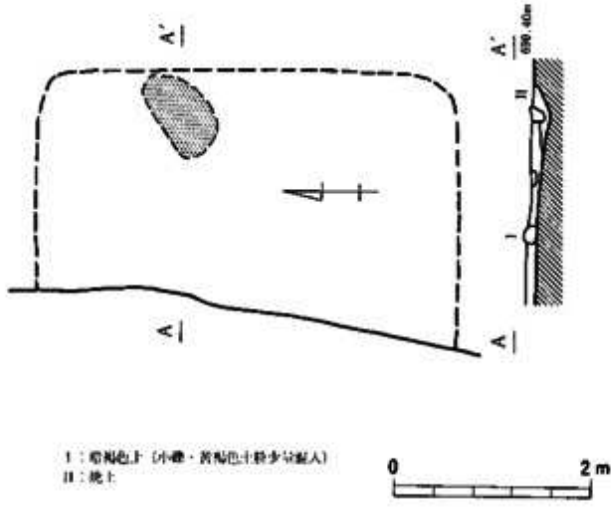
第22号住居址



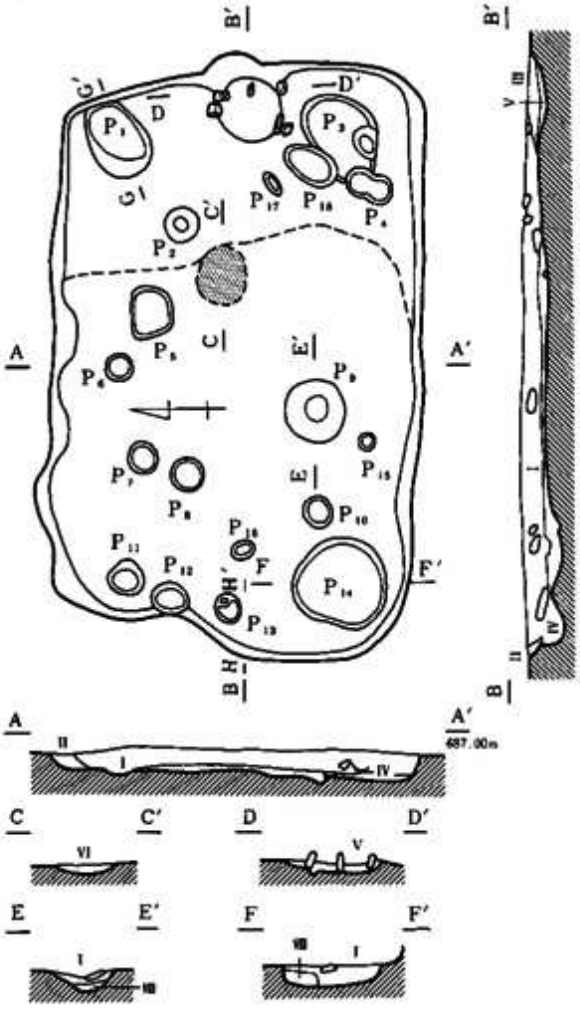
遺物出土状況



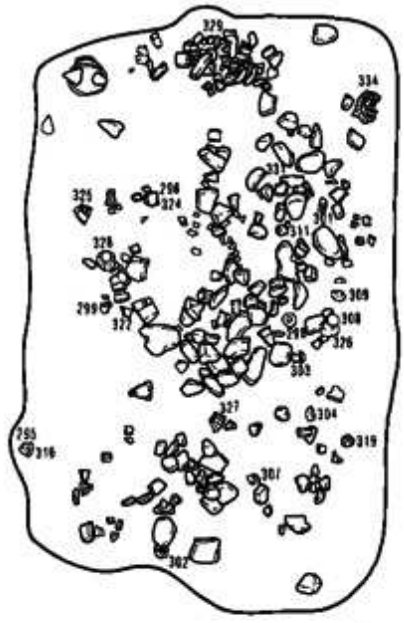
第10号住居址

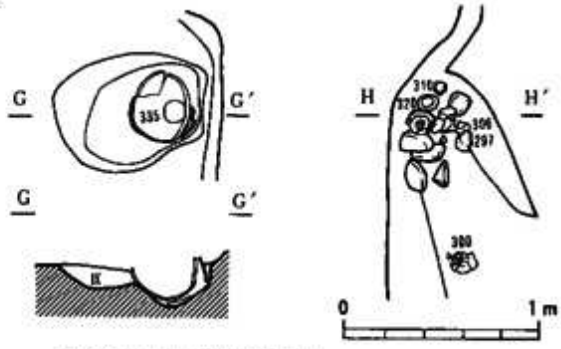


第12号住居址



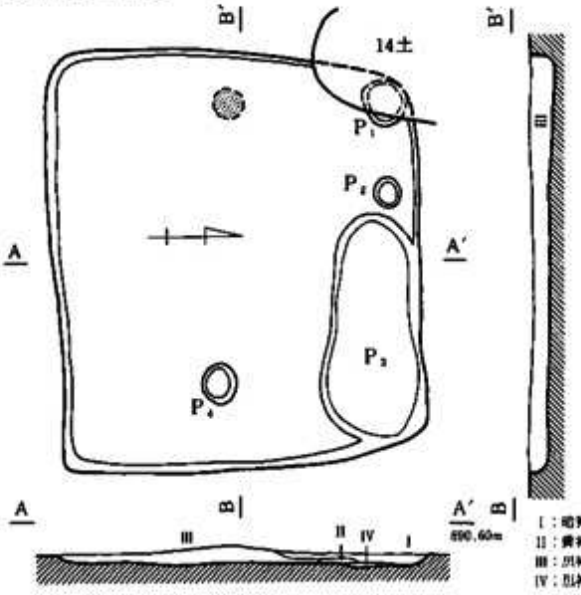
遺物出土状況





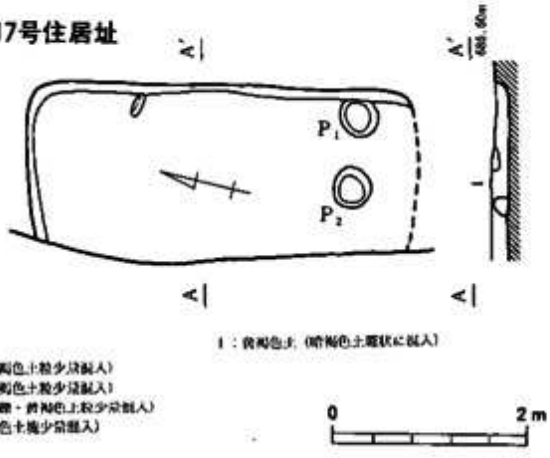
Ⅰ：黒褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
Ⅱ：黒褐色土（小礫少量、黄褐色土粒多量混入）
Ⅲ：黒褐色土（小礫・焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒少量混入）
Ⅳ：黒褐色土（黄色土塊多量混入）、貼床
Ⅴ：暗褐色土（黄色土粒・塊多量混入）
Ⅵ：焼土
Ⅶ：暗褐色土（小礫・炭化物粒・黄褐色土粒少量混入）
Ⅷ：暗褐色土（小礫少量、黄褐色土粒多量混入）
Ⅸ：暗褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）

第11号住居址



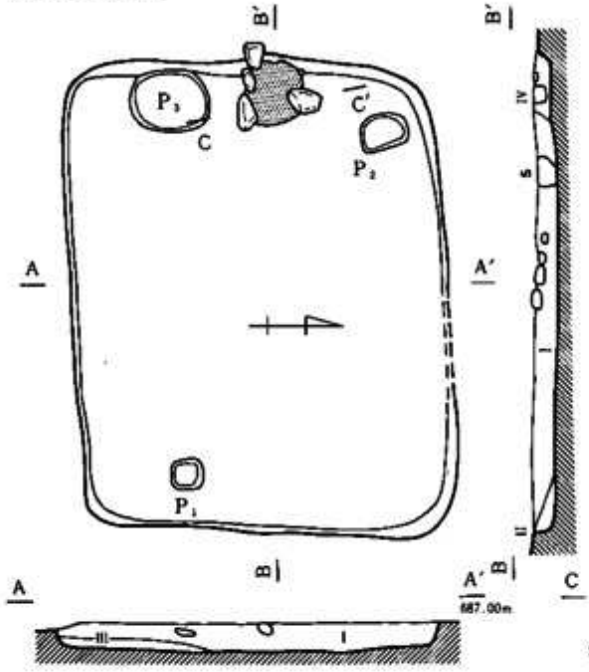
Ⅰ：暗褐色土（黄褐色土粒少量混入）
Ⅱ：黄褐色土（茶褐色土粒少量混入）
Ⅲ：黒褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
Ⅳ：黒褐色土（黄色土塊少量混入）

第17号住居址

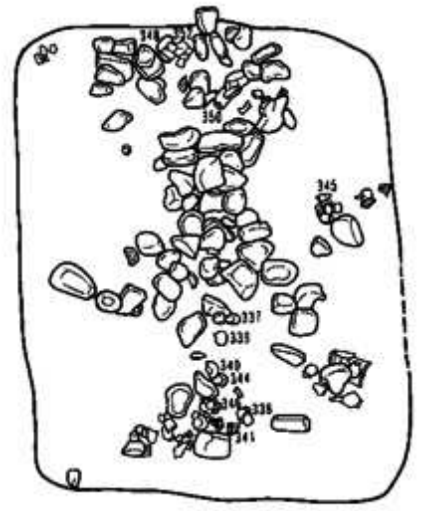


Ⅰ：黄褐色土（暗褐色土斑状に混入）

第13号住居址

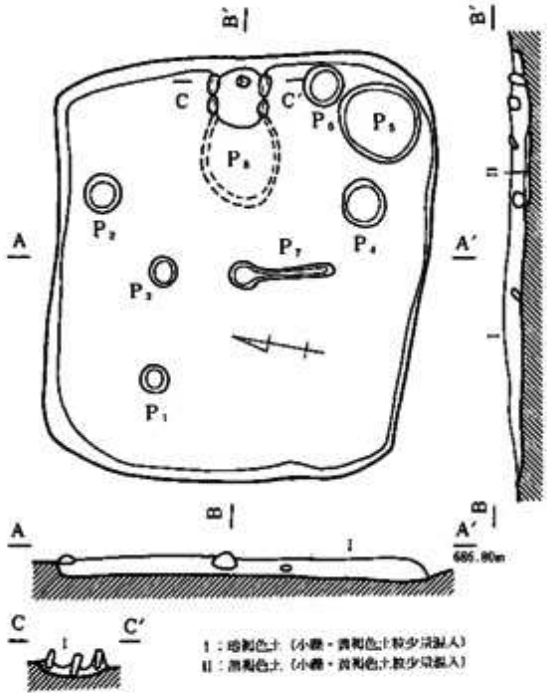


遺物出土状況



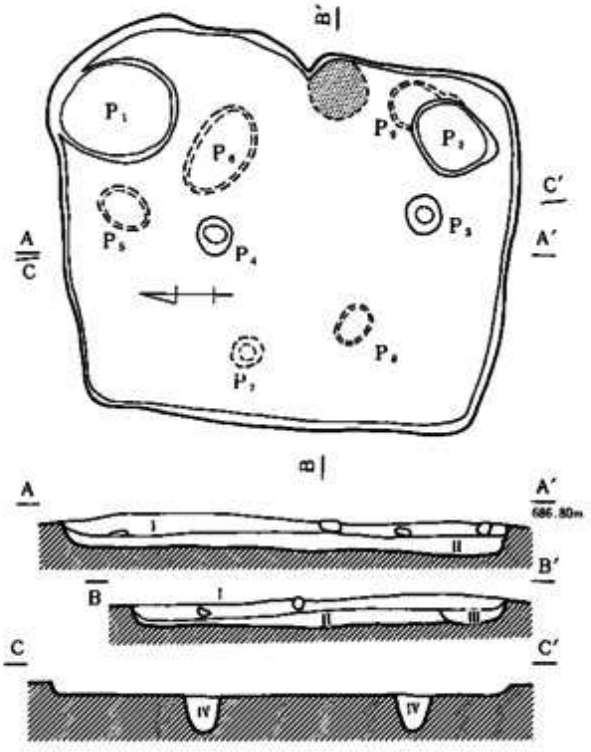
I：暗褐色土（黄褐色土粒・茶褐色土粒少量混入）
II：暗褐色土（黄褐色土粒多量混入）
III：黒褐色土
IV：黒褐色土（焼土粒・炭化物粒少量混入）
V：焼土

第14号住居址



I：暗褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
II：黒褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）

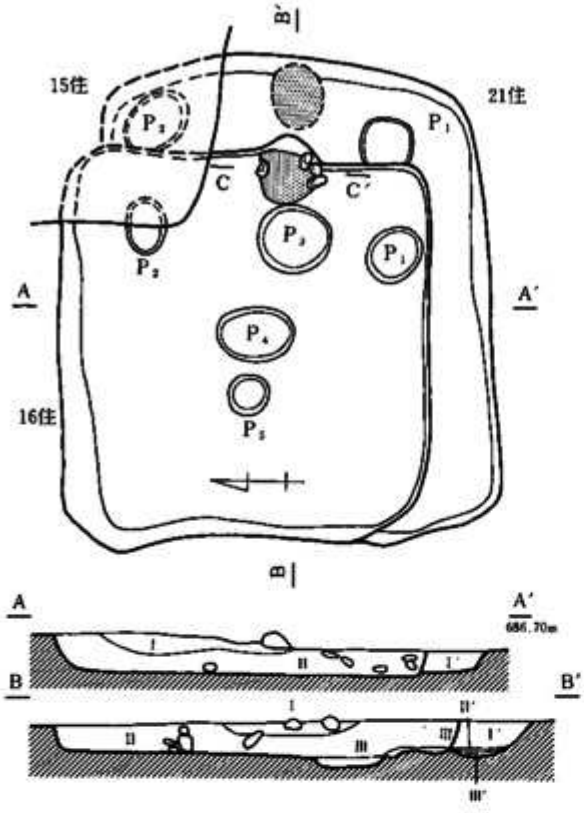
第15号住居址



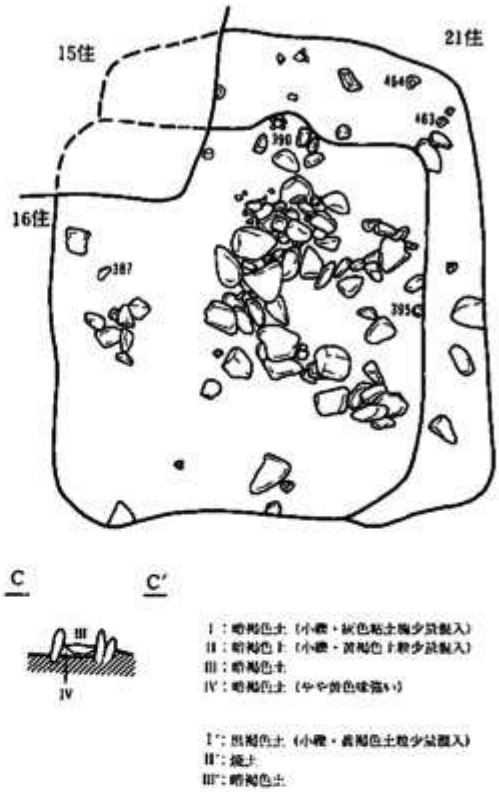
I：暗褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
II：暗褐色土（黄褐色土粒多量混入）、貼床
III：焼土
IV：暗褐色土（黄褐色土粒少量混入）

0 2m

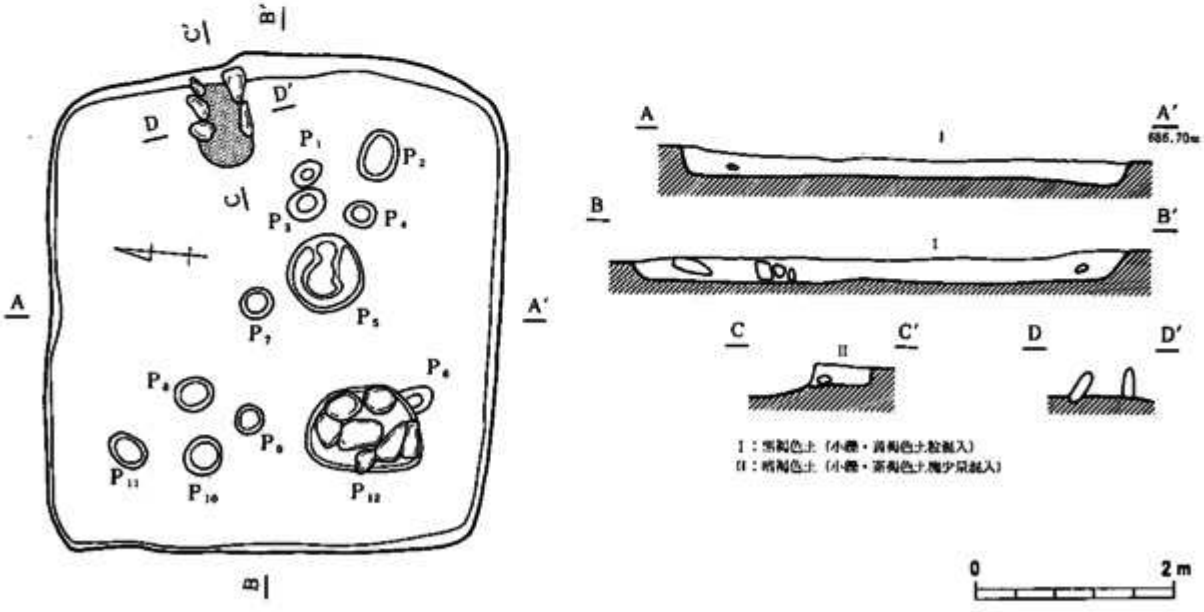
第16・21号住居址



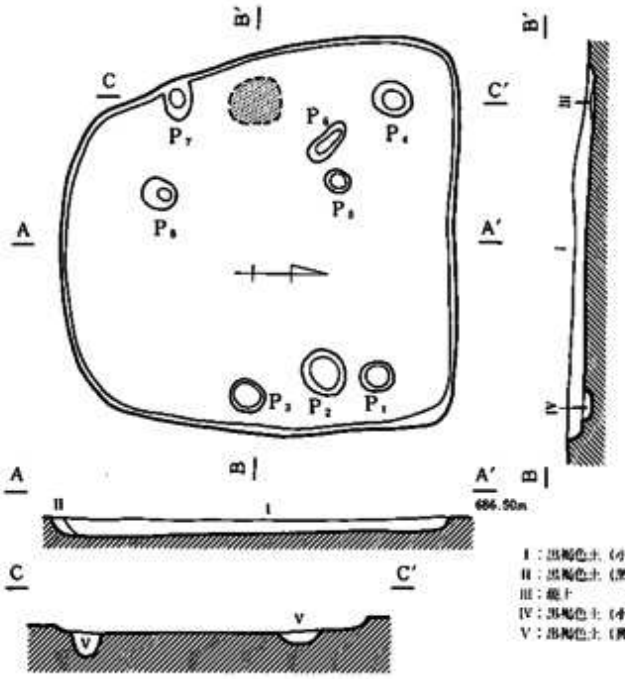
遺物出土状況



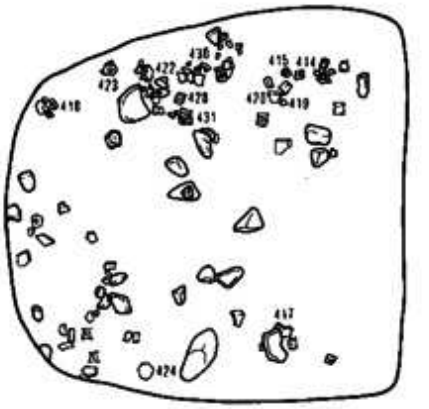
第18号住居址



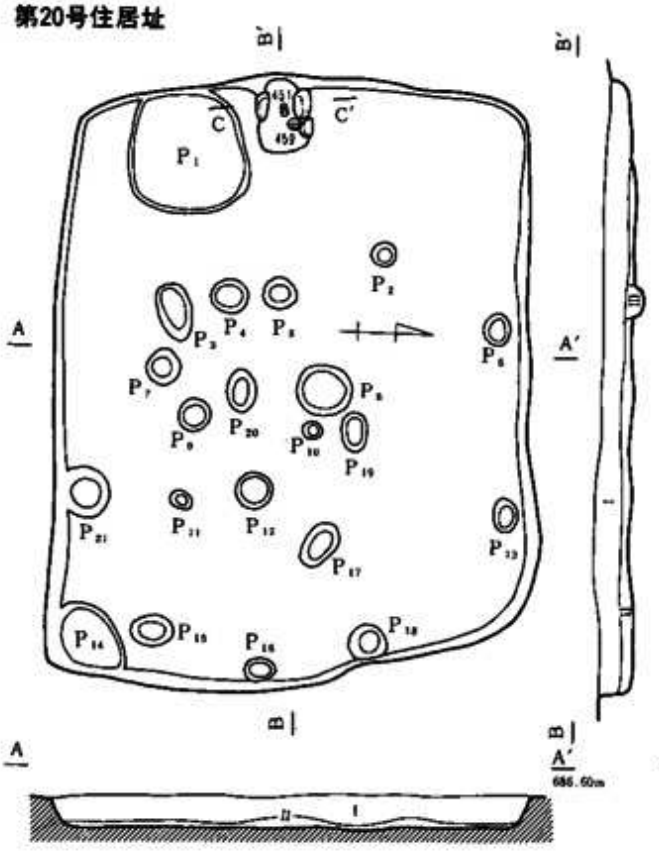
第19号住居址



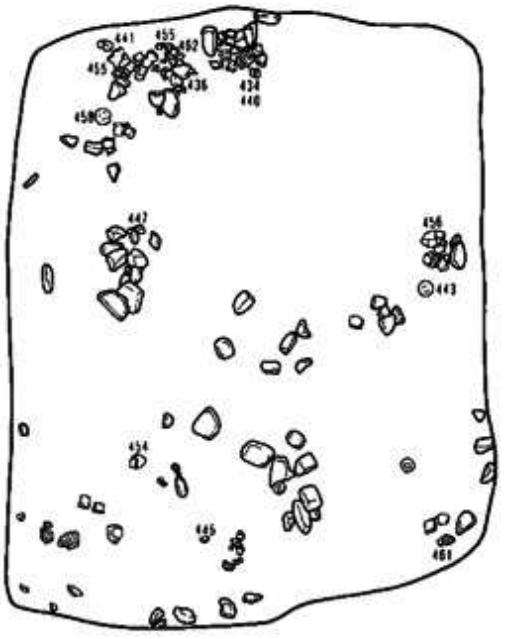
遺物出土状況



第20号住居址

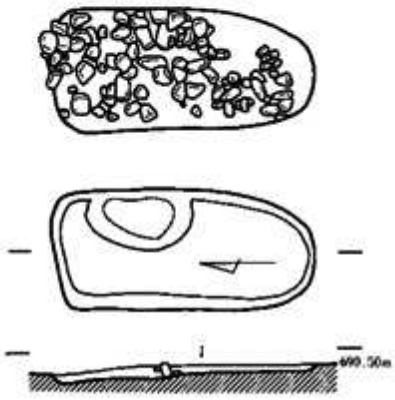


遺物出土状況

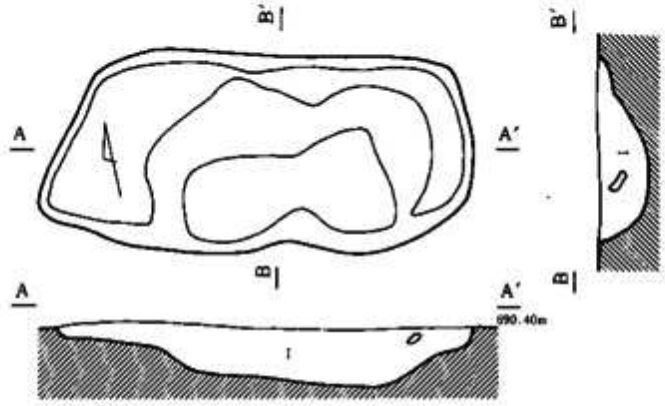


0 2m

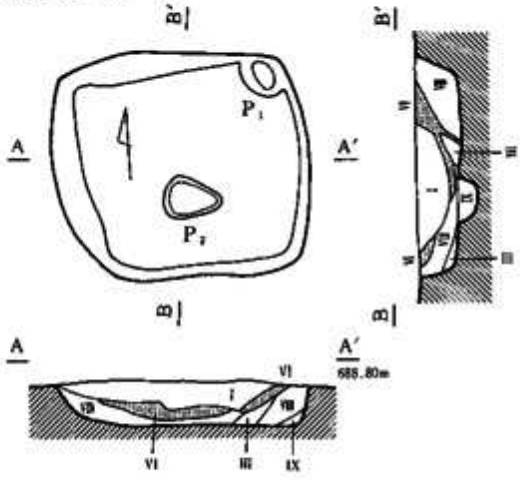
第14号土坑



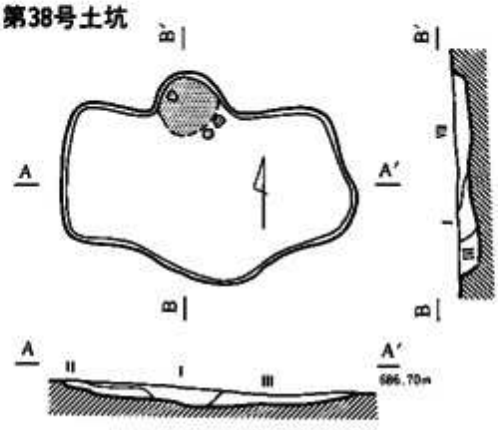
第20号土坑



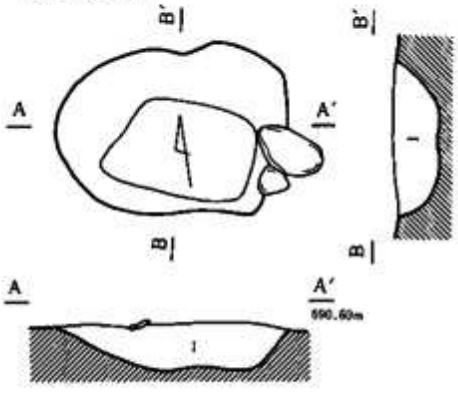
第29号土坑



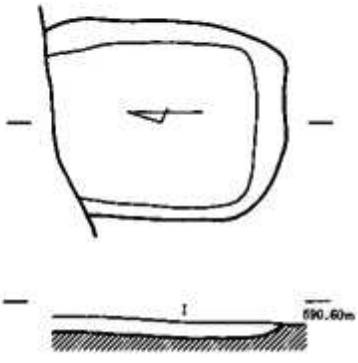
第38号土坑



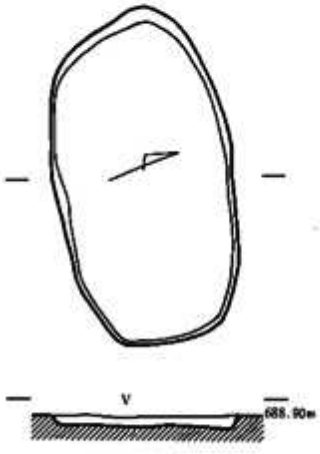
第8号土坑



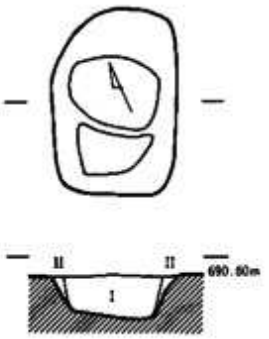
第1号土坑



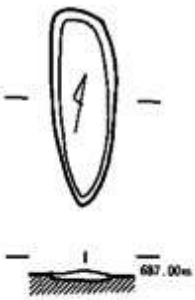
第28号土坑



第5号土坑

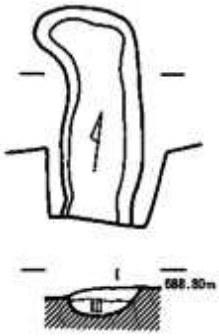


第37号土坑

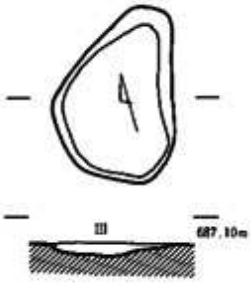


第25号土坑

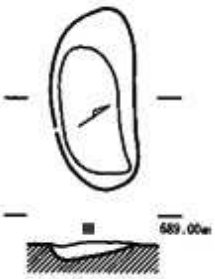
第23号土坑



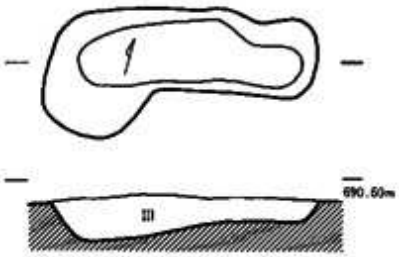
第36号土坑



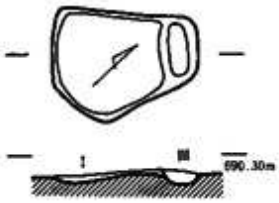
第24号土坑



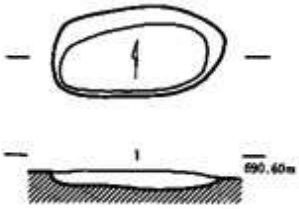
第2号土坑



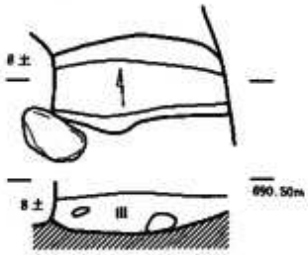
第18号土坑



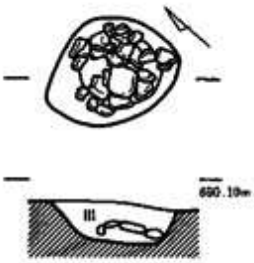
第6号土坑



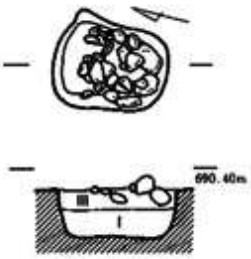
第9号土坑



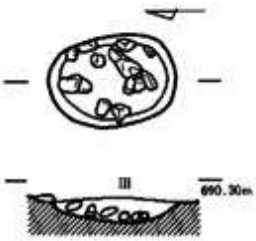
第15号土坑



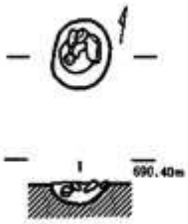
第35号土坑



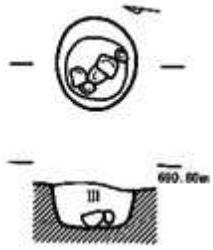
第16号土坑



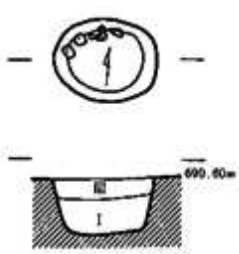
第19号土坑



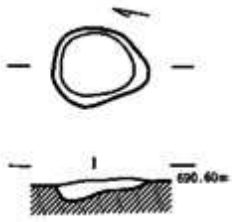
第11号土坑



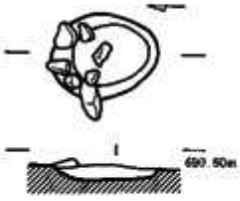
第4号土坑



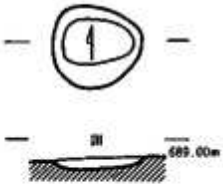
第12号土坑



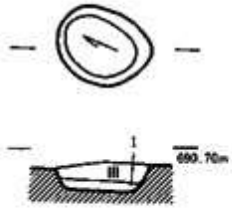
第13号土坑



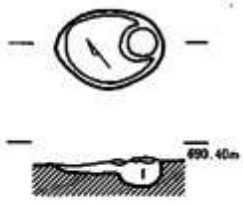
第21号土坑



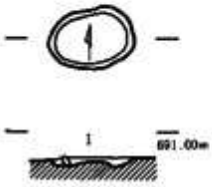
第32号土坑



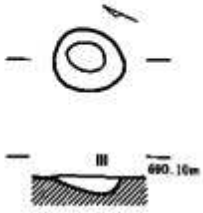
第34号土坑



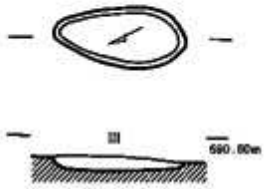
第33号土坑



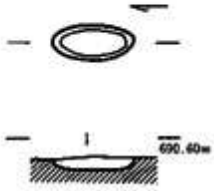
第17号土坑



第7号土坑

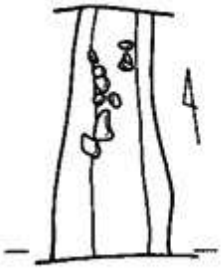


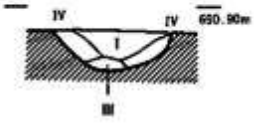
第31号土坑

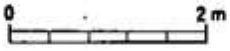


溝状遺構

第1号溝



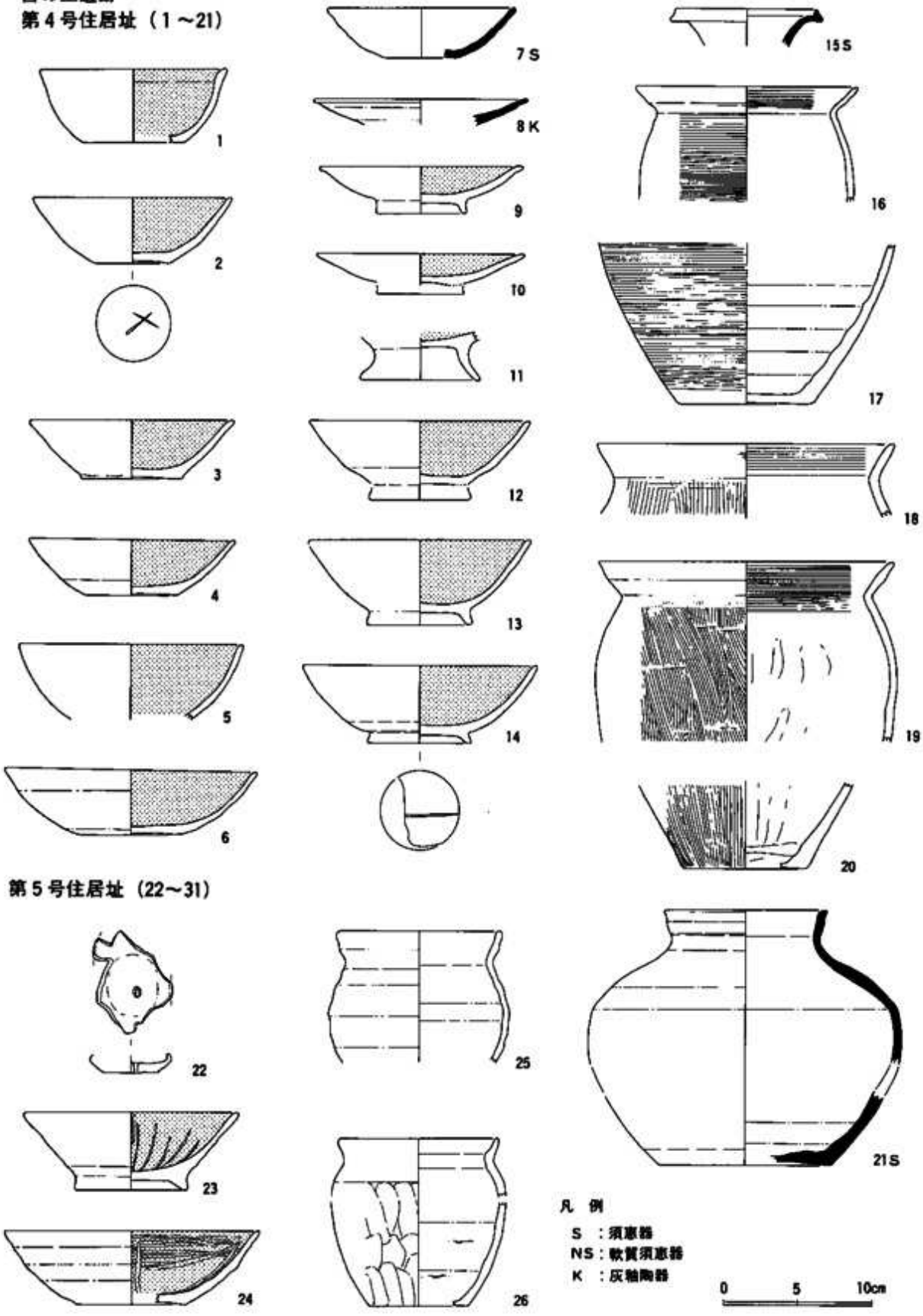




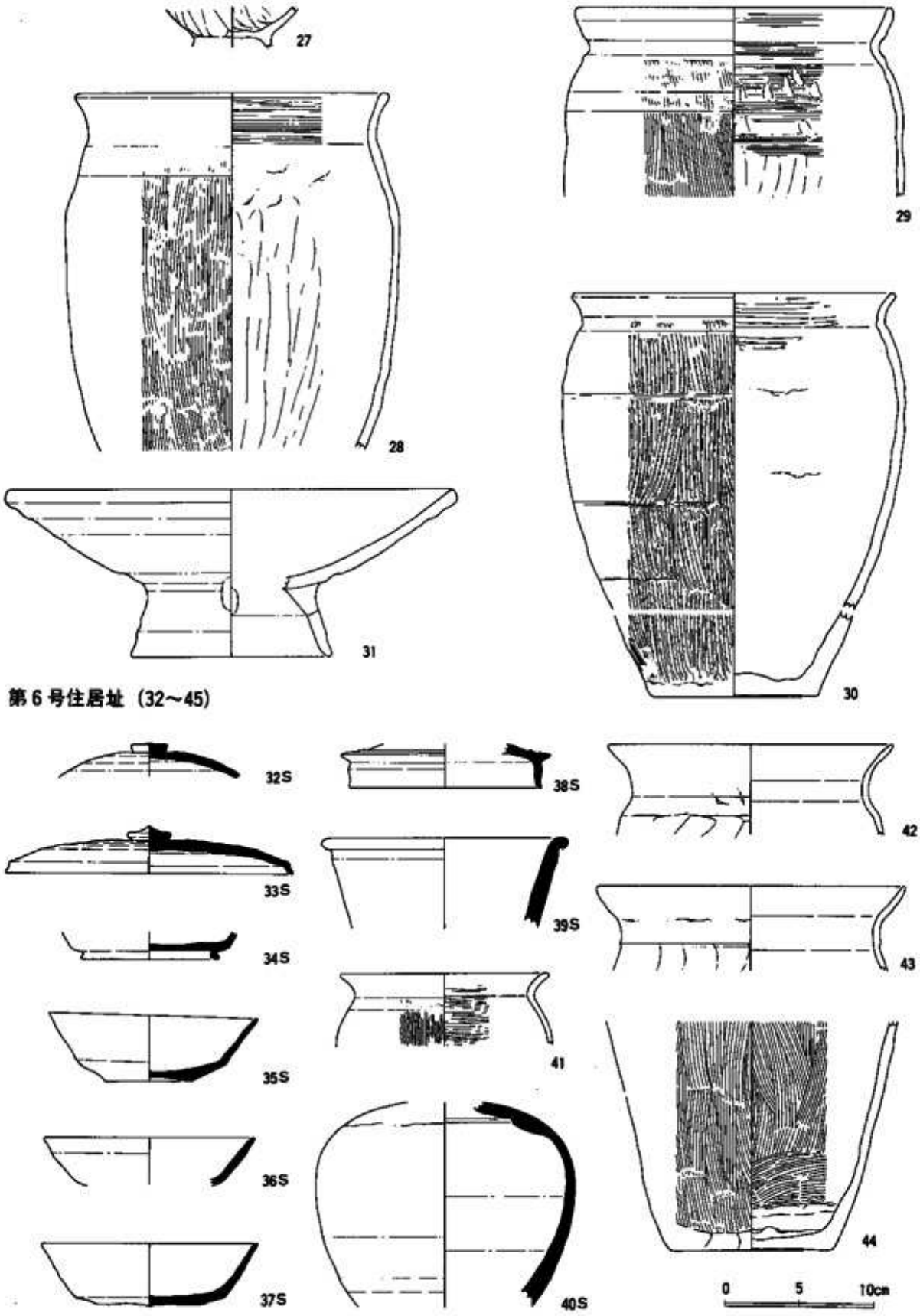
土坑・溝状遺構土層説明

I：暗褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
II：暗褐色土（茶褐色土粒多量混入）
III：黒褐色土（小礫・黄褐色土粒少量混入）
IV：褐色土
V：黒色土（黄色土塊多量混入）
VI：灰色土（軟土層）
VII：黒褐色土（焼土粒・炭化物粒多量混入）
VIII：暗褐色土（炭化物粒少量混入）
IX：暗褐色土（黄褐色土粒多量混入）

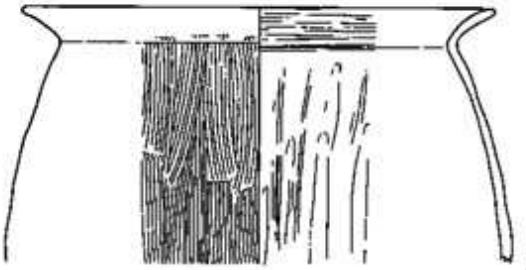
宮の上遺跡
第4号住居址（1～21）

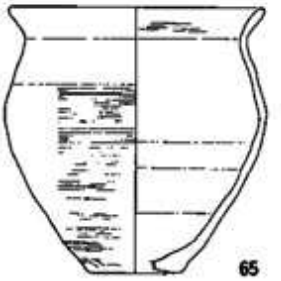


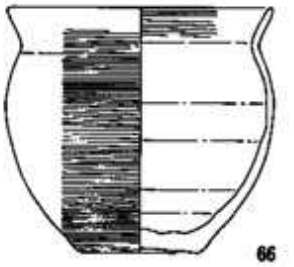
第5号住居址（22～31）


27
28
29
30
31
32S
33S
34S
35S
36S
37S
38S
39S
40S
41
42
43
44
0 5 10cm

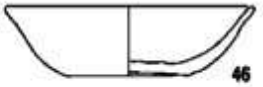
第6号住居址（32～45）


45

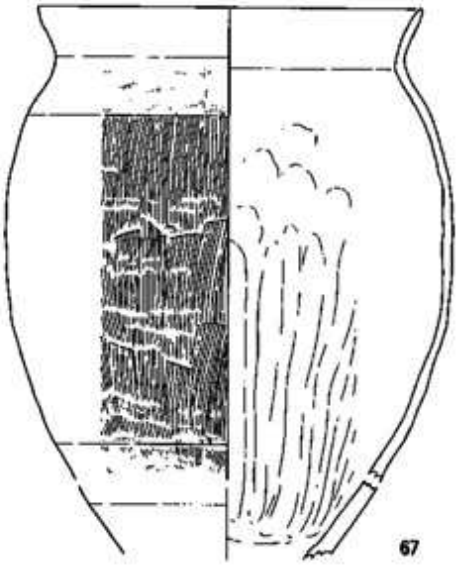

65

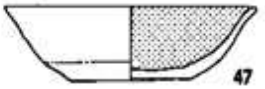

66

第７号住居址（46～76）

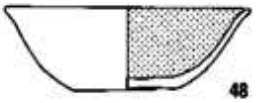

46

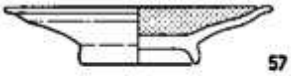
55


67

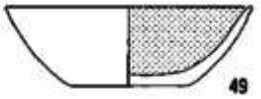

47

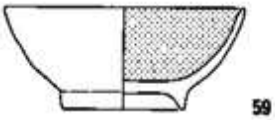
56

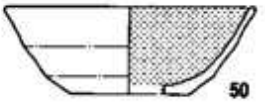

48

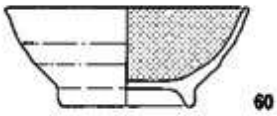

57

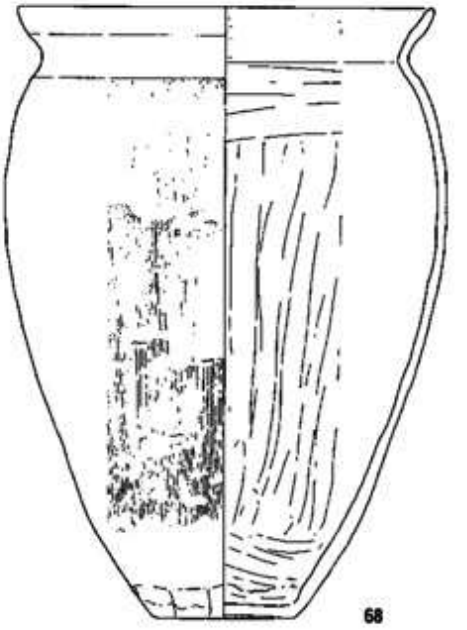
58

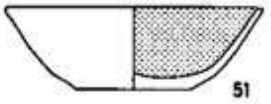

49

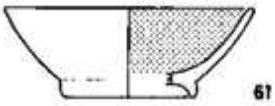

59

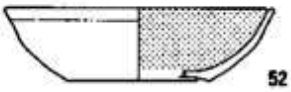

50

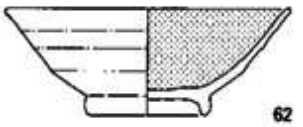

60

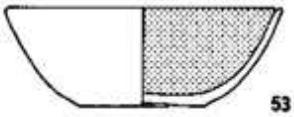

68

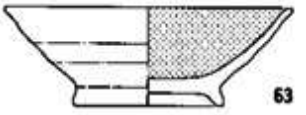

51

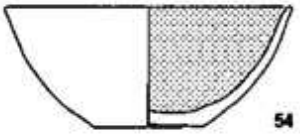

61


52

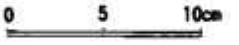

62

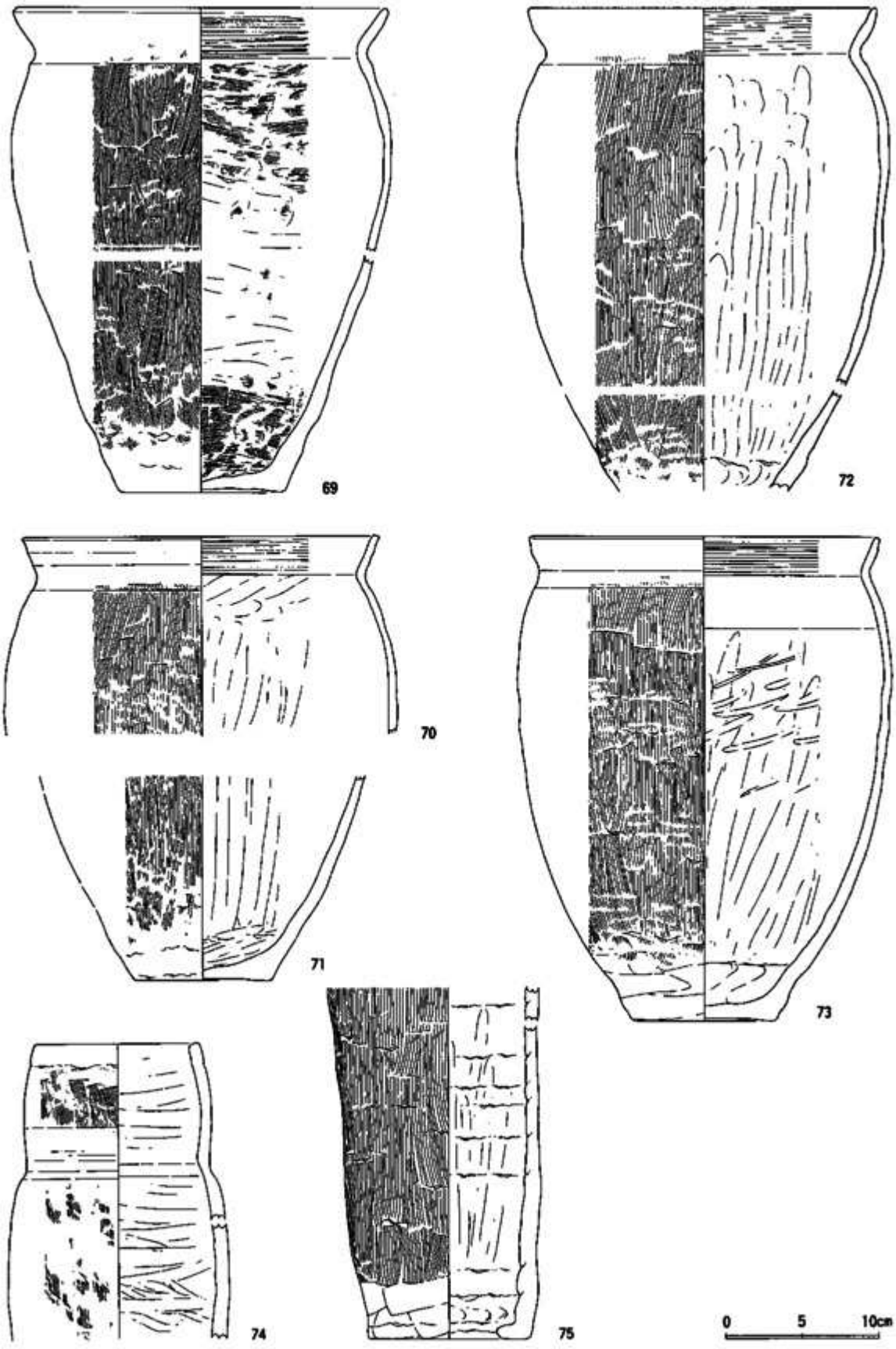

53

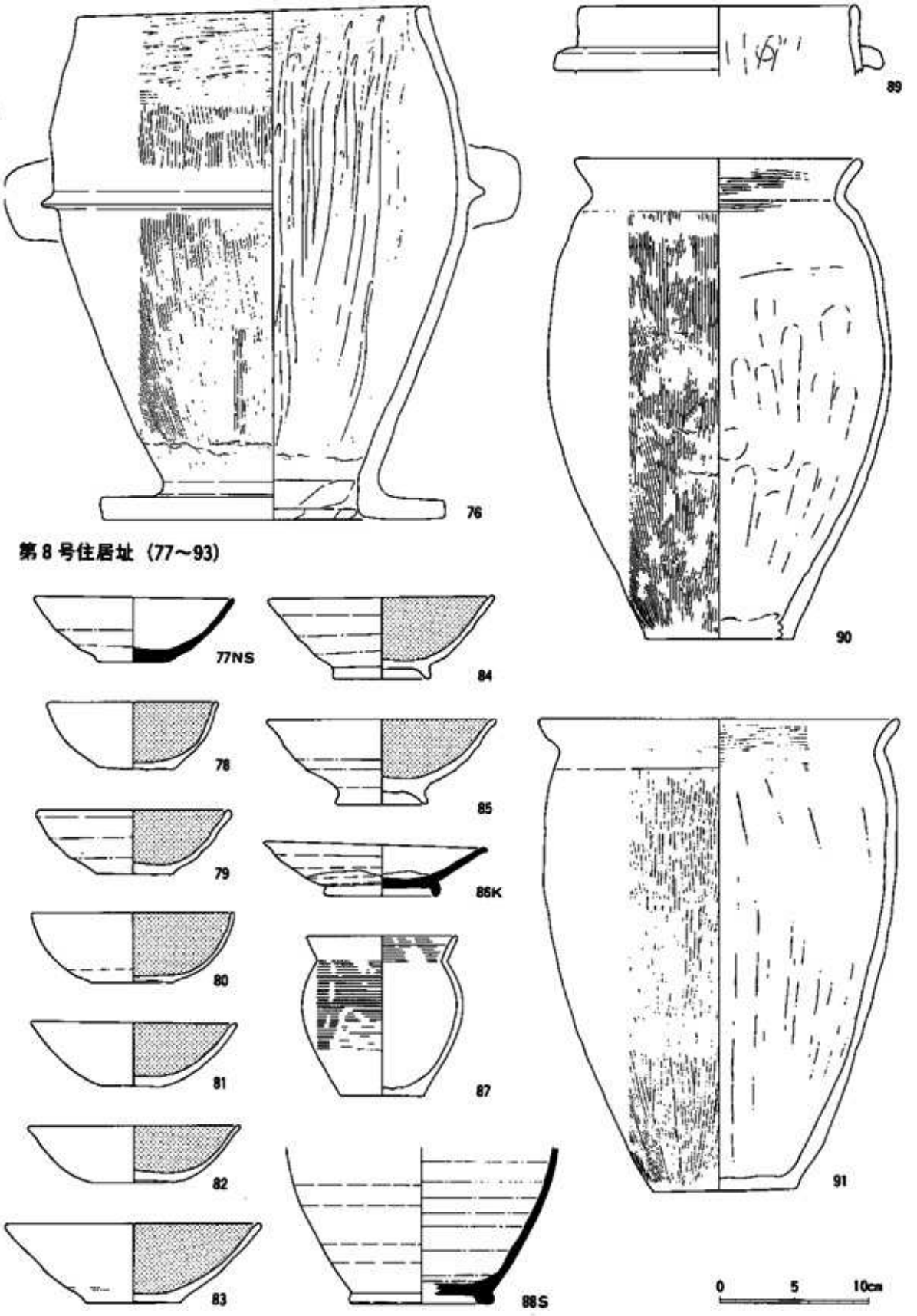

63


54

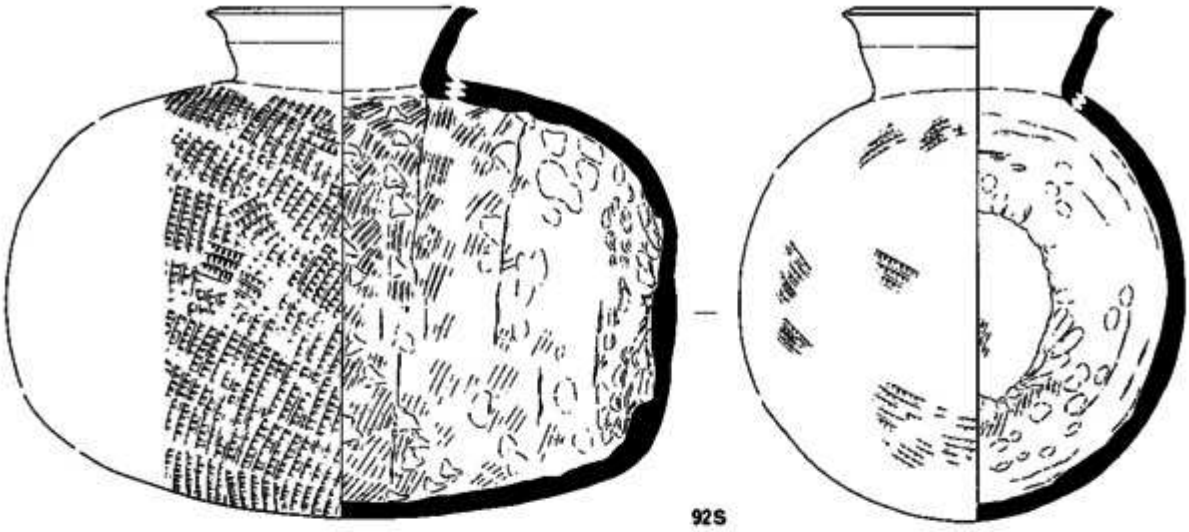
64K


0
5
10cm

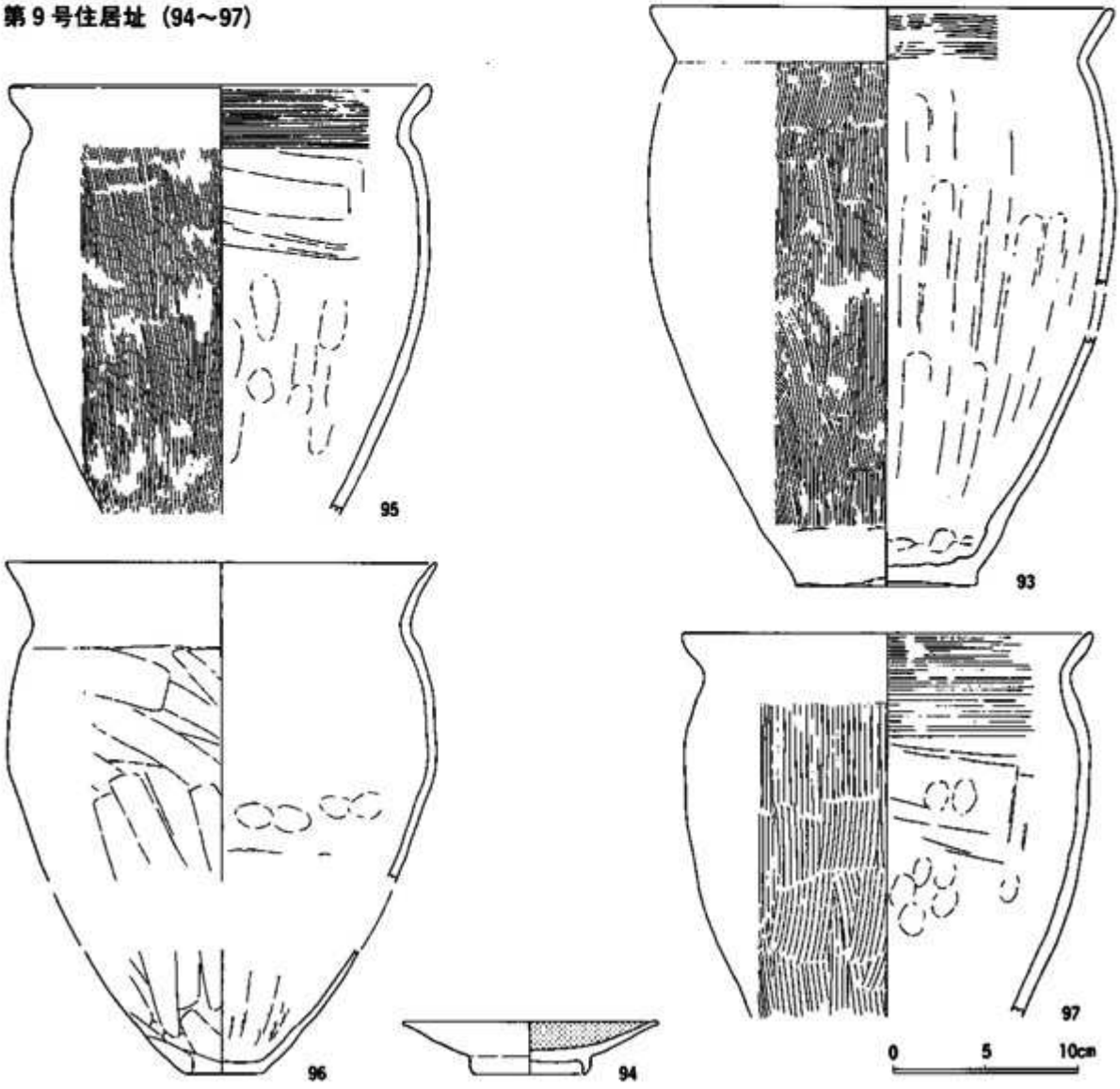

69
72
70
71
73
74
75
0 5 10cm



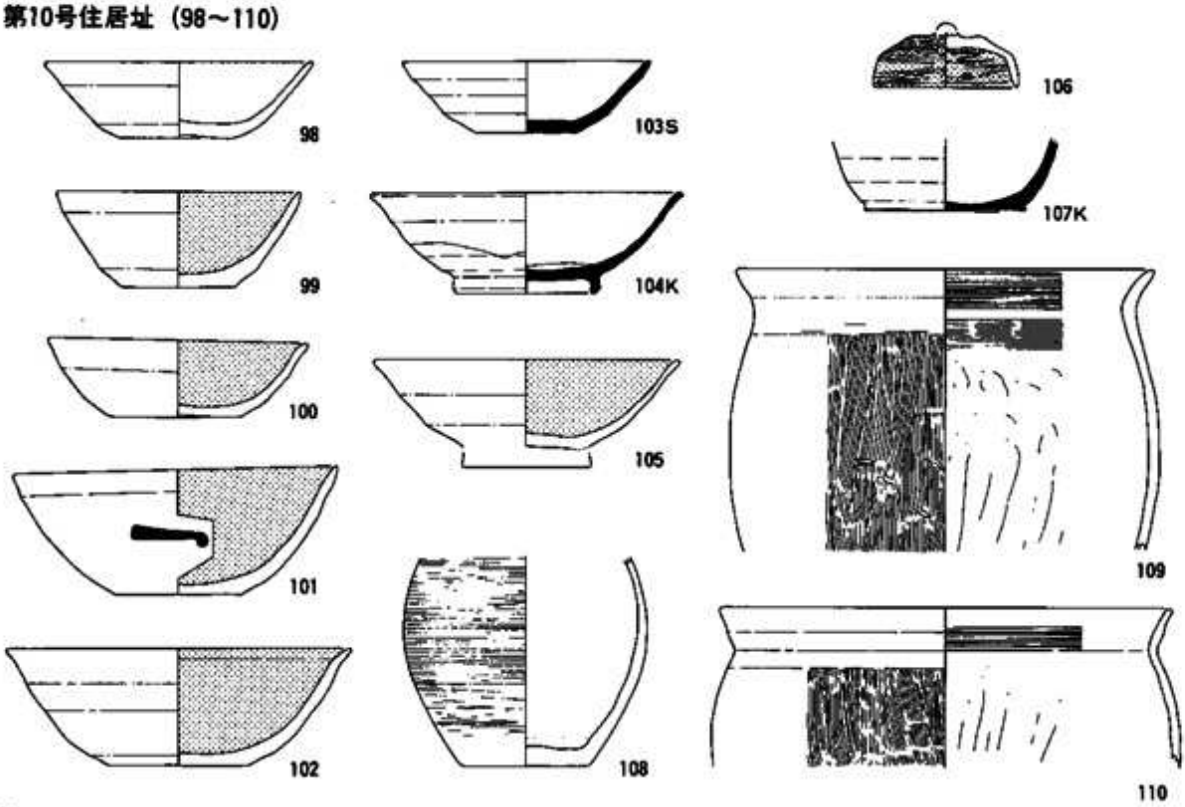
第8号住居址（77～93）



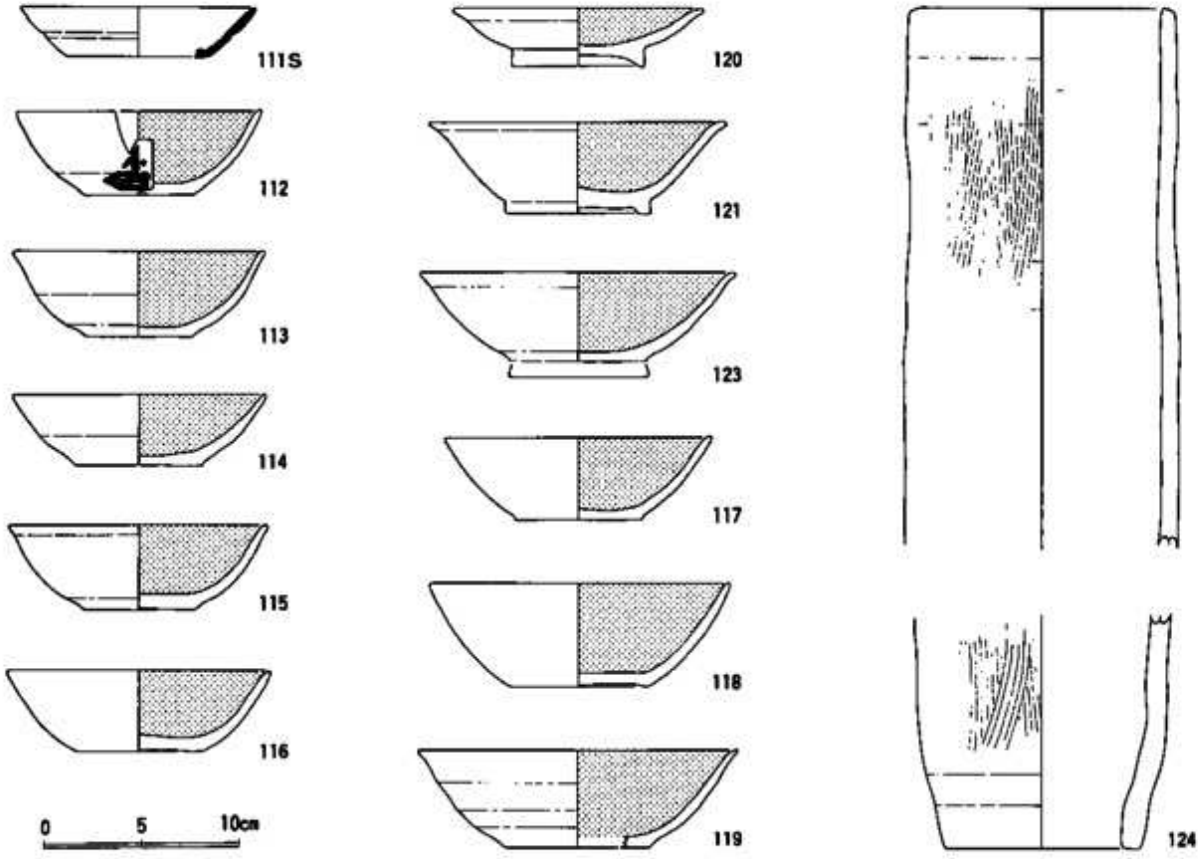
第9号住居址（94～97）

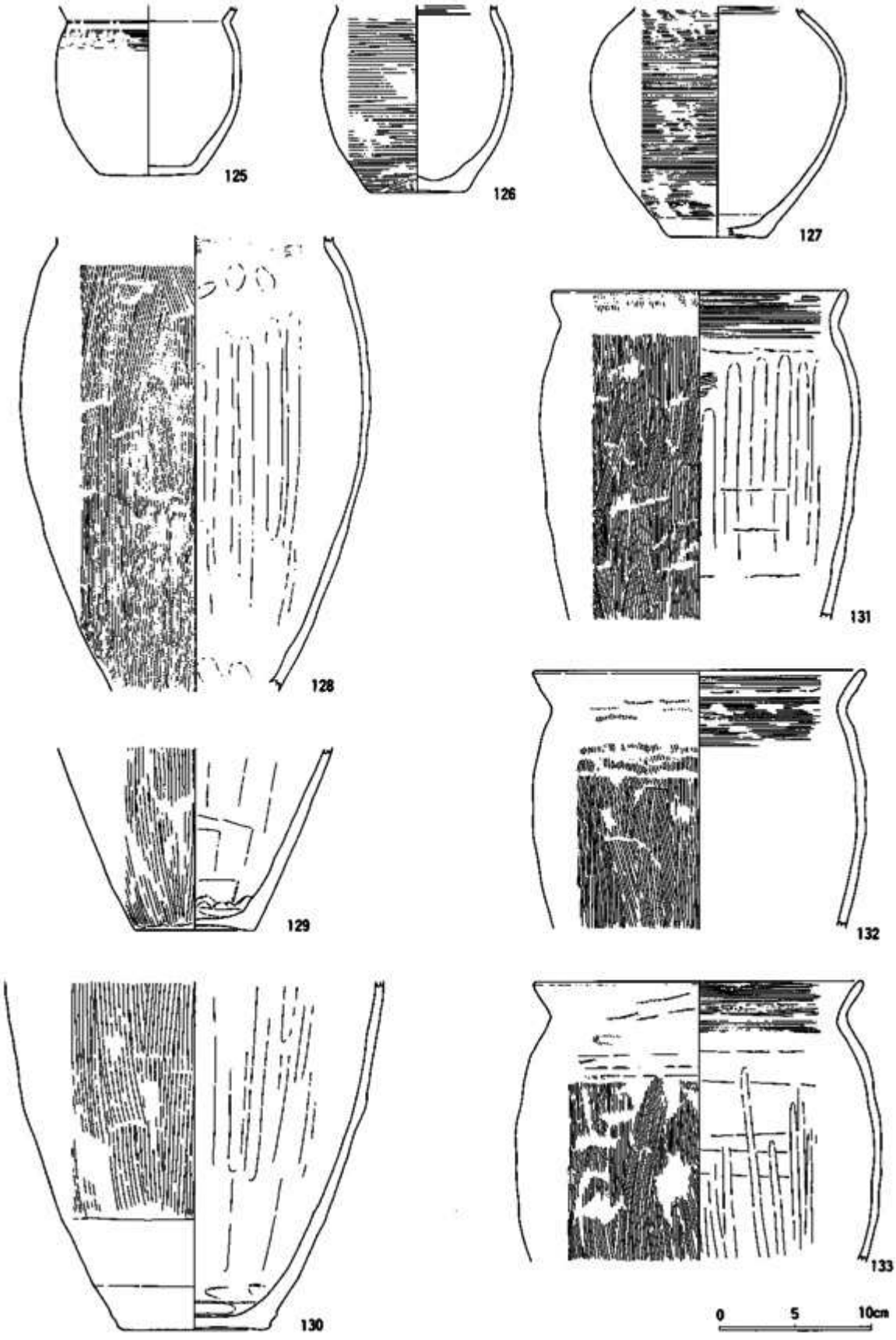


第10号住居址（98～110）



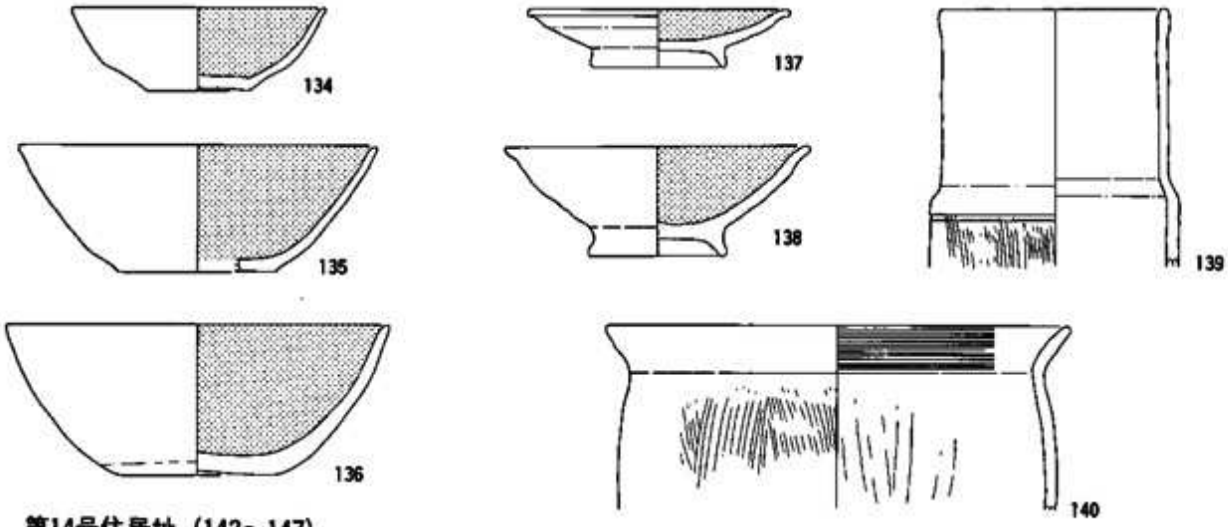
第11号住居址（111～133）



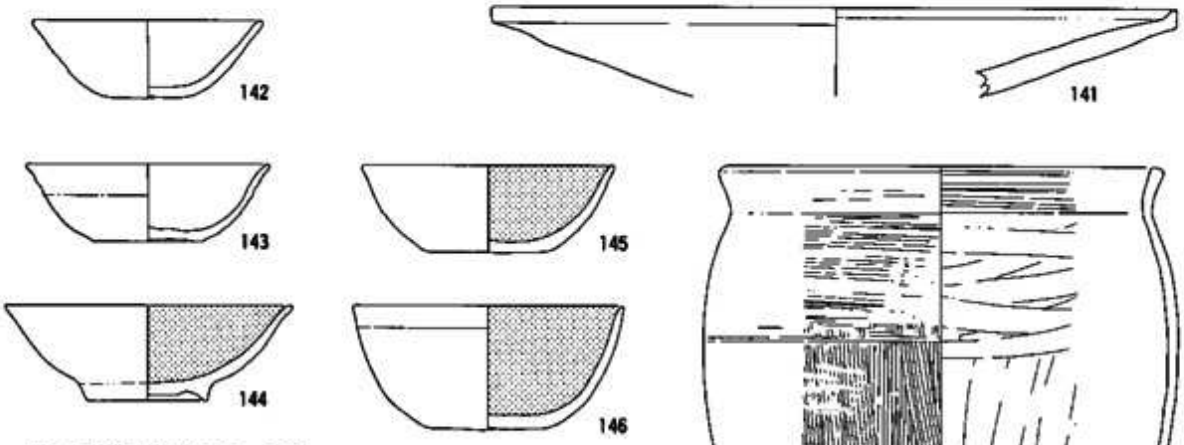

125
126
127
128
129
130
131
132
133
0 5 10cm

図版26 土器 (9)

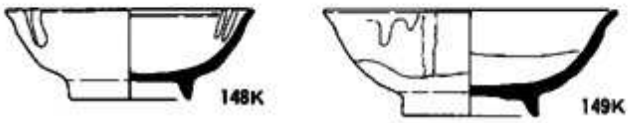
第13号住居址（134～141）



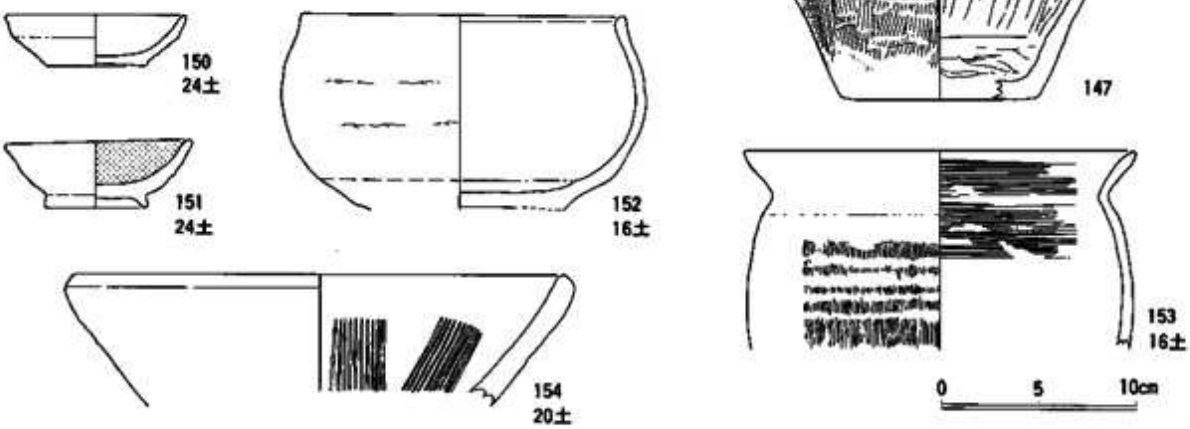
第14号住居址（142～147）



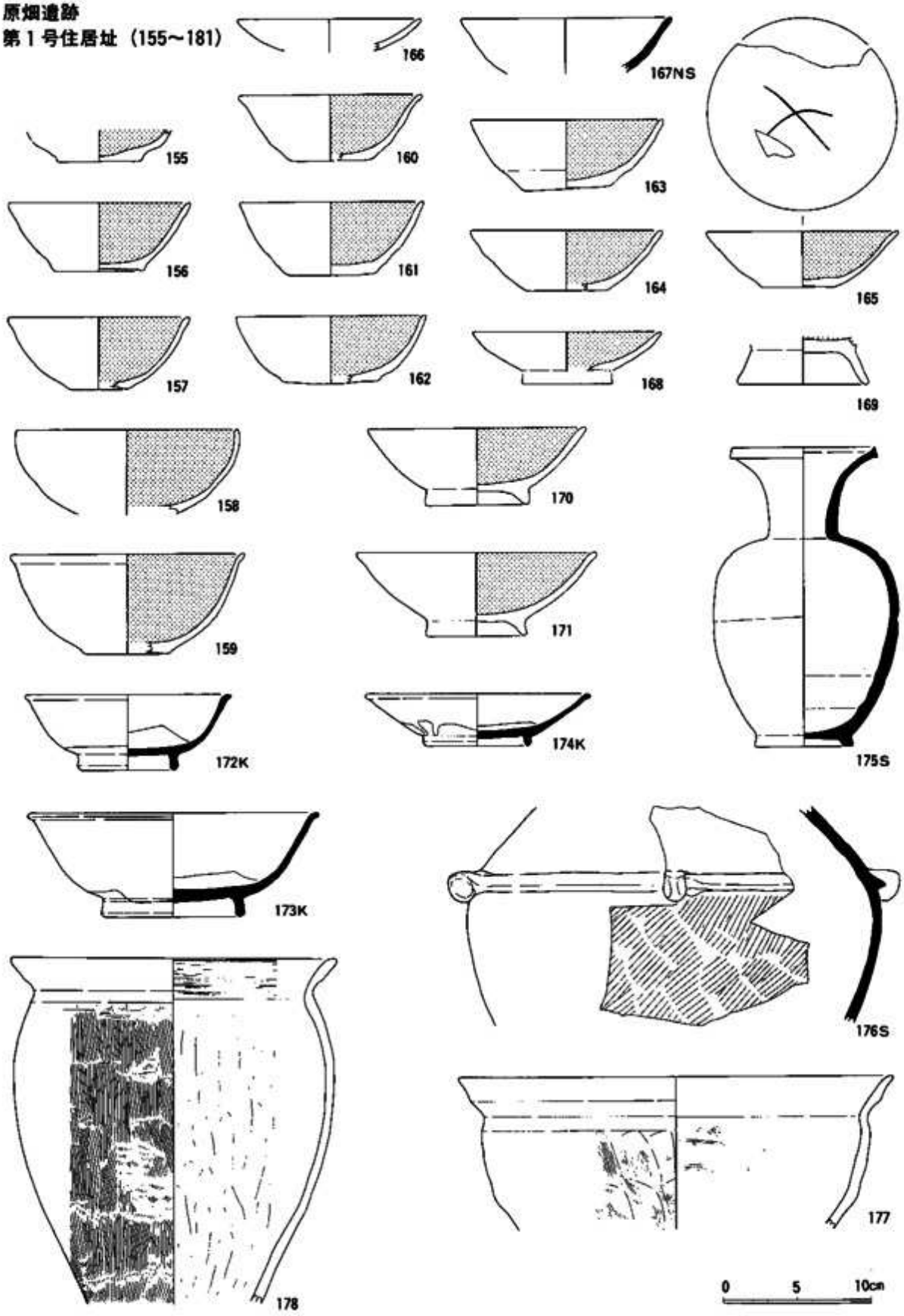
第15号住居址（148・149）

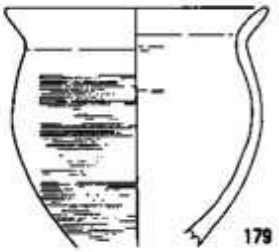


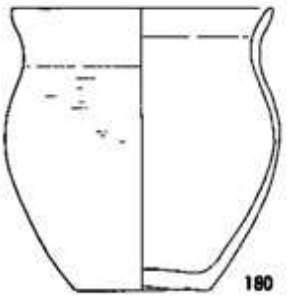
土坑（150～154）

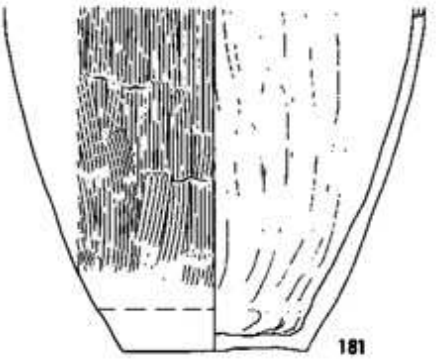


原畑遺跡
第1号住居址（155～181）

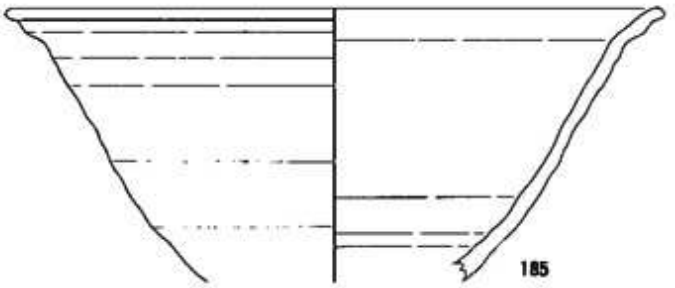


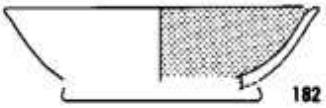


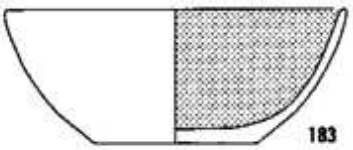


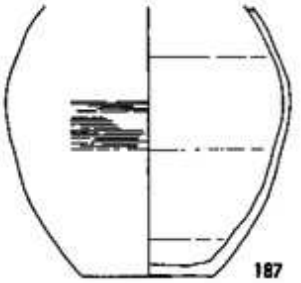


第2号住居址（182～187）

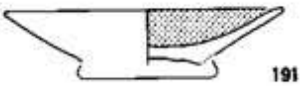


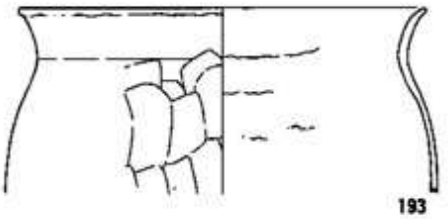


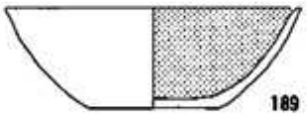


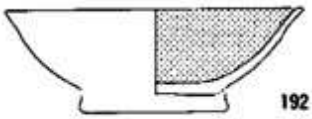


第3号住居址（188～193）

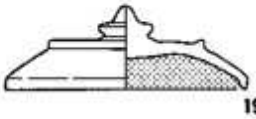


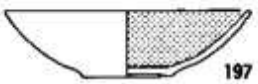


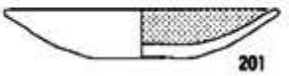


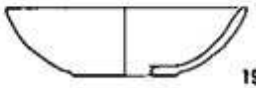


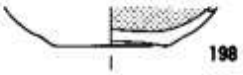
第4号住居址（194～229）

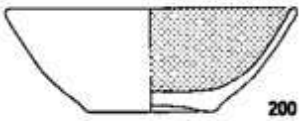


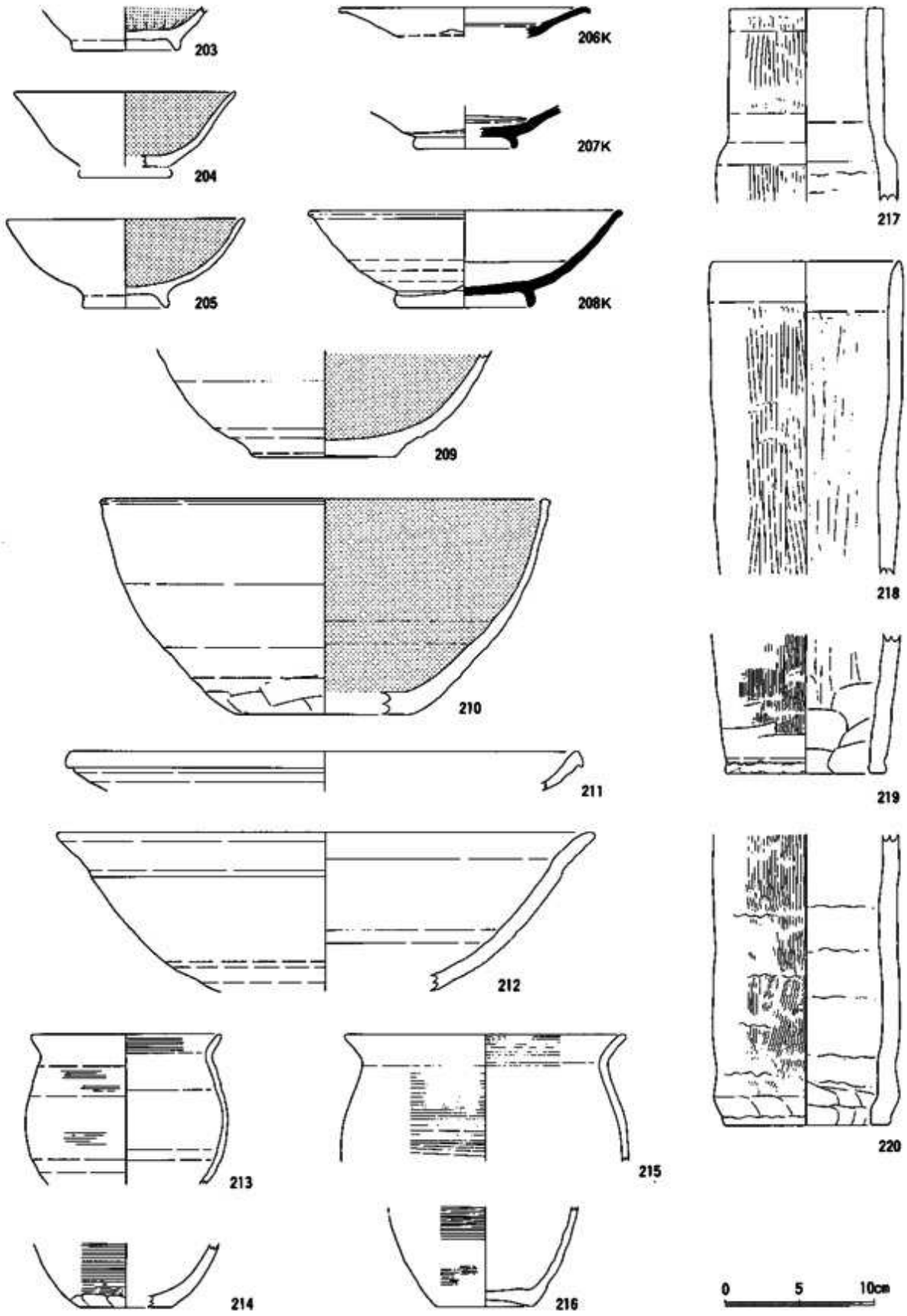


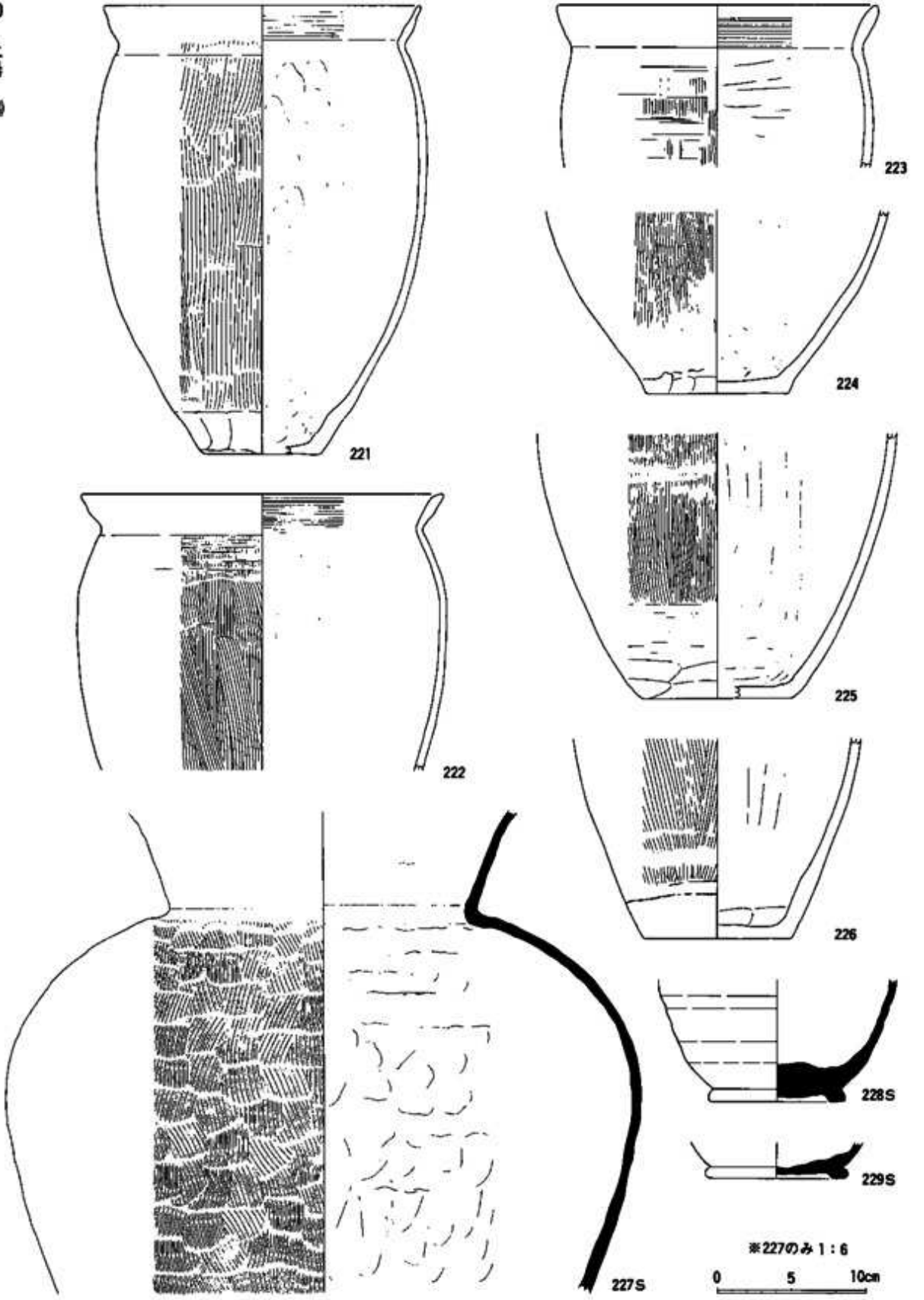




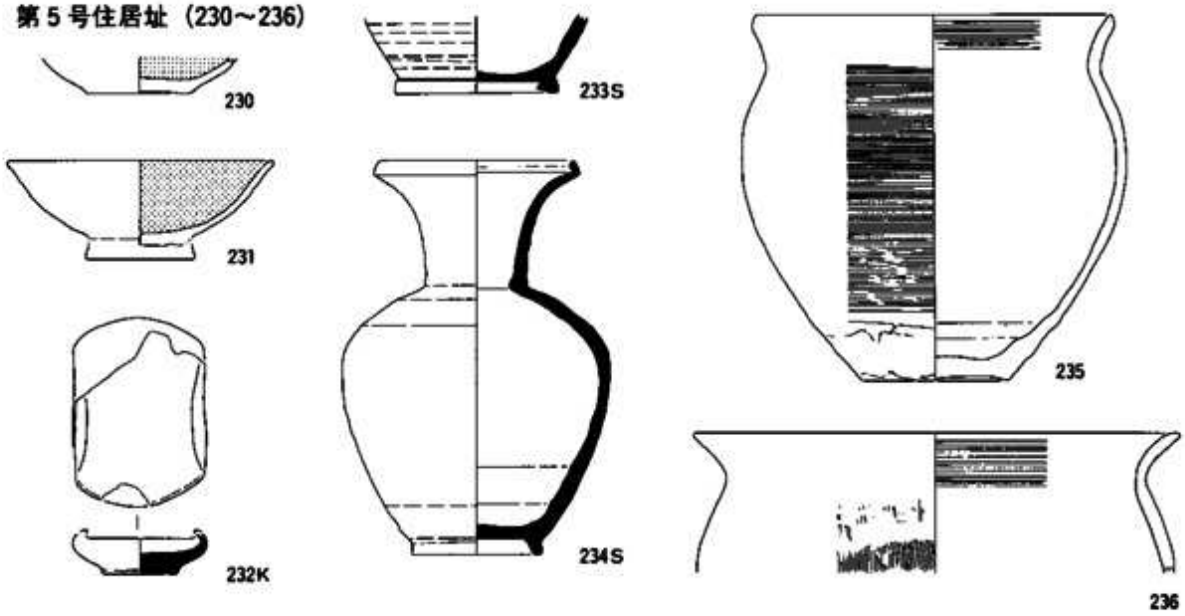




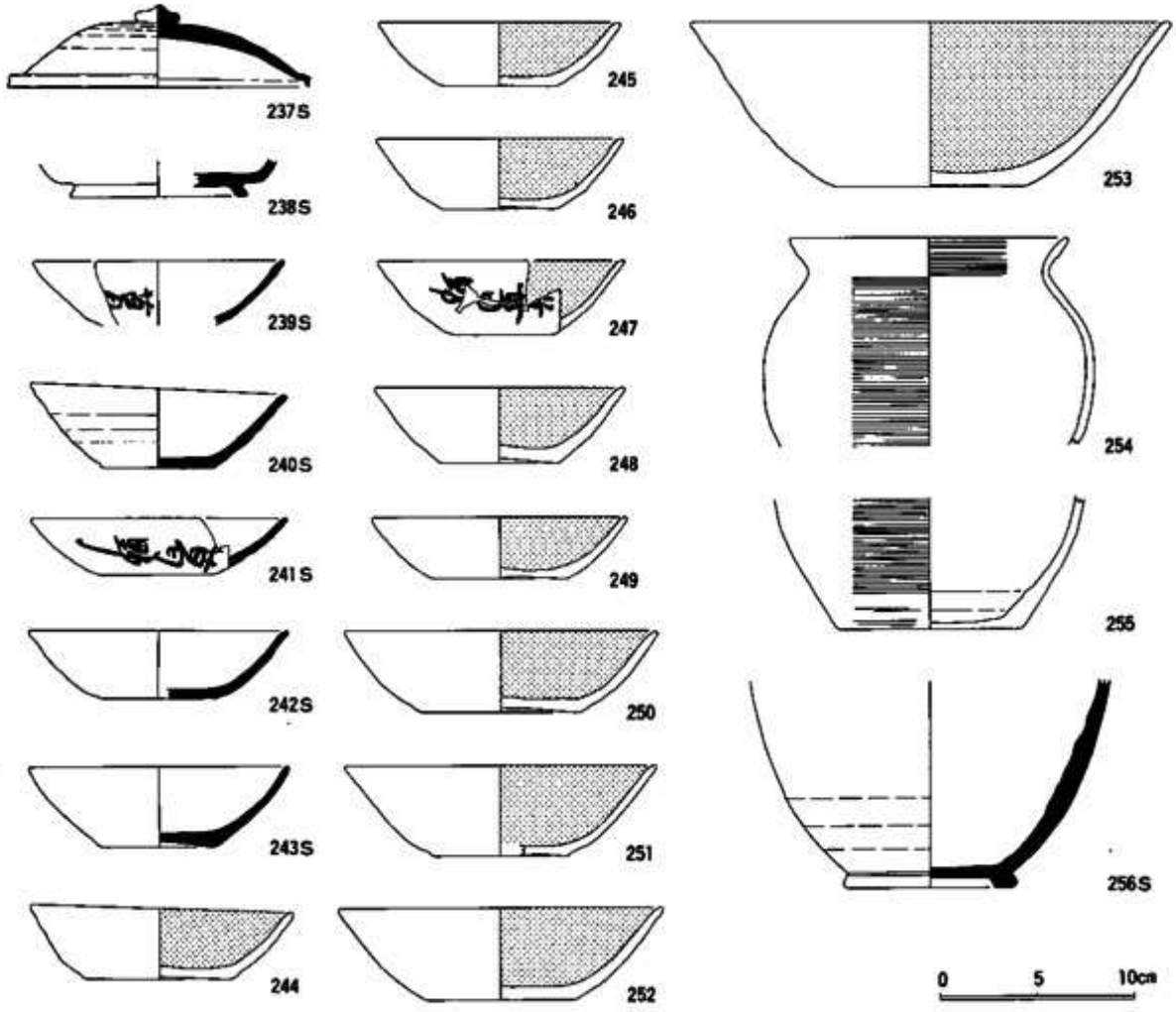

203
204
205
206K
207K
208K
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
0 5 10cm

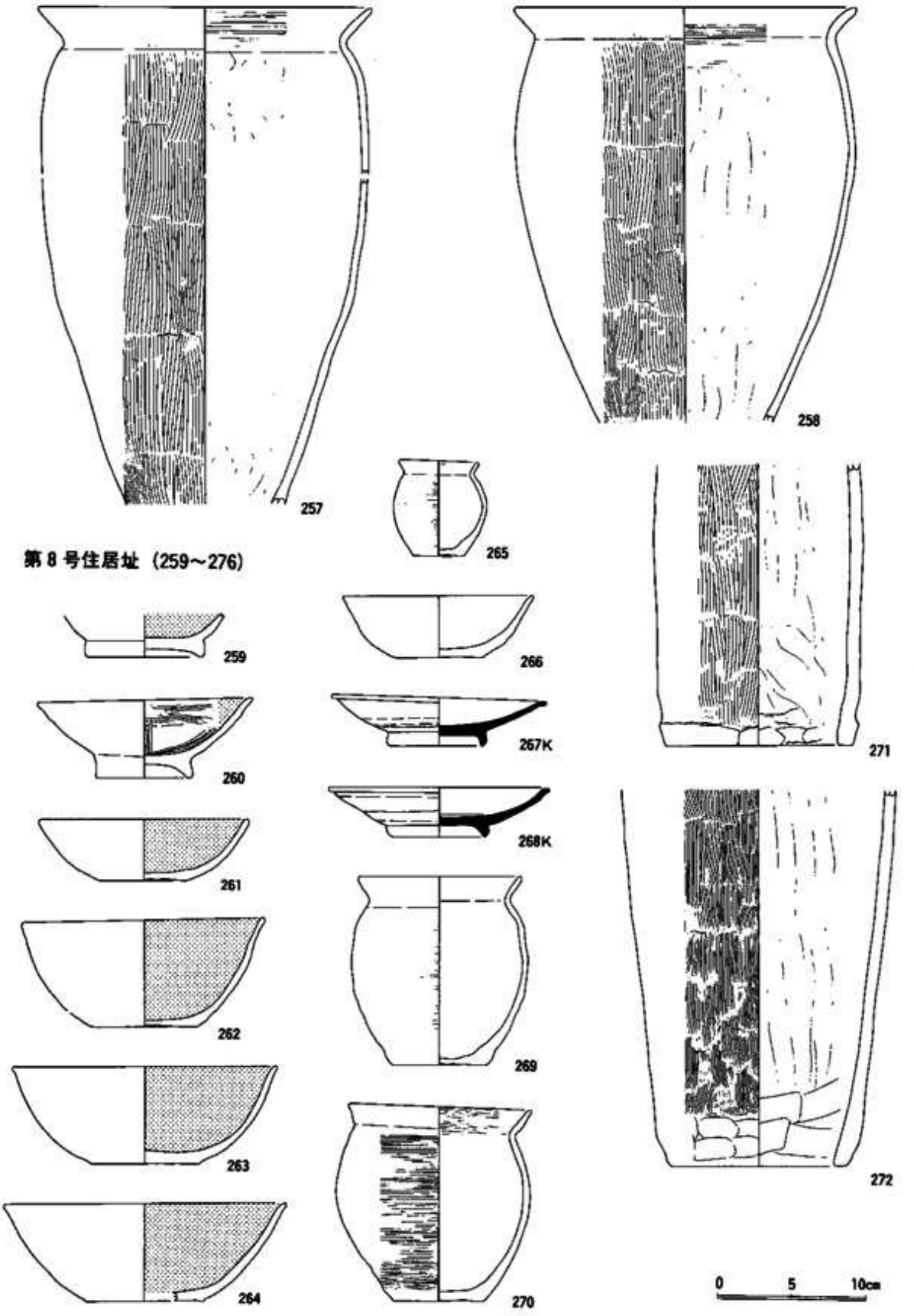

221
222
223
224
225
226
227S
228S
229S
※227のみ 1：6
0 5 10cm

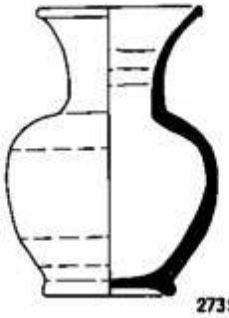
第5号住居址（230～236）

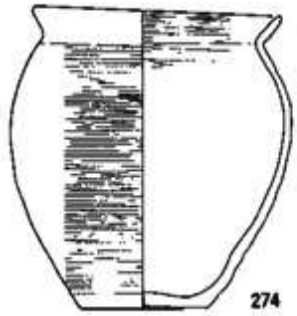


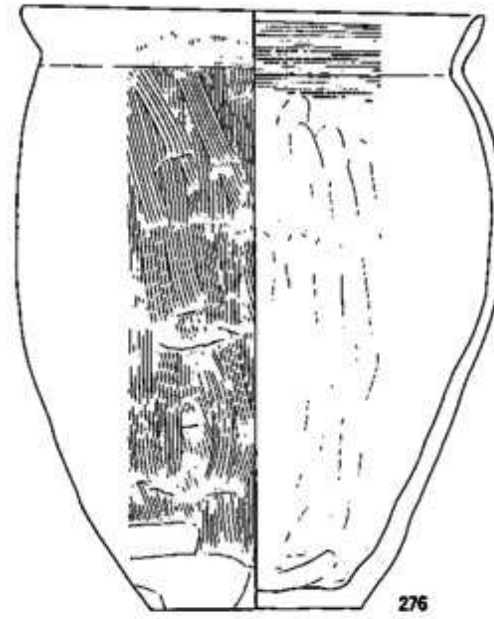
第7号住居址（237～258）



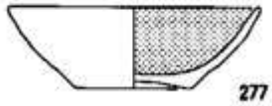

257
258
265
第8号住居址（259～276）
259
266
260
267K
271
268K
261
262
269
263
272
264
270
0 5 10cm

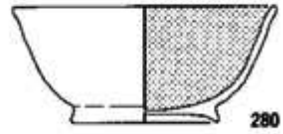


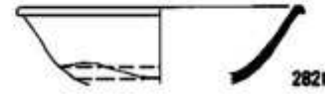


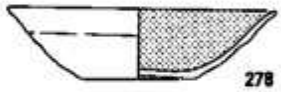


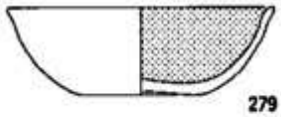
第９号住居址（277～283）

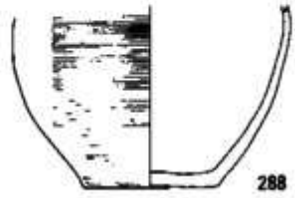




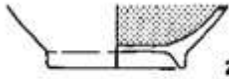


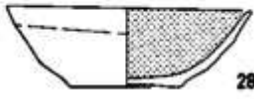


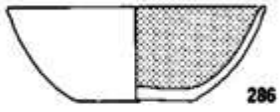


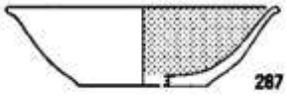


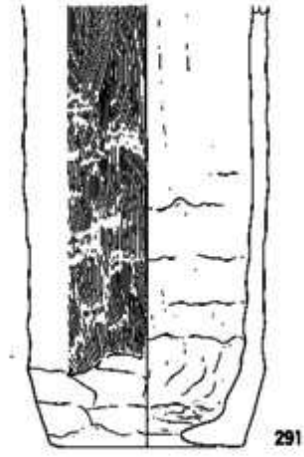
第10号住居址（284～298）

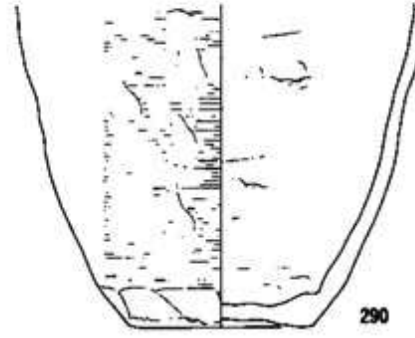




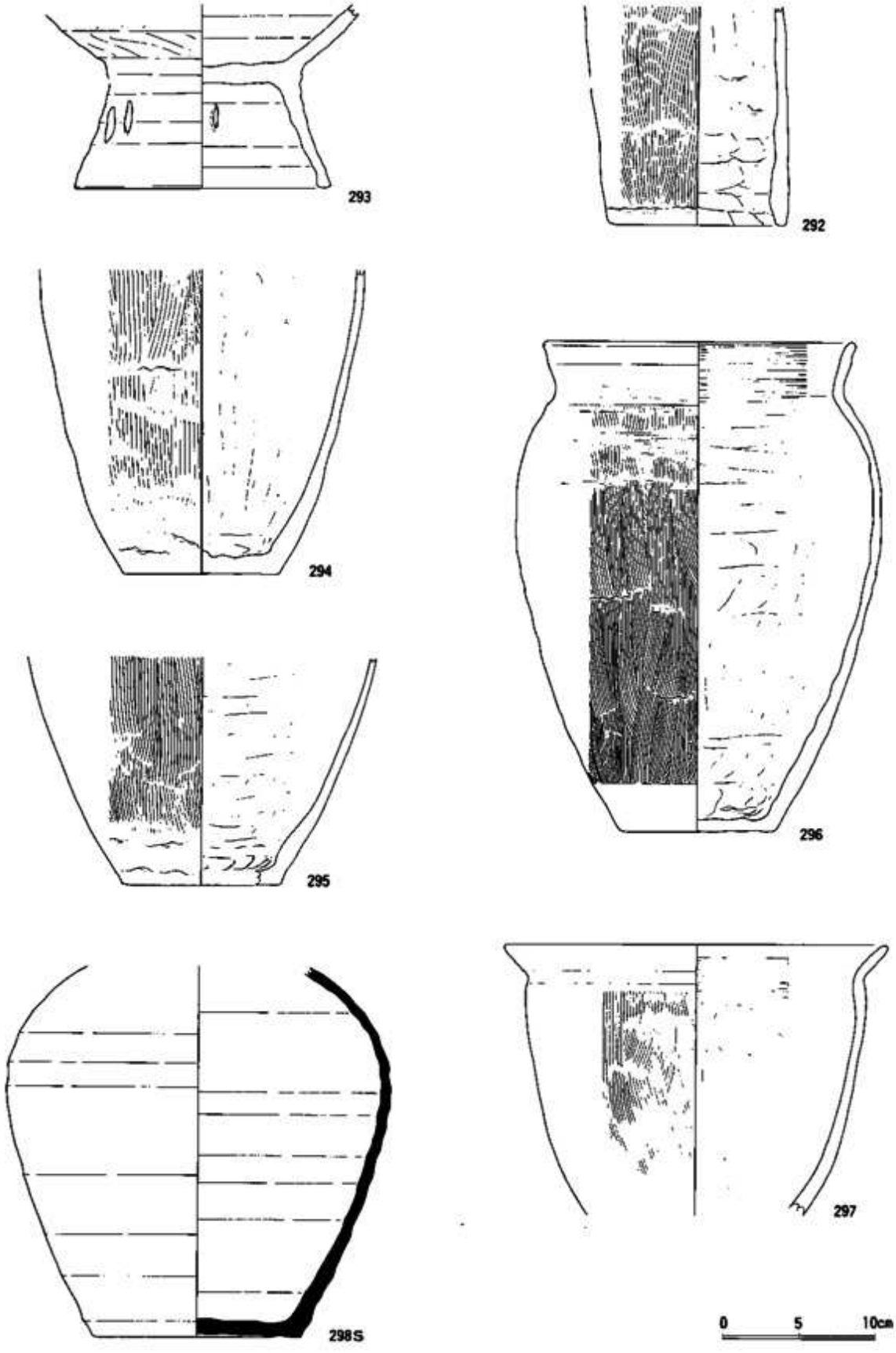




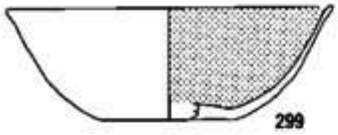


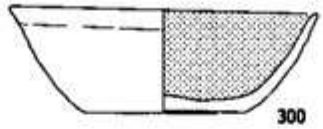


0 5 10cm


293
292
294
296
295
297
298S
0 5 10cm

第11号住居址（299～302）


299


300

302 S

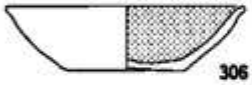
301

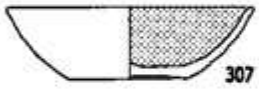
第12号住居址（303～345）

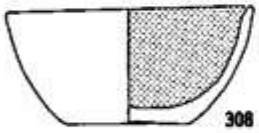
303S

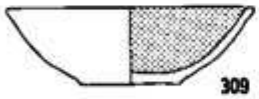
304S

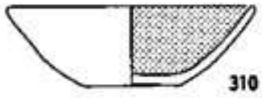
305

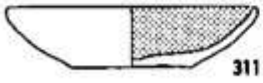

306

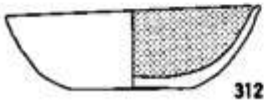

307

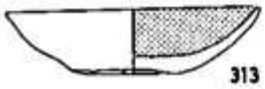

308


309

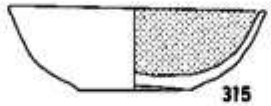

310


311

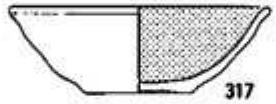

312

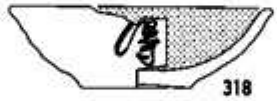

313

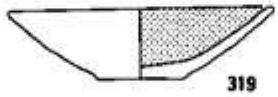
314K

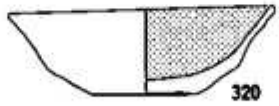

315

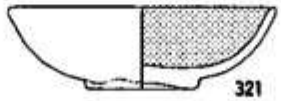
316

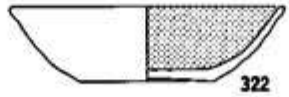

317

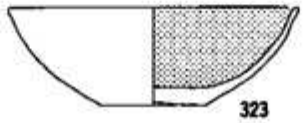

318

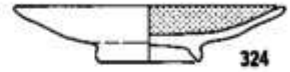

319

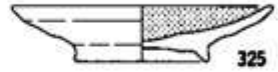

320

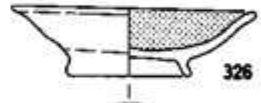

321

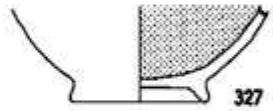

322

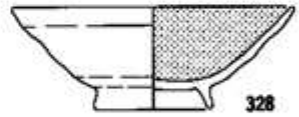

323

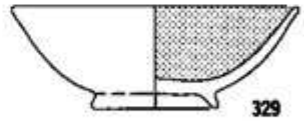

324

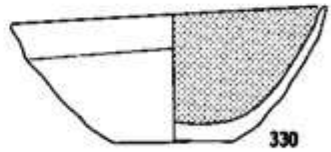

325


326

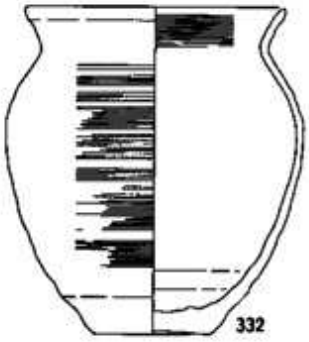

327

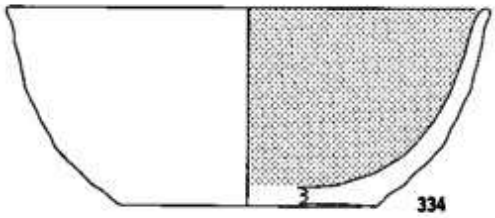

328

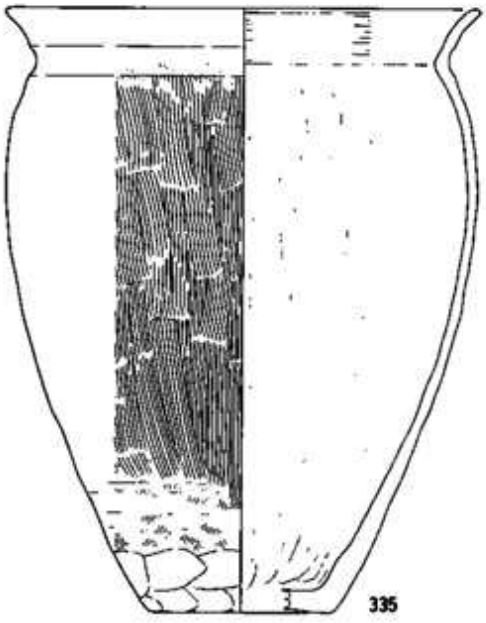

329

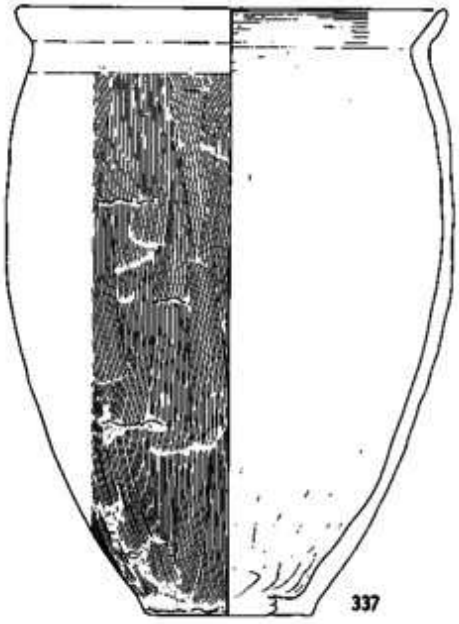

330

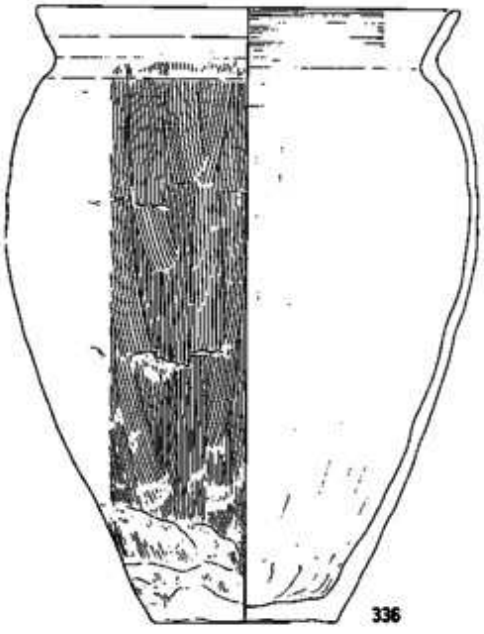
331

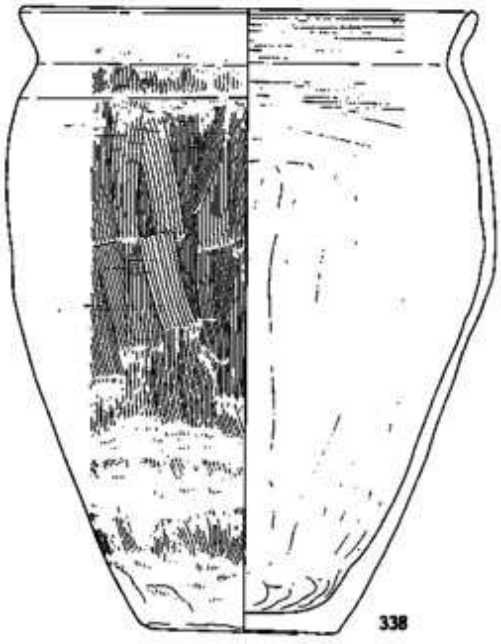




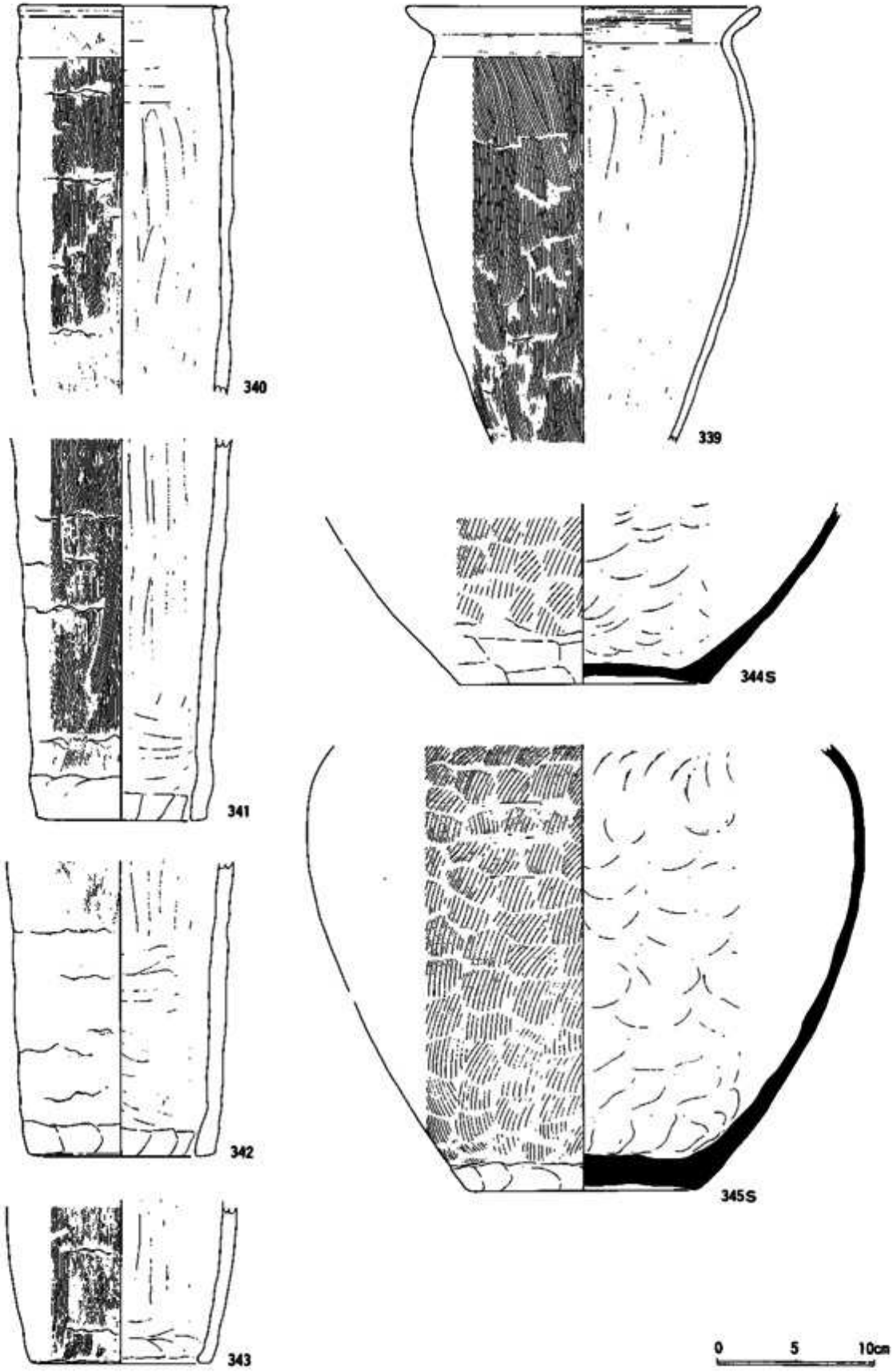




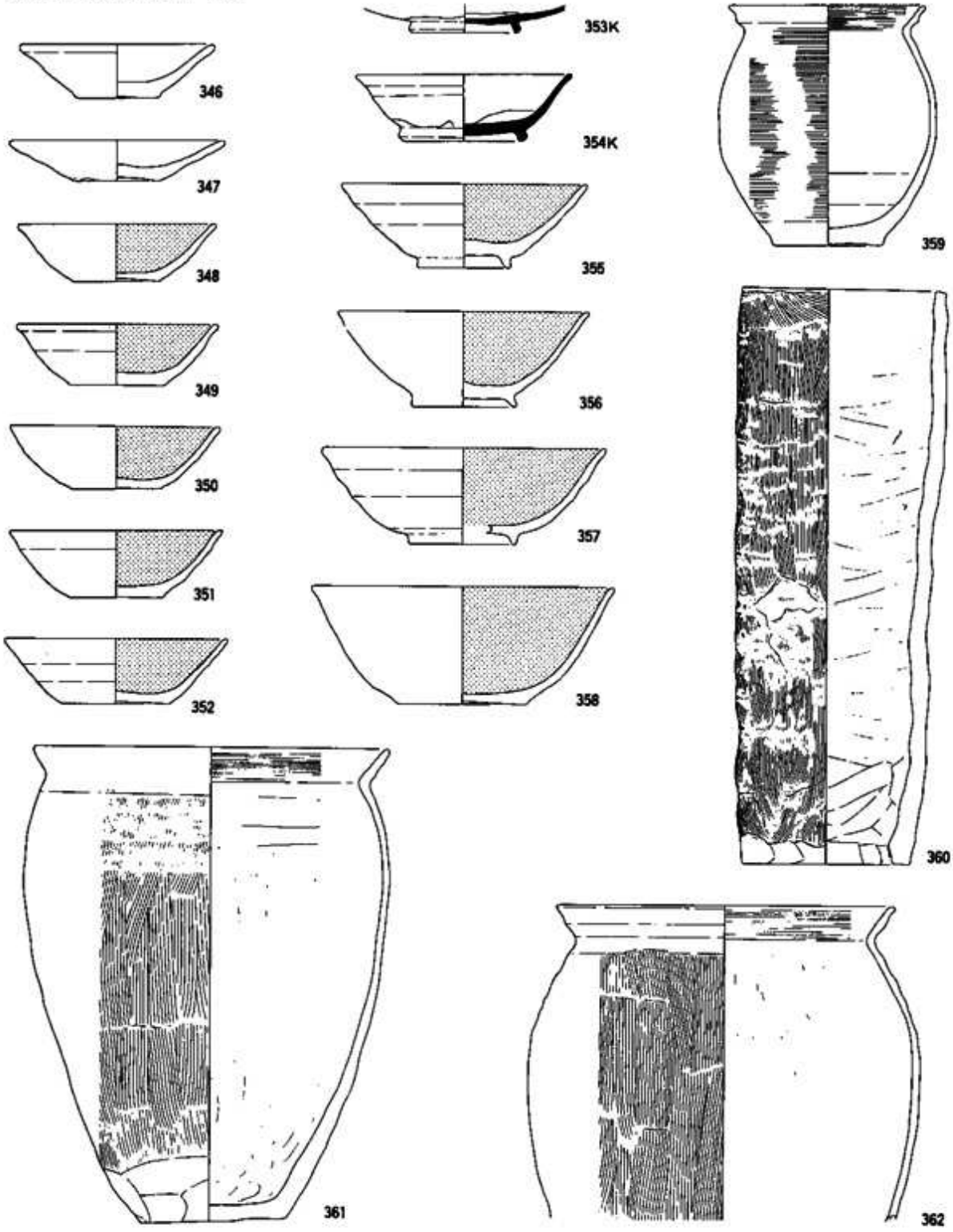




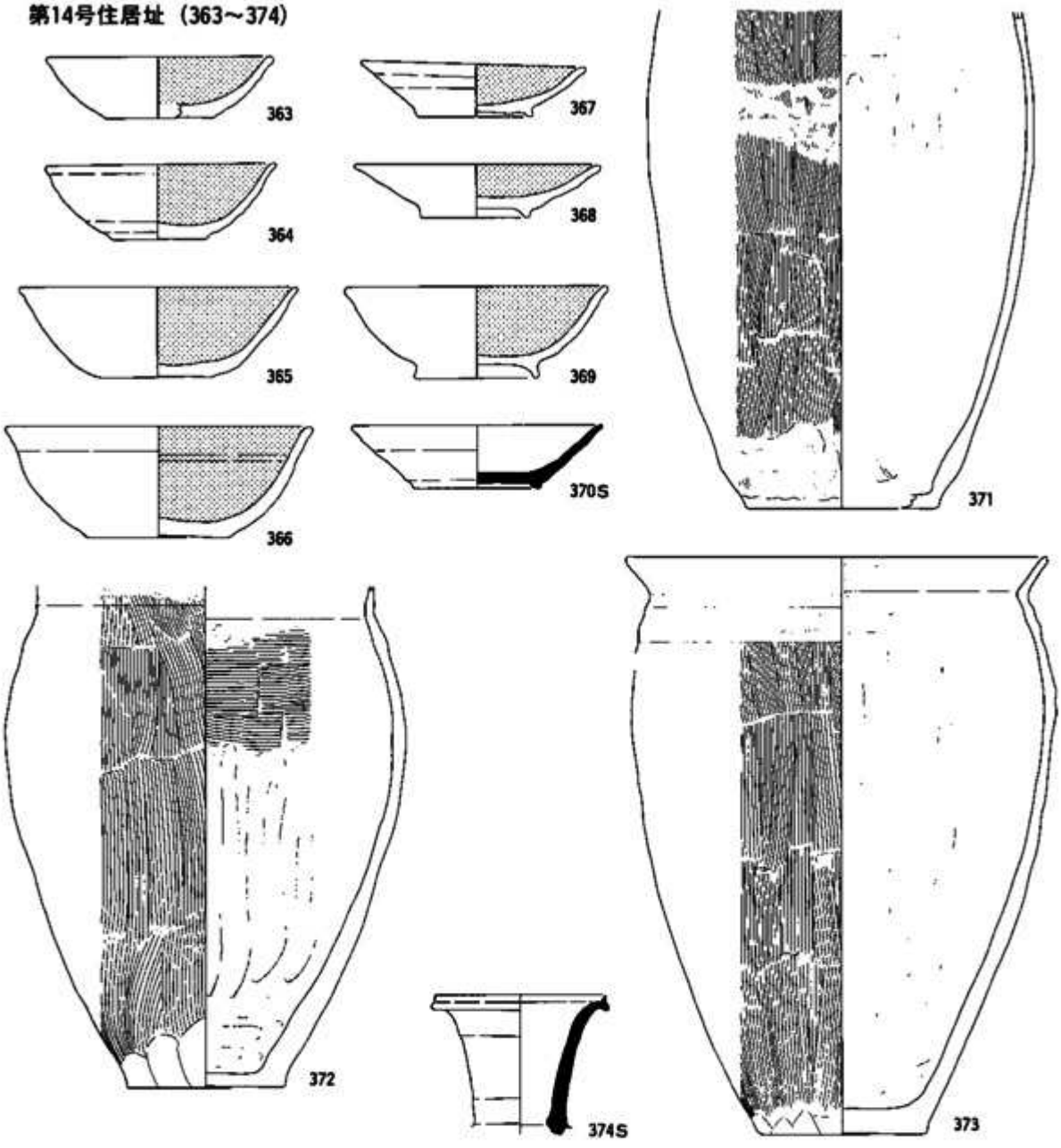
0 5 10cm


340
339
341
344S
342
345S
343
0 5 10cm

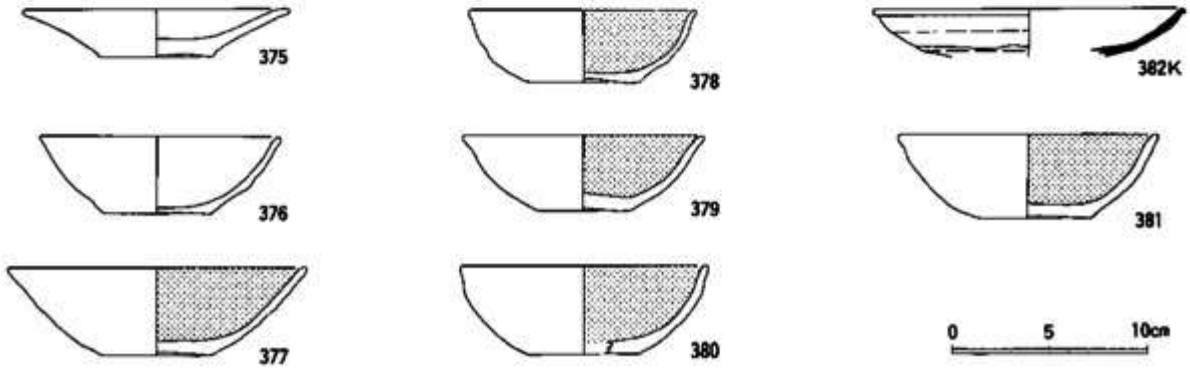
第13号住居址（346～362）

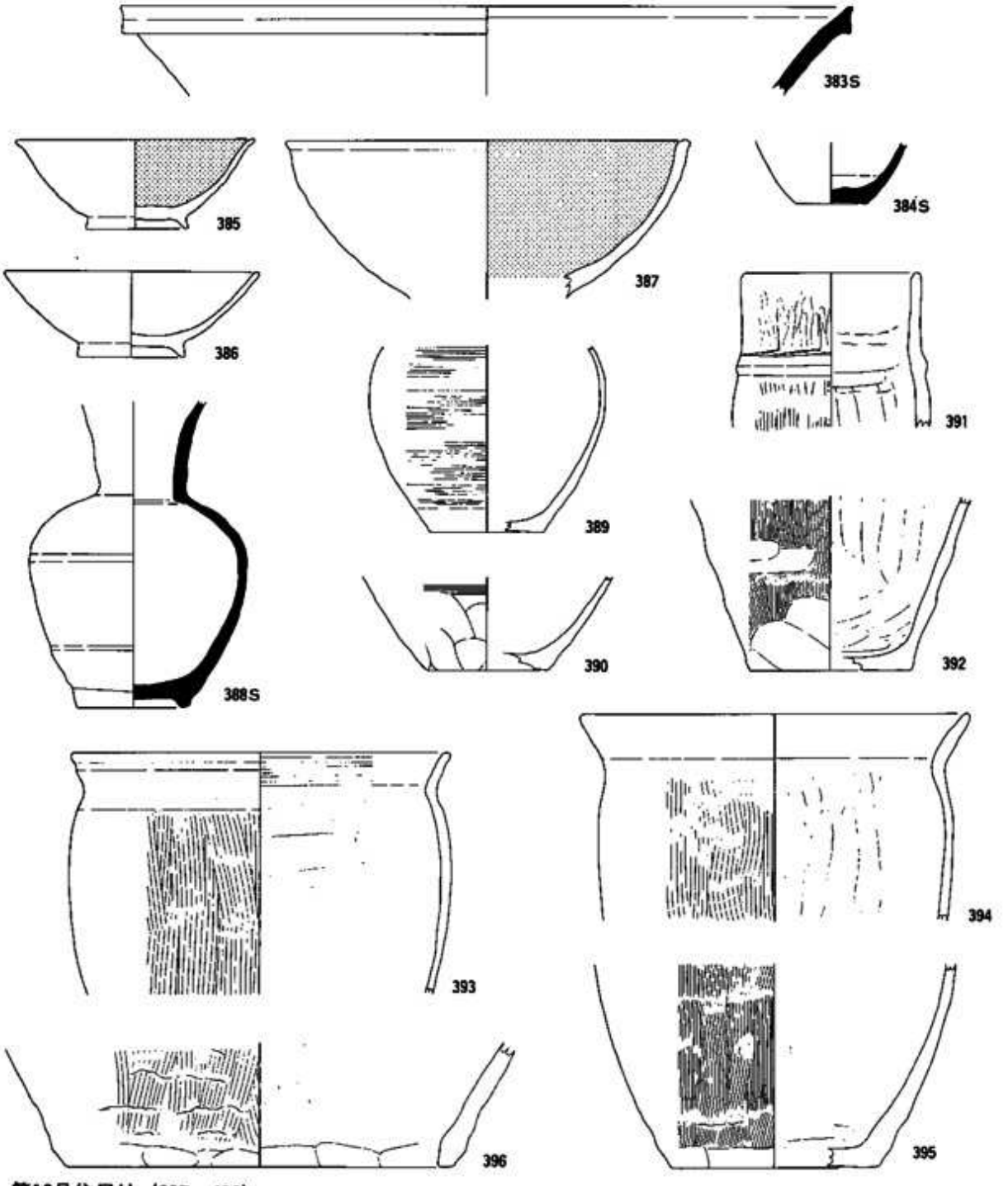


第14号住居址（363～374）

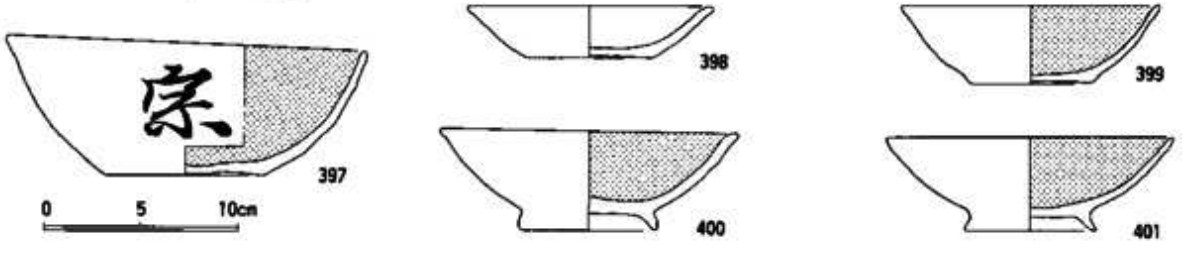


第15号住居址（375～396）

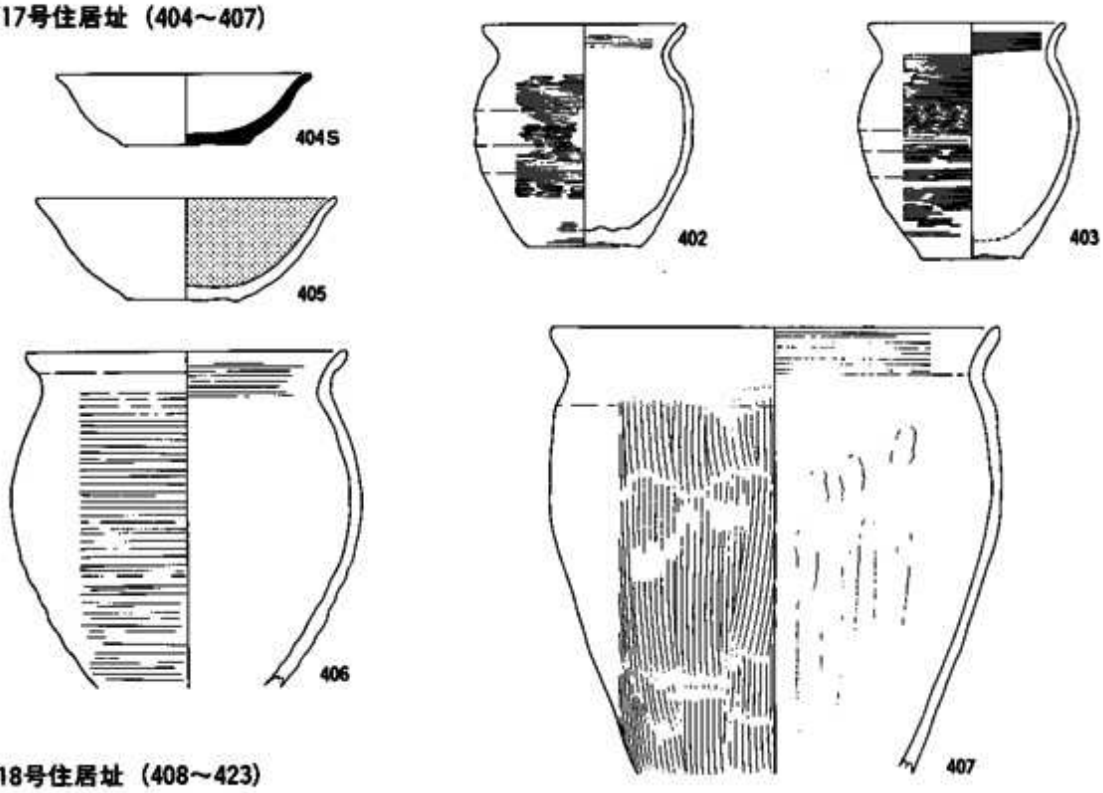




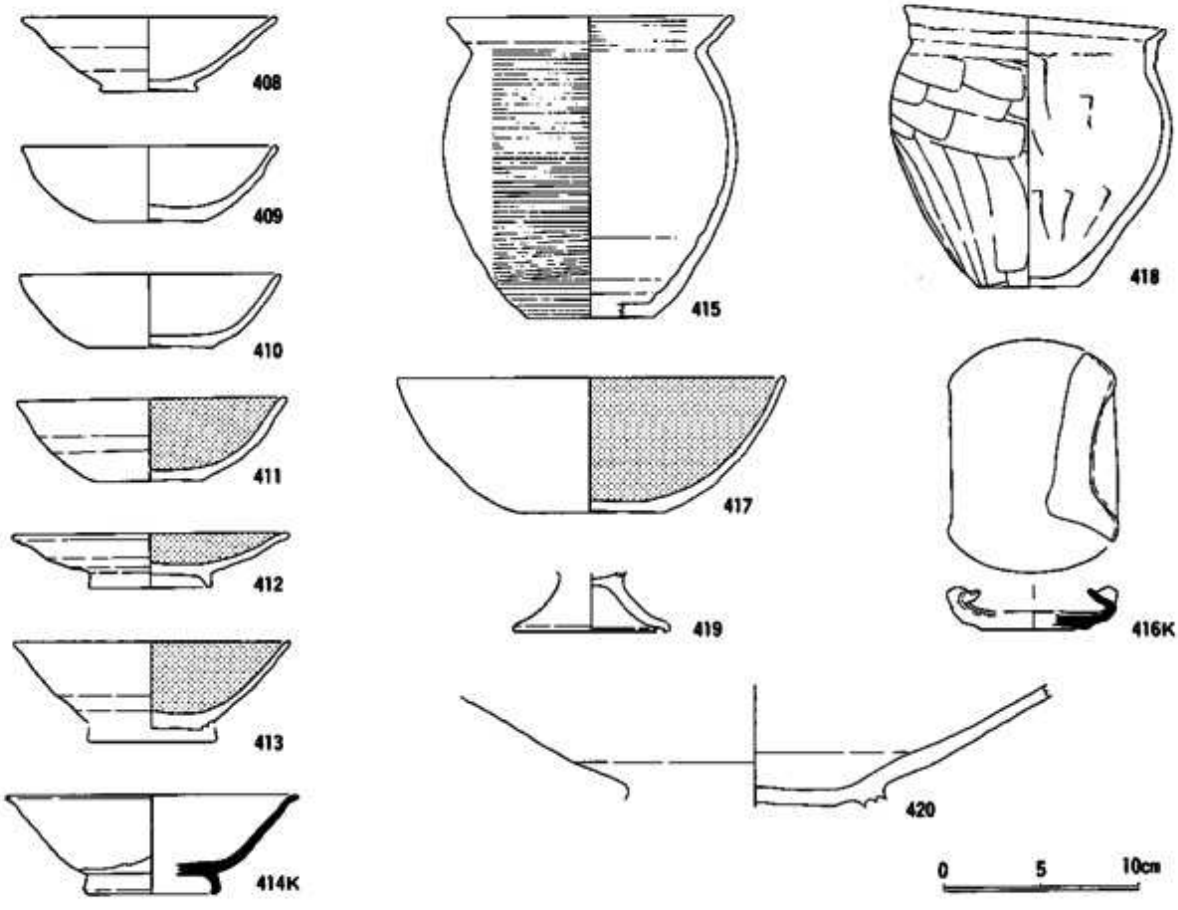
第16号住居址（397～403）

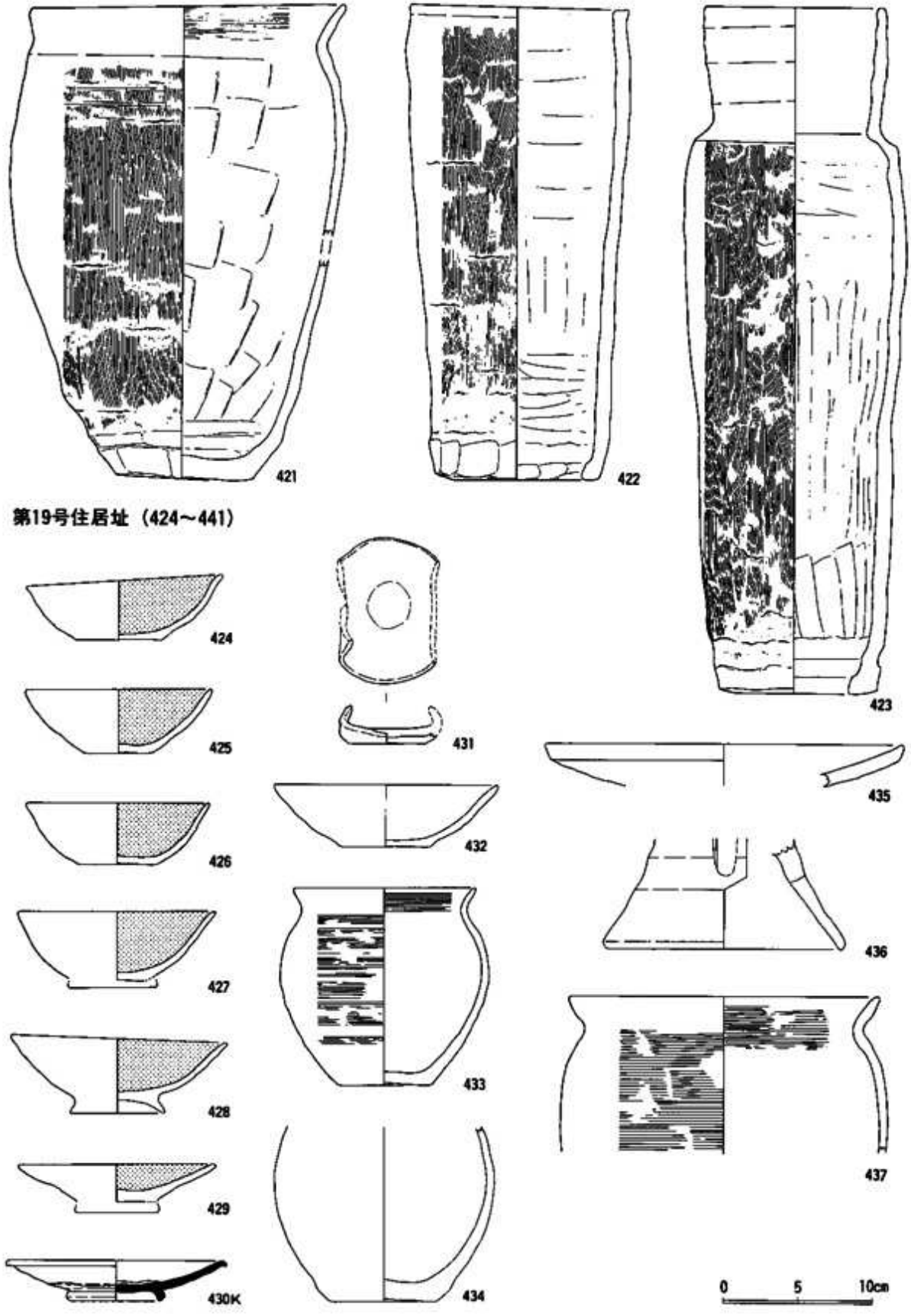


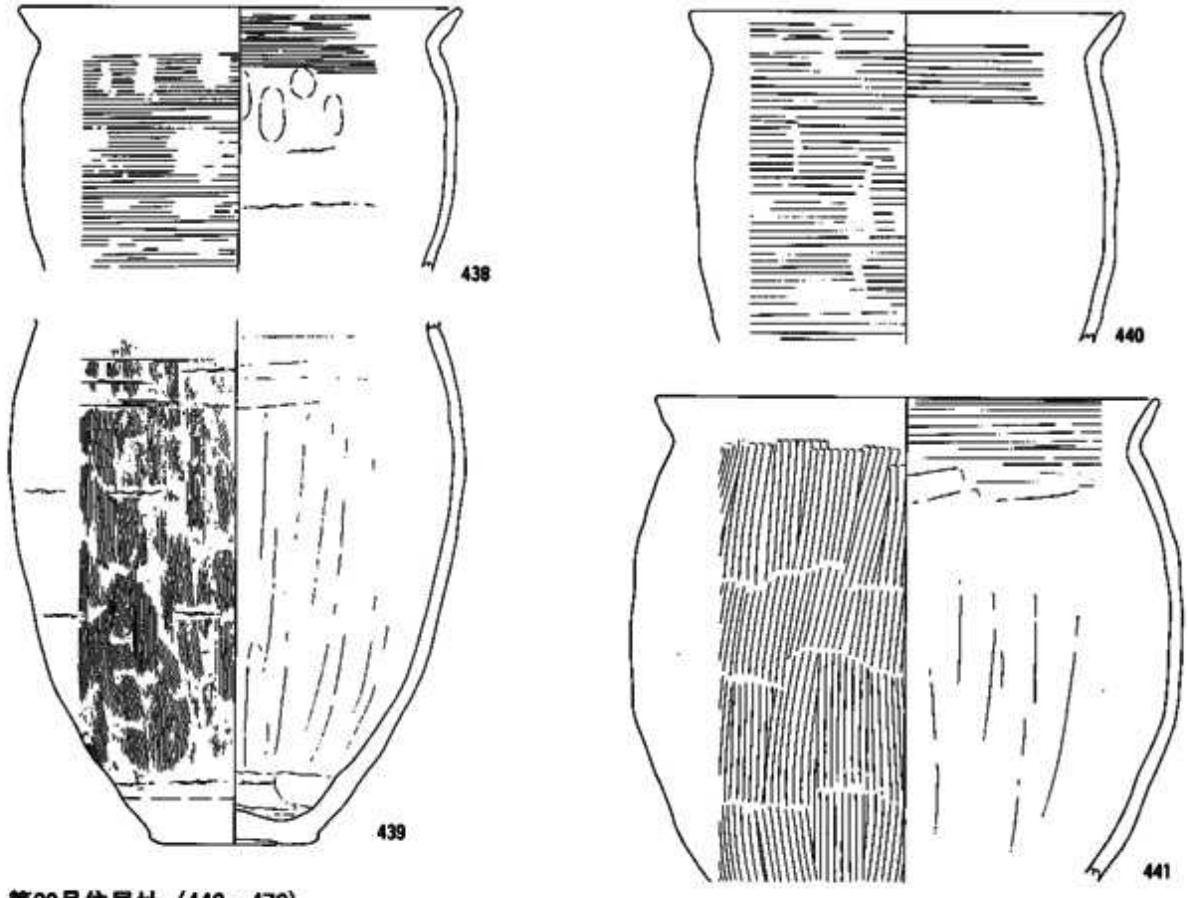
第17号住居址（404～407）



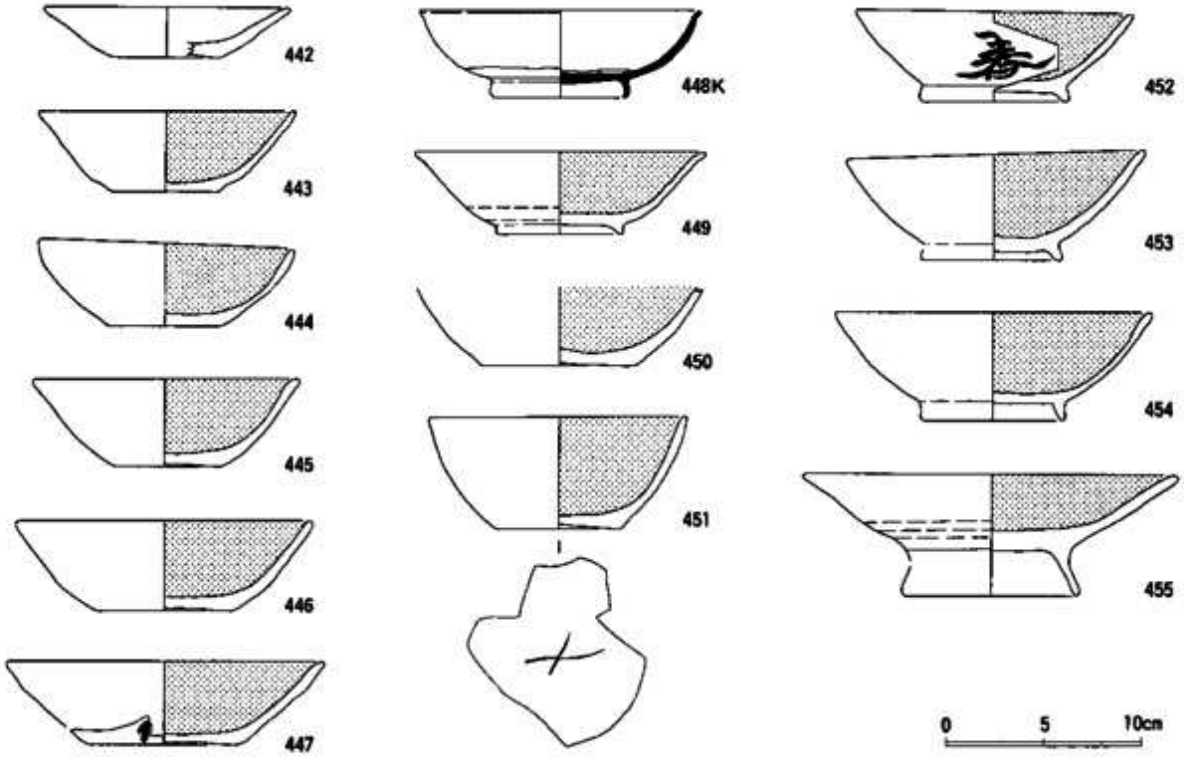
第18号住居址（408～423）

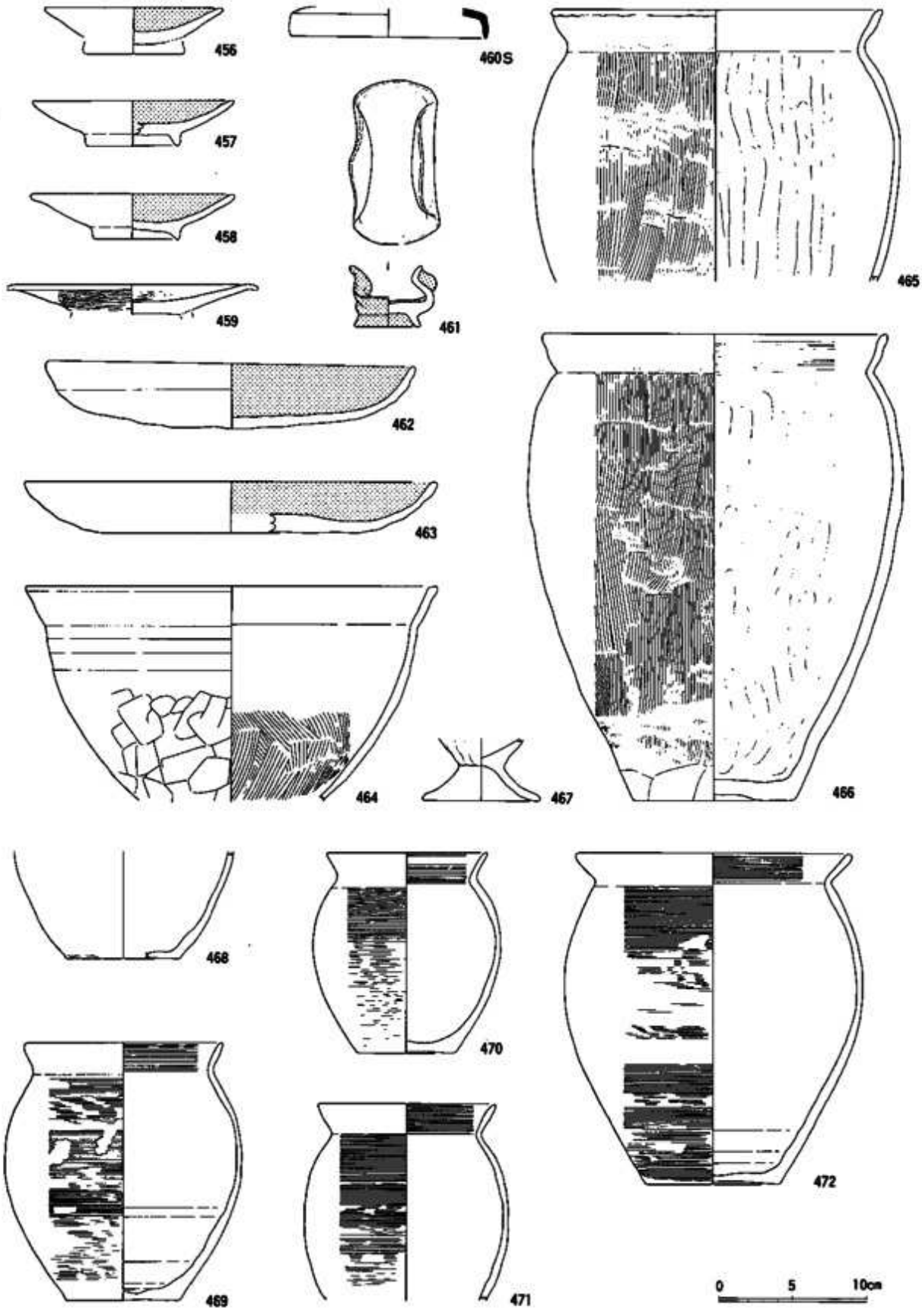



421
422
423
第19号住居址（424～441）
424
425
426
427
428
429
430K
431
432
433
434
435
436
437
0 5 10cm

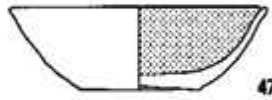


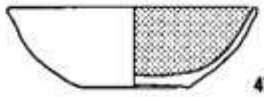
第20号住居址（442～472）

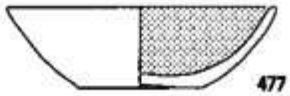



456
457
458
459
460S
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
0 5 10cm

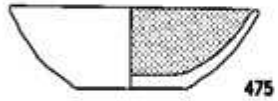
第21号住居址（473～474）

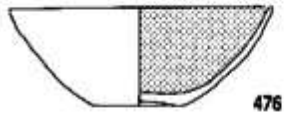


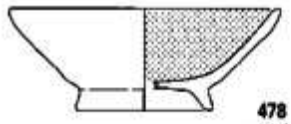




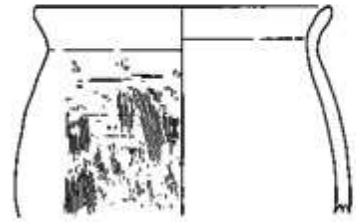
第22号住居址（475～476）

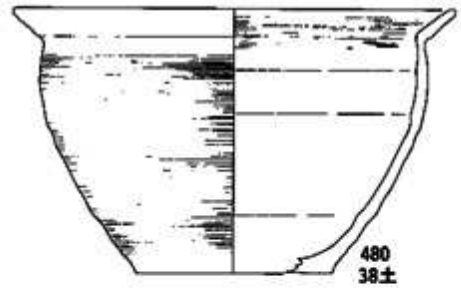




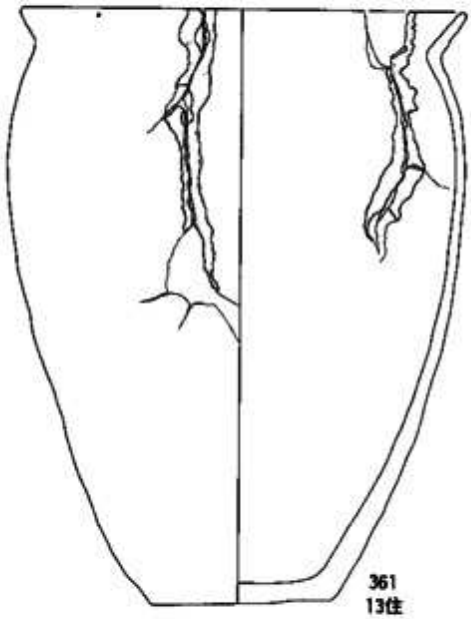


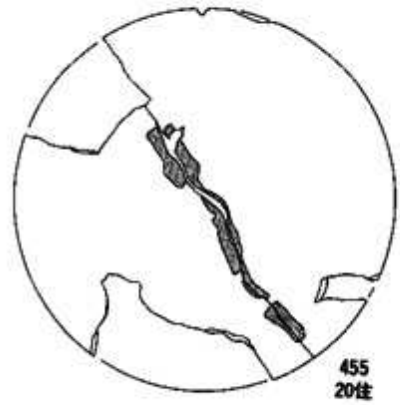
土坑（477～480）

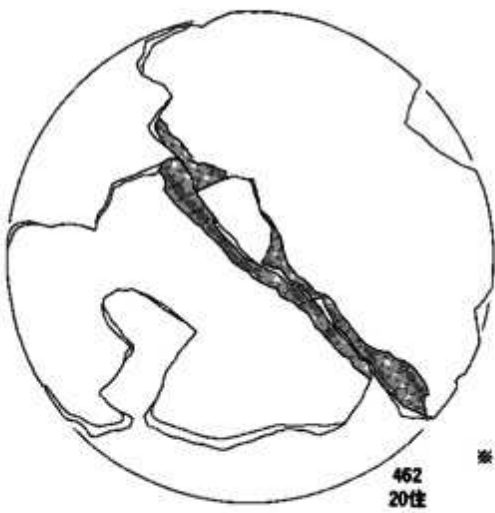


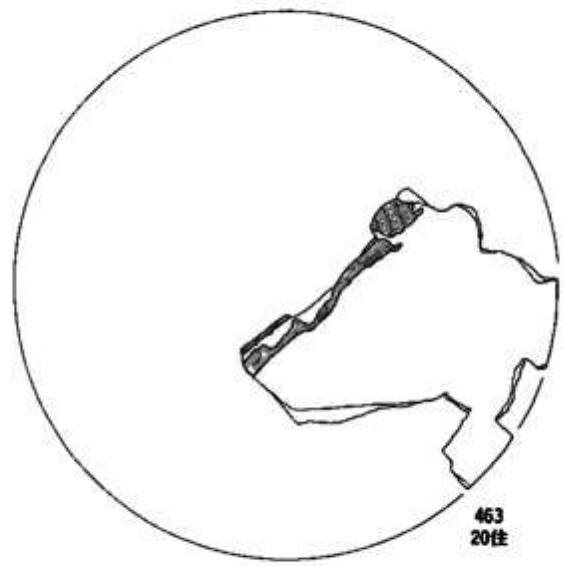


土師器に見られる補修痕









※アミ目は粘土補修部分

0 5 10cm

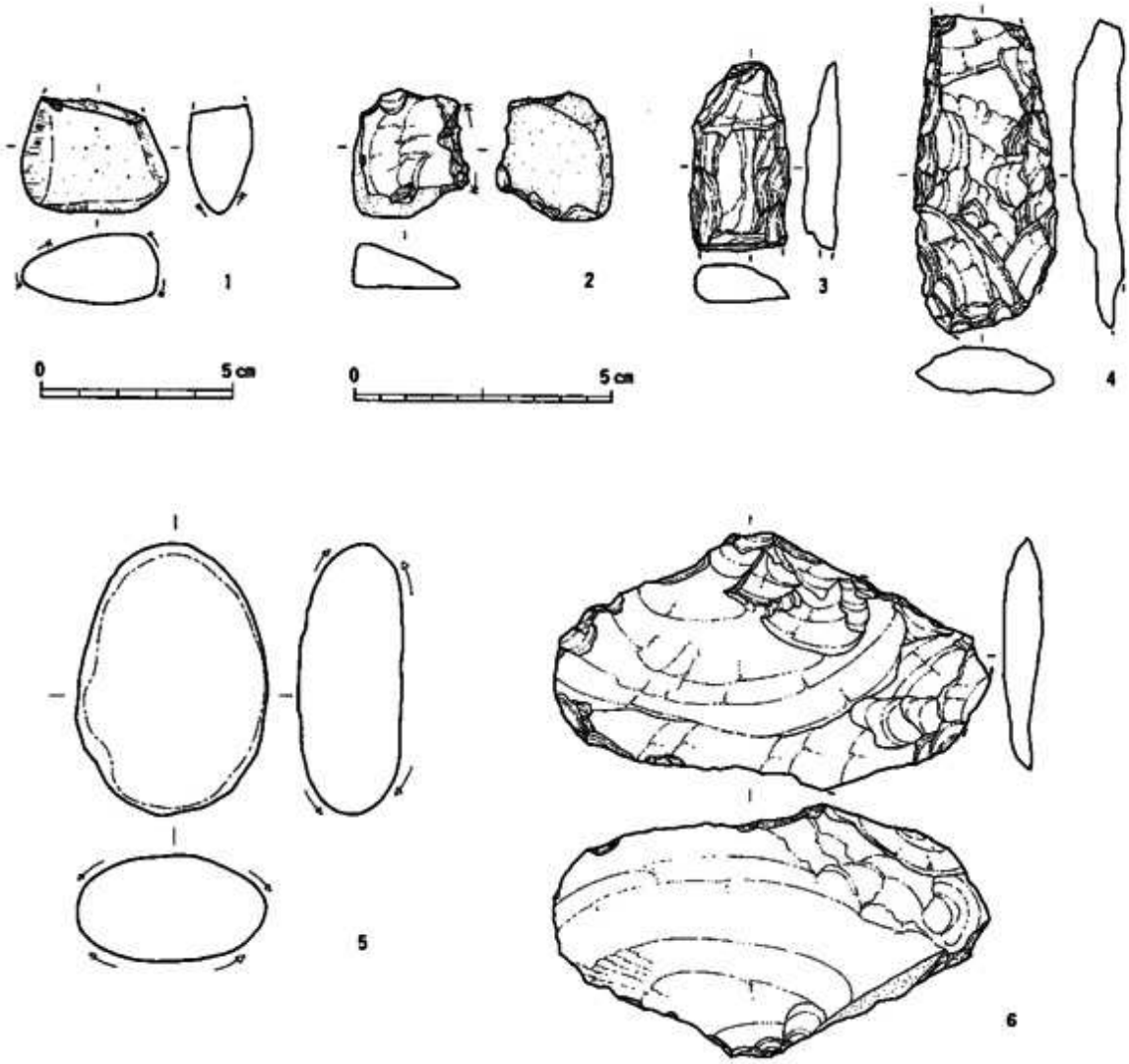
図版46 瓦 (1)

1~3：原畑4住

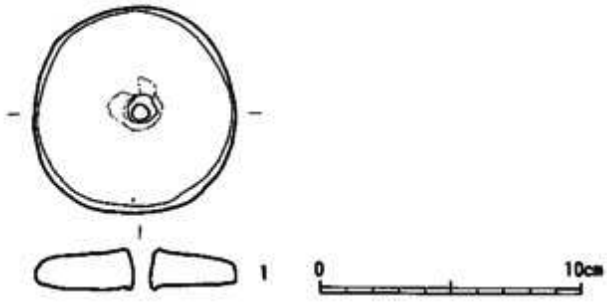
4
5
6
7
4・5：原畑4住
6・7：原畑19住
0
5cm

宮の上遺跡

石器

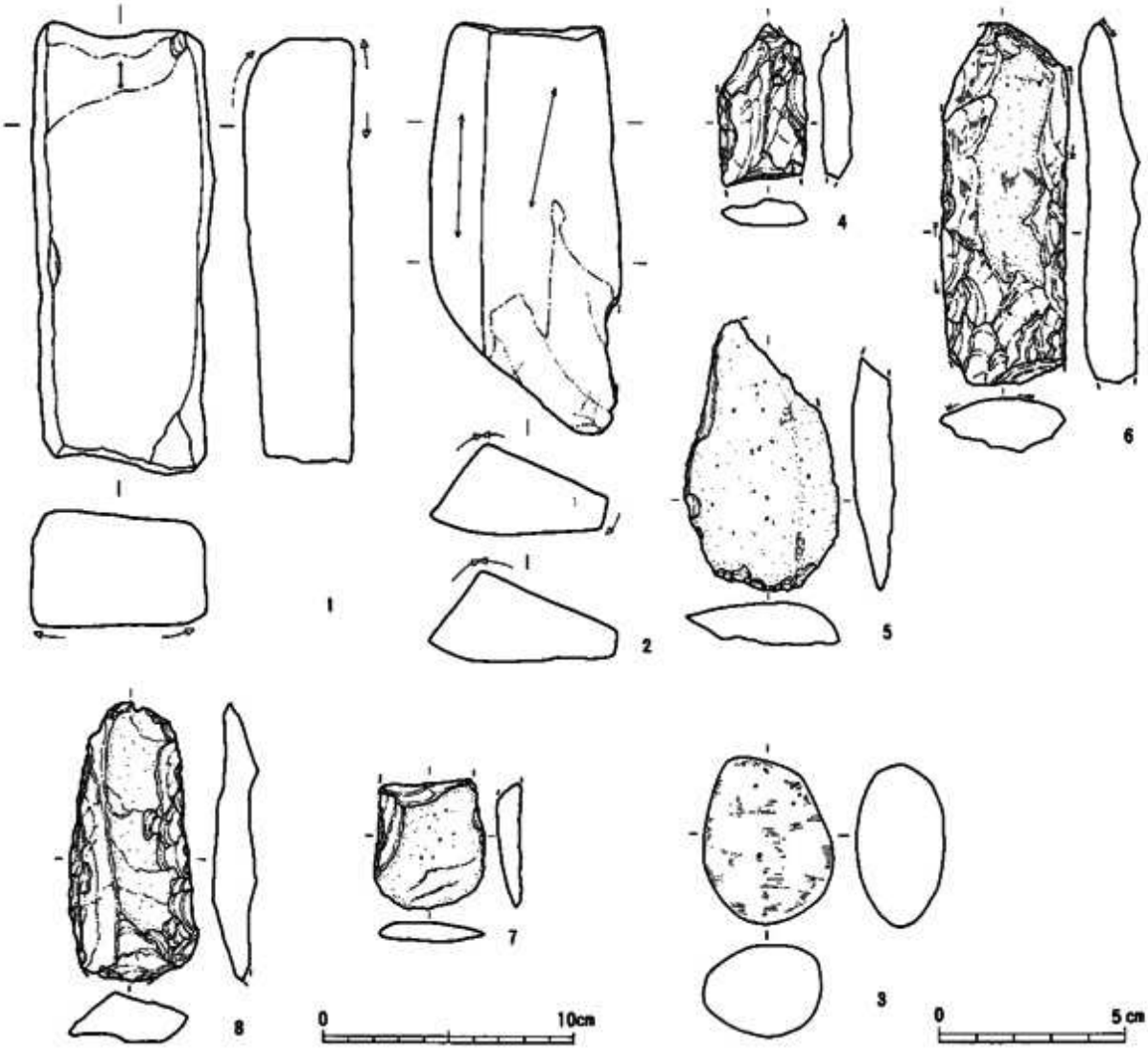


土製品

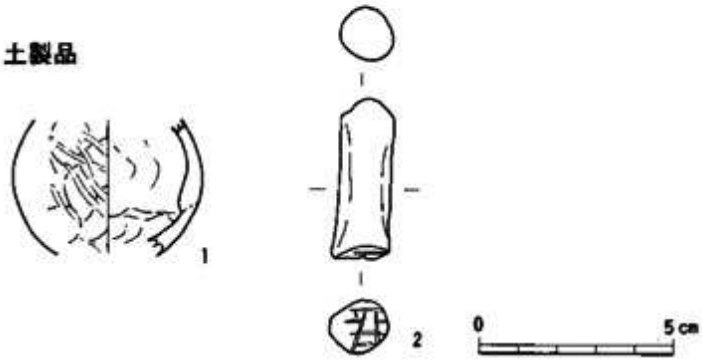


原畑遺跡

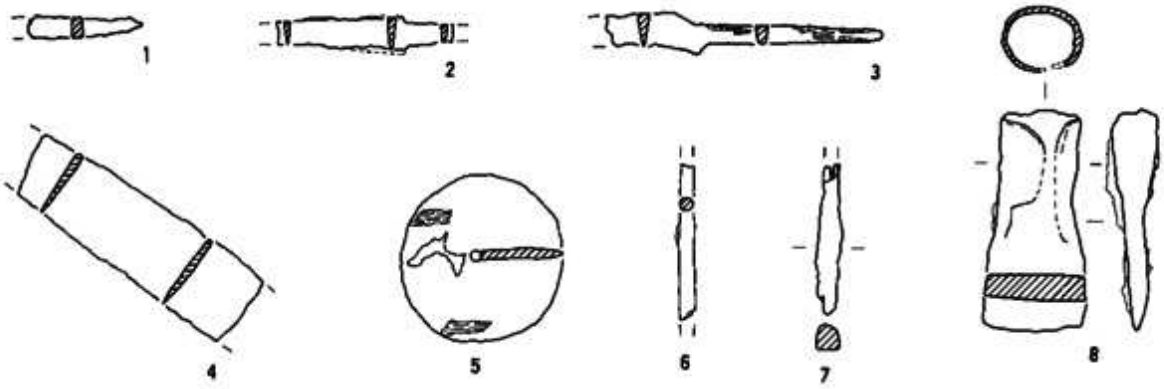
石器



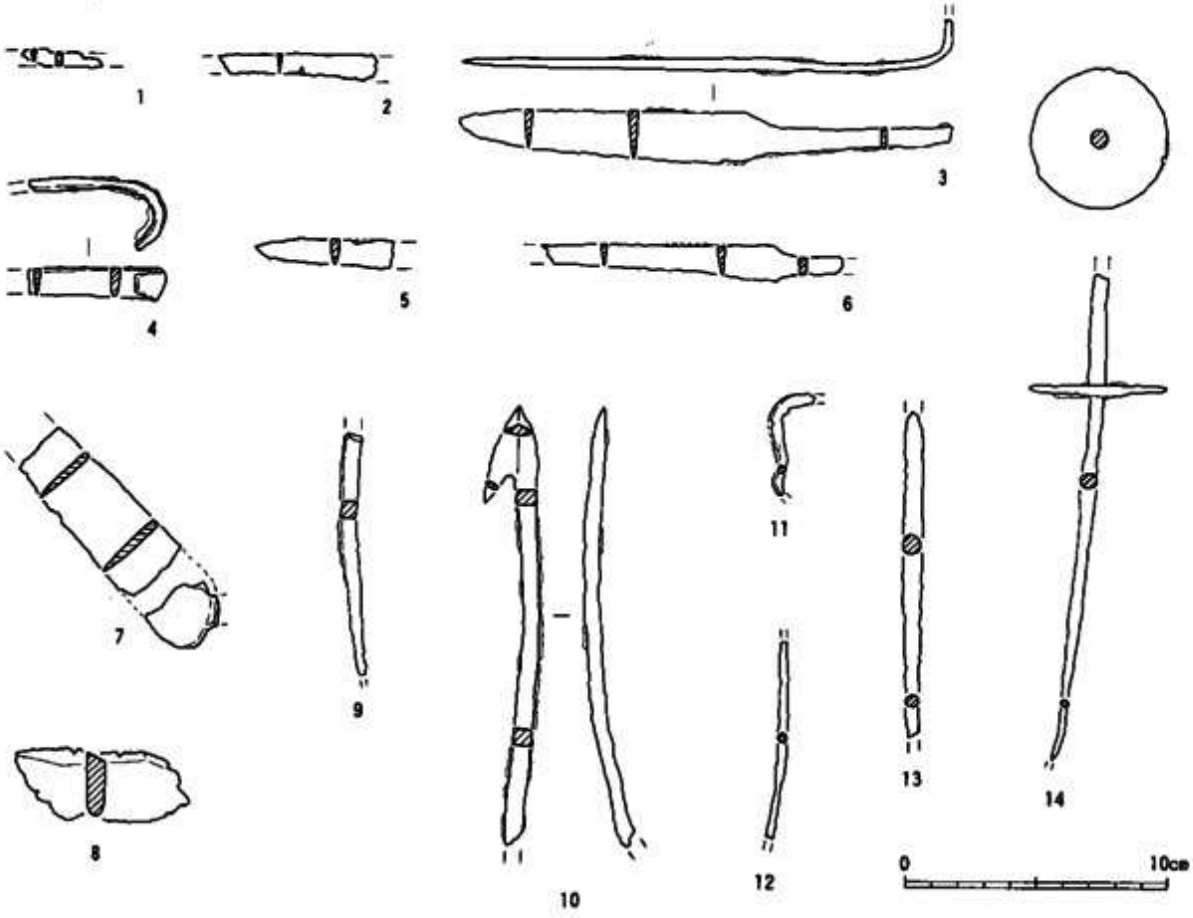
土製品



宮の上遺跡



原畑遺跡



写真図版

河口遺跡全景

宮の上遺跡D区全景（北から）

同上・第4号住居址粘土出土状況

宮の上遺跡第８号住居址遺物出土状況（東から）

同上・須恵器横瓶・土師器甕出土状況

原堀遺跡F区全景（南から）

同上・第1号住居跡カマド内土器出土状況

原町遺跡第８号住居址遺物出土状況（西から）

同上・配石と土器出土状況（西から）

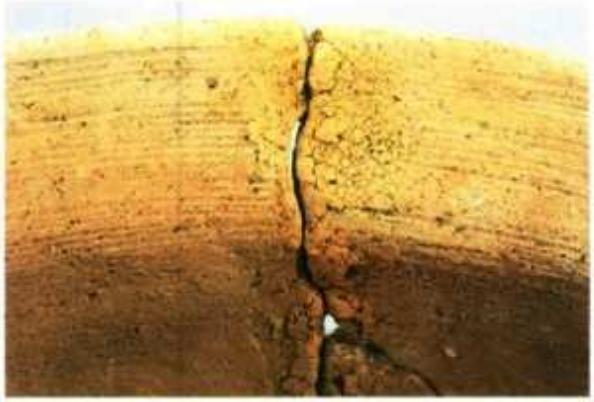
原頃遺跡第12号住居址西壁下の土器埋納状況（南から）

同上・第20号住居址カマド内黒色土器口縁出土状況（東から）

宮の上遺跡第８号住居址出土土器

宮の上・原畑遺跡出土円筒形土器形成

土師器甕の補修痕（351）



同 内面

土師器皿の補修痕（452）

同（453）

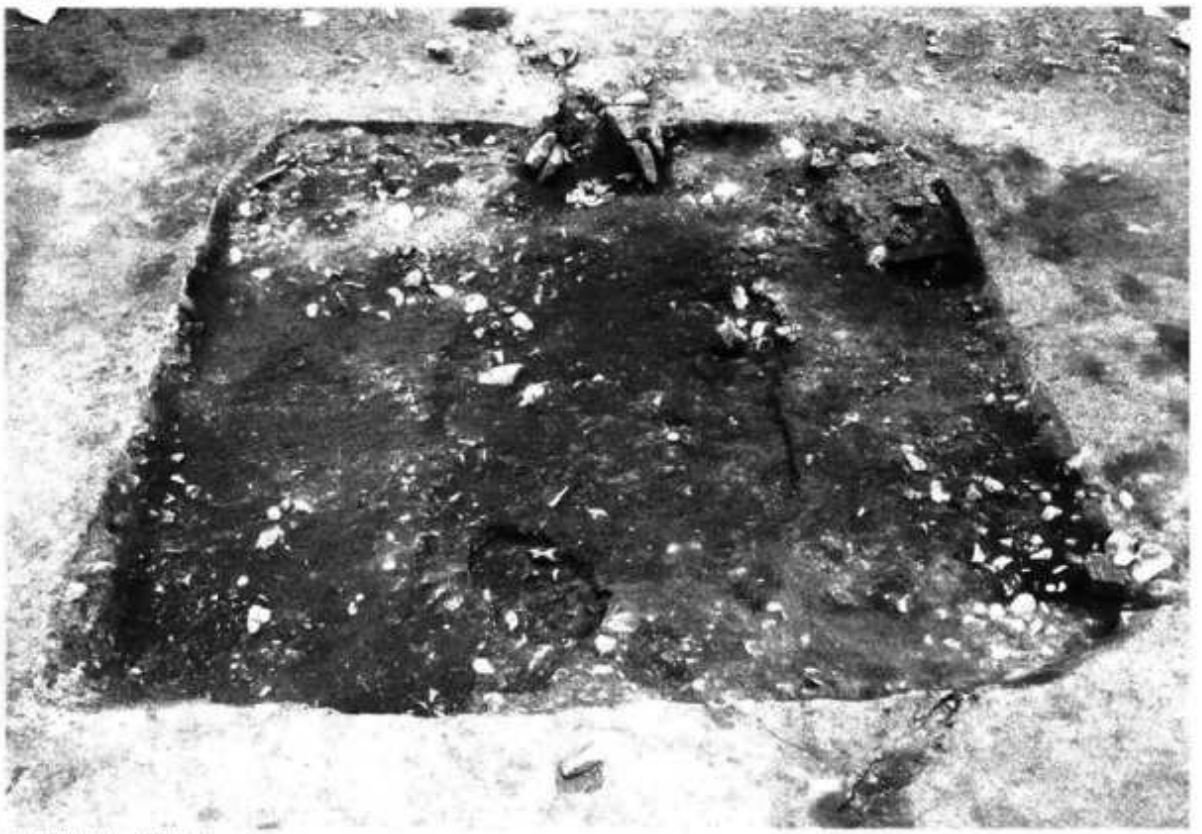
陶磁器「易」（229）

同「宗」（387）

同「得」（316）

同「歳」（306）

F区全景



第4号住居址（西から）

宮の上遺跡

第5号住居址（西から）

第6号住居址（西から）

第7号住居址（西から）

第8号住居址（東から）

第9号住居址（南から）

第11号住居址（西から）

宮の上遺跡

第12号住居址（東から）

第13号住居址（西から）

第14号住居址（東から）

第15号住居址（北から）

第4号住居址カマド

第5号住居址カマド

第5号住居址礫・遺物出土状況

第6号住居址カマド

第7号住居址カマド

同 カマド内遺物出土状況

同 礫・遺物出土状況

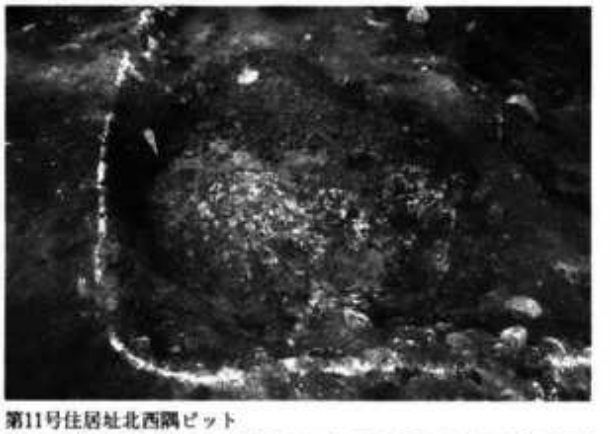
同 南東隅ピット遺物出土状況

宮の上遺跡

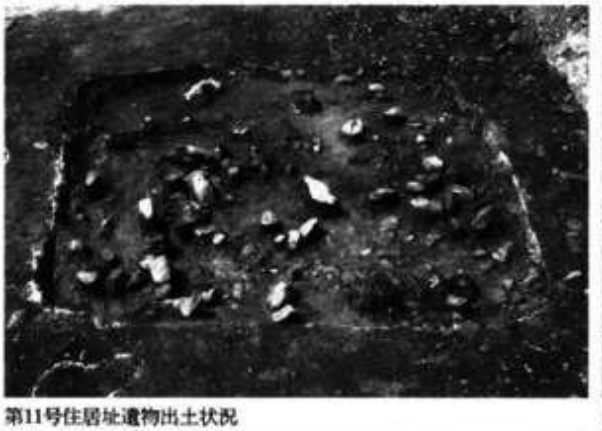
第8号住居址カマド

同 北東隅遺物出土状況

同 南西隅遺物出土状況

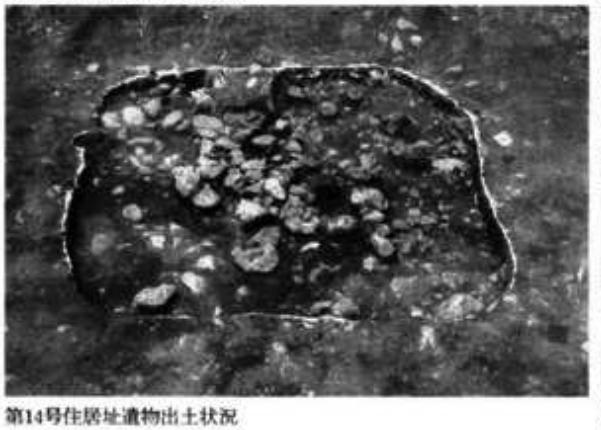


第11号住居址北西隅ピット



第11号住居址遺物出土状況

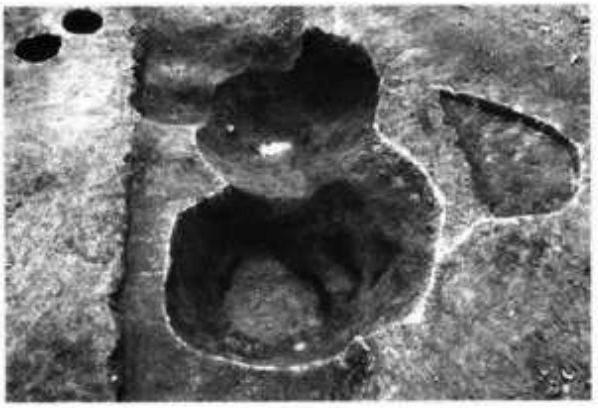
第13号住居址カマド



第14号住居址遺物出土状況

第14号住居址カマド

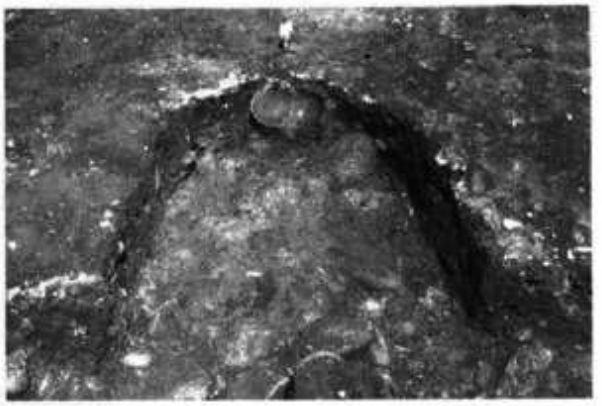
宮の上遺跡



土坑9・10（東から）

土坑16（南から）

土坑18（北から）



土坑24（西から）

土坑21・20（北から）

表土除去

住居址掘り下げ

作業

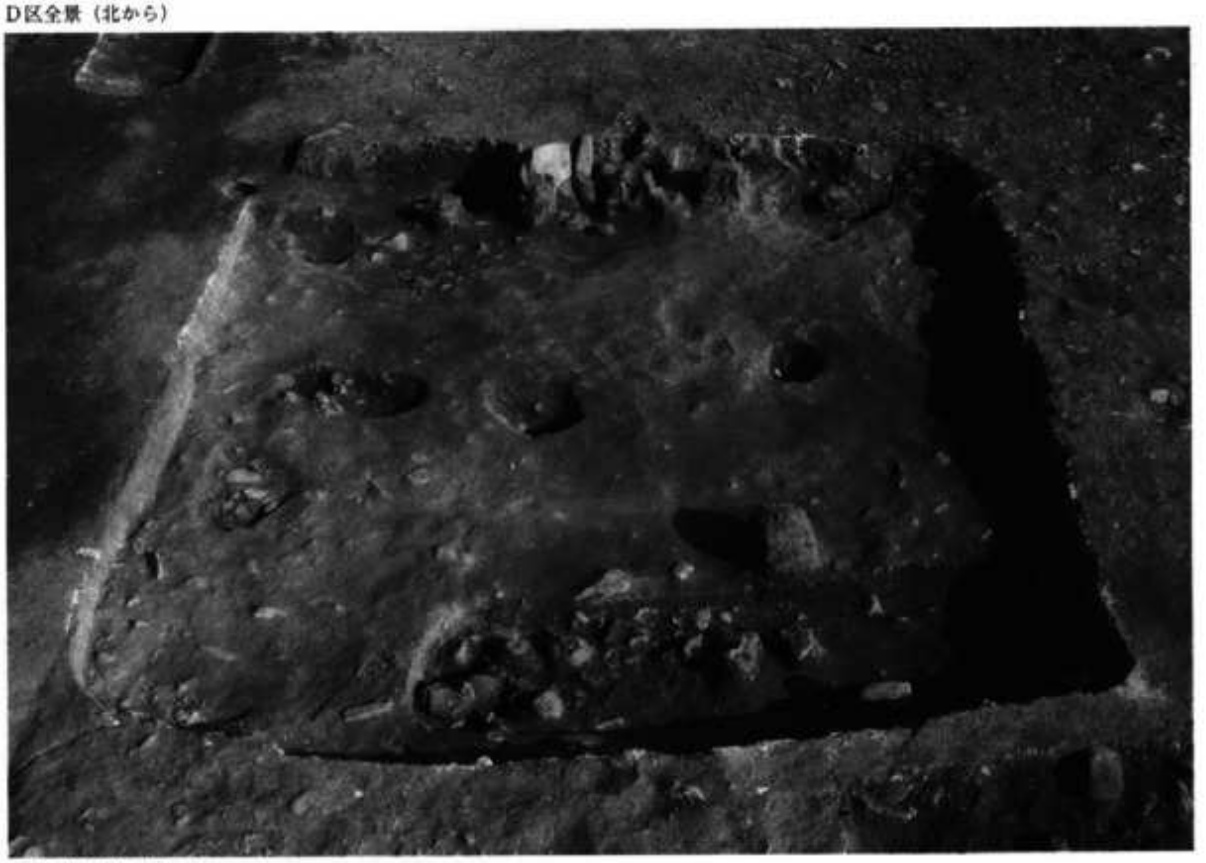
宮の上遺跡

B区全景（南から）

C区全景（南から）

原畑遺跡

D区全景（北から）



第1号住居址（西から）

原畑遺跡

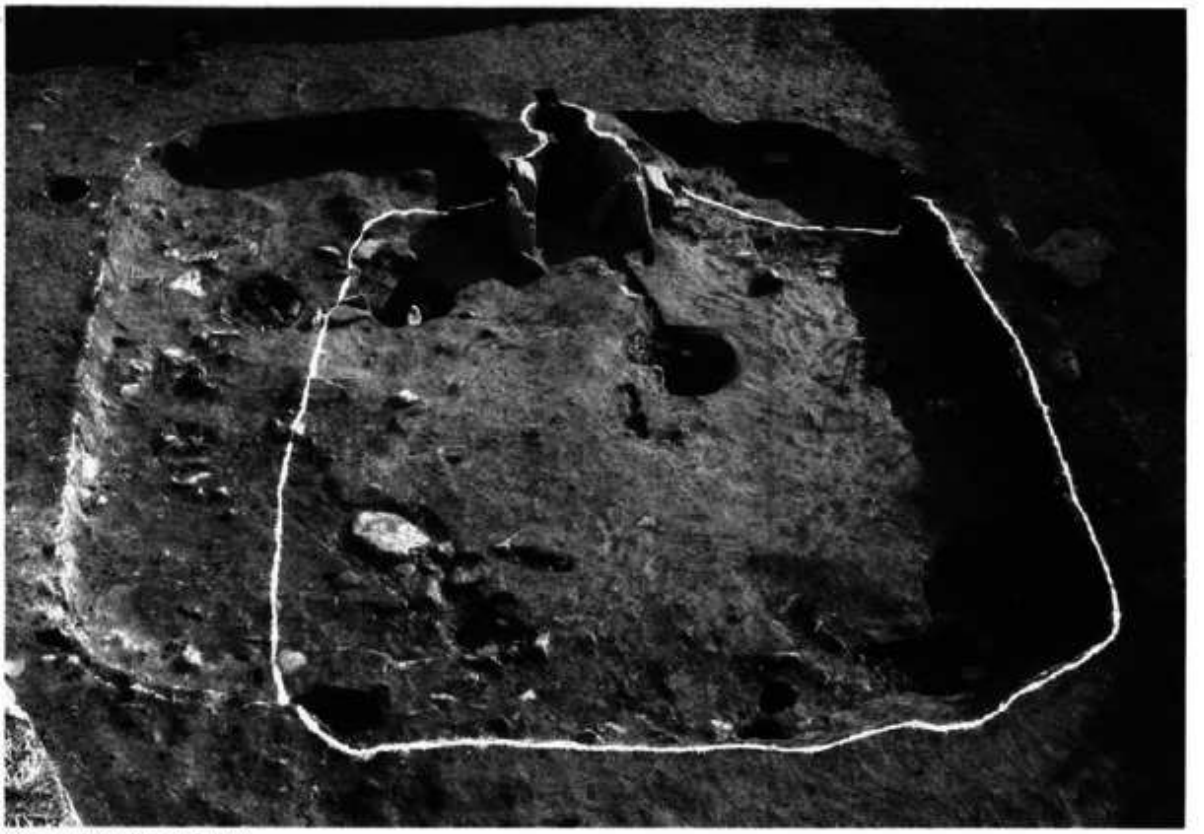
第2号住居址（東から）

第4号住居址（西から）

第5号住居址（西から）

第6号住居址（南から）

第7号住居址（西から）



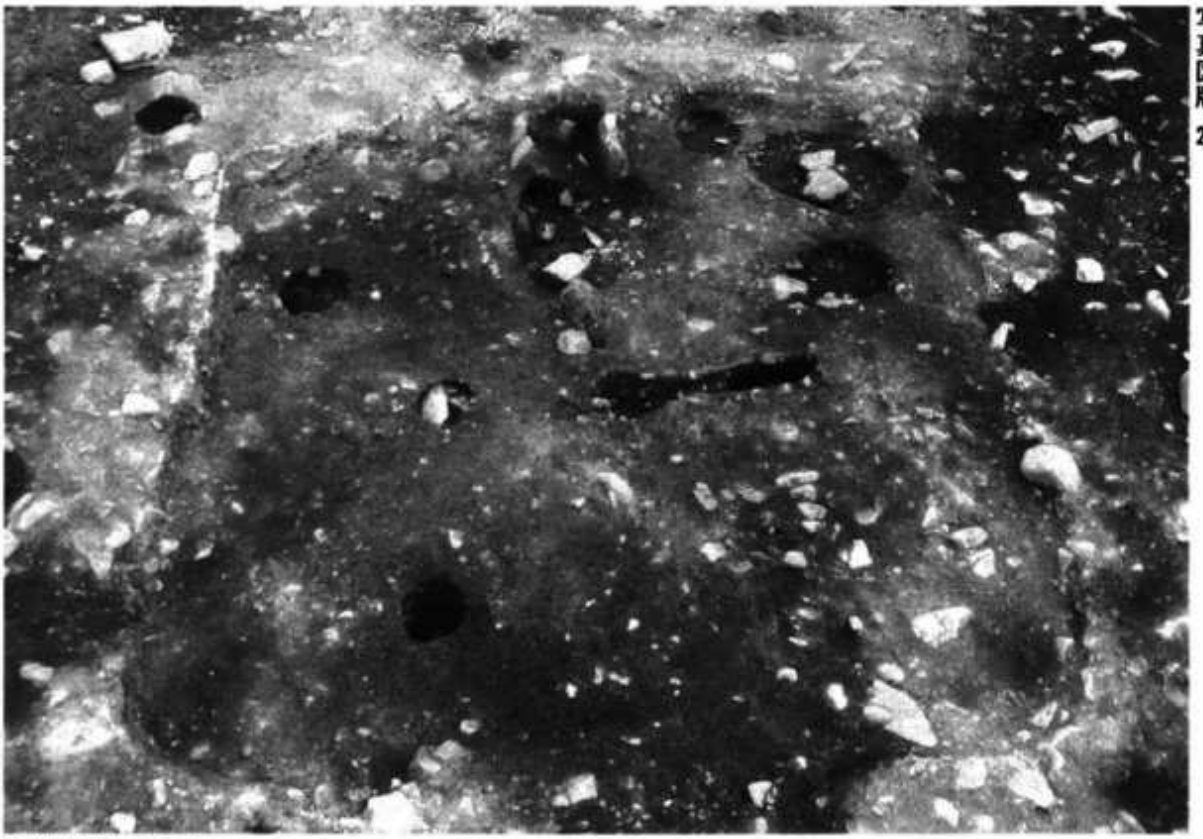
第8・22号住居址（西から）

第9号住居址（西から）

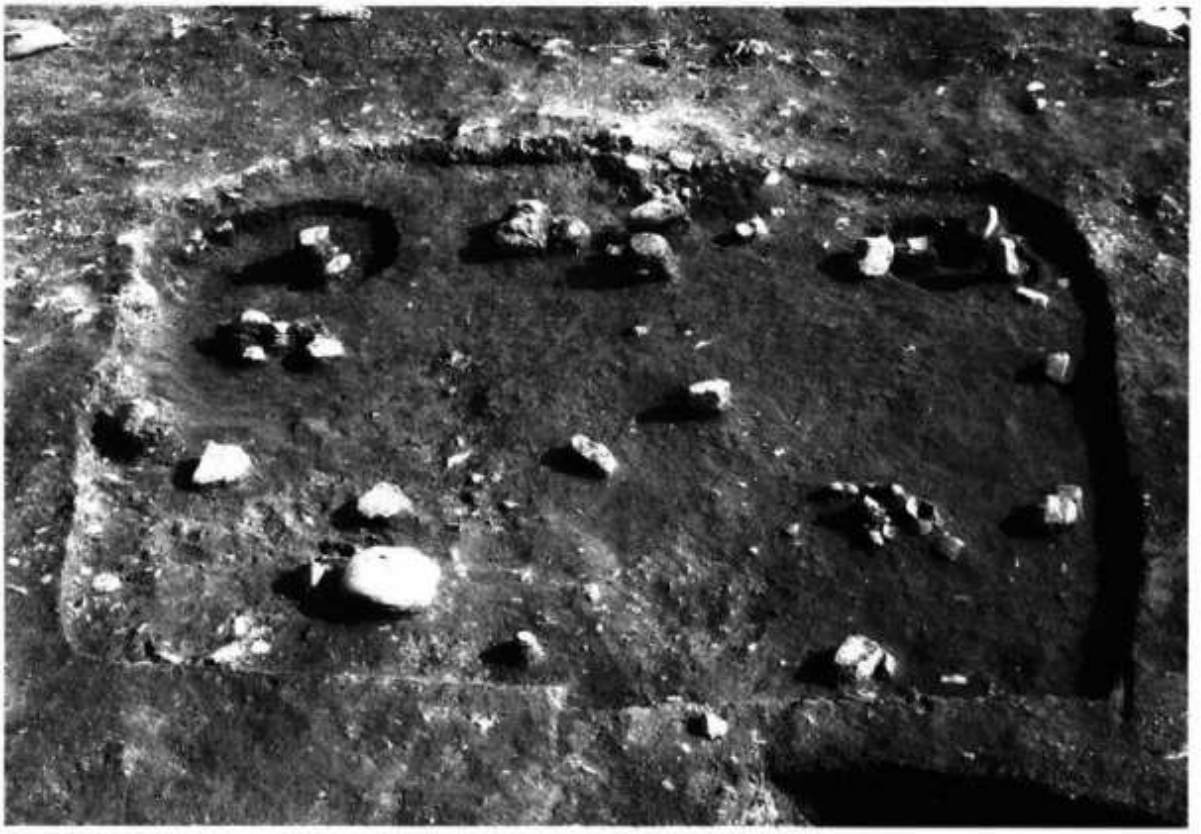
第10号住居址（西から）

第11号住居址（西から）

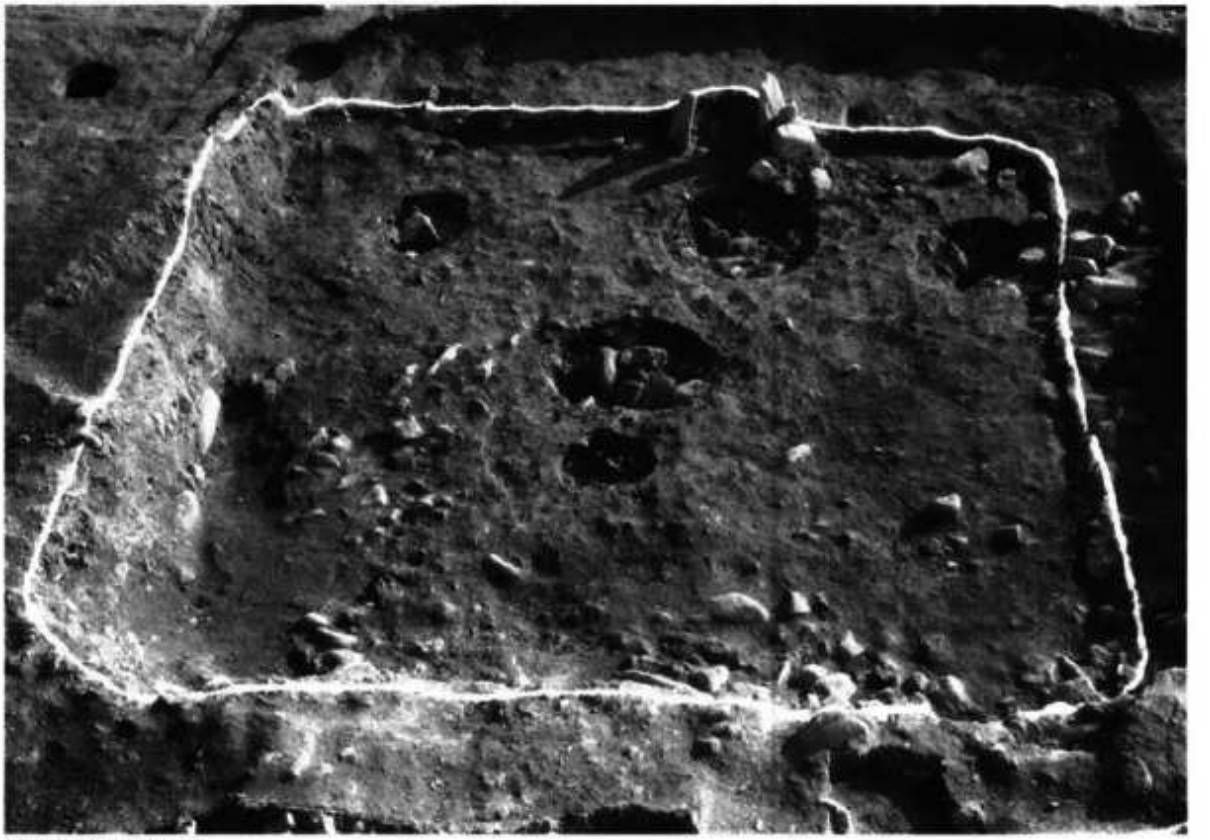
第12号住居址（西から）



第14号住居址（西から）



第15号住居址（西から）



第16号住居址（西から）

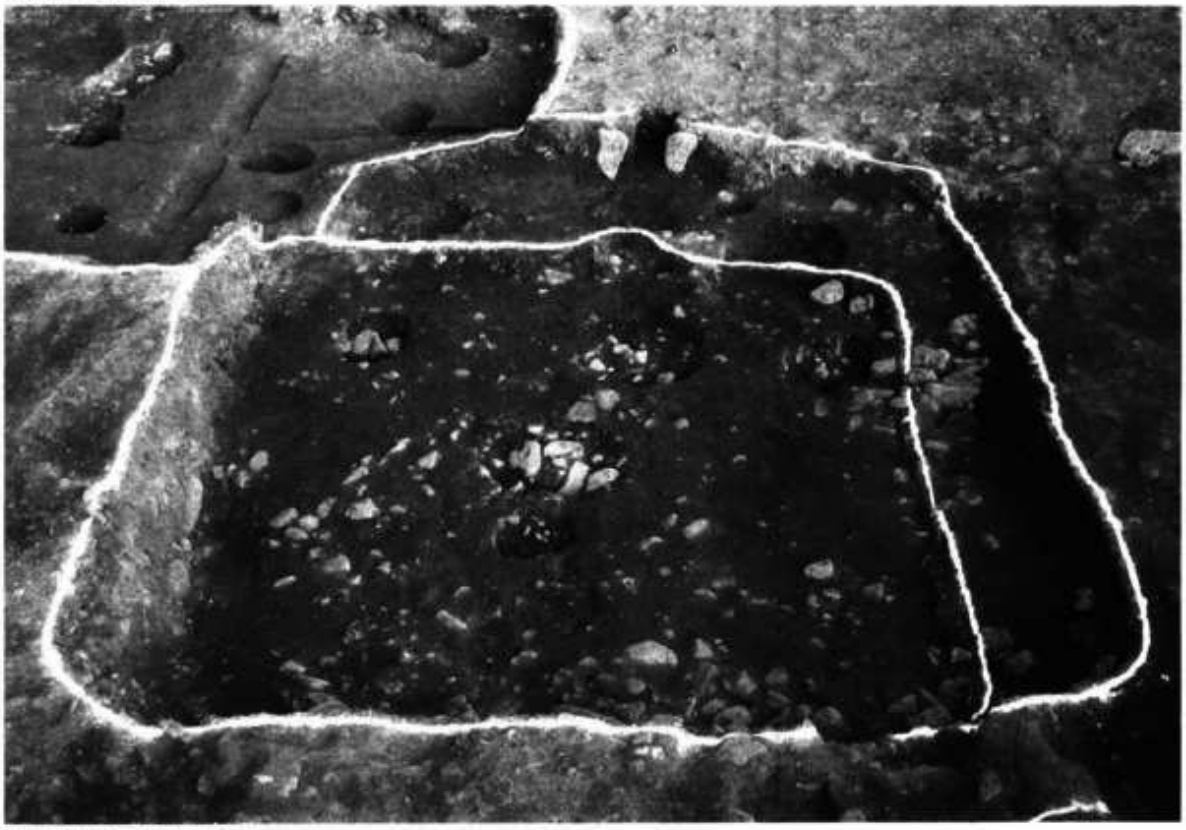
第17号住居址（西から）

原畑遺跡

第18号住居址（西から）

第19号住居址（東から）

第20号住居址（東から）



第21号住居址（外側、西から）

原畑遺跡

第1号住居址遺物出土状況

同 紡錘車出土状況

同 長頸壺出土状況

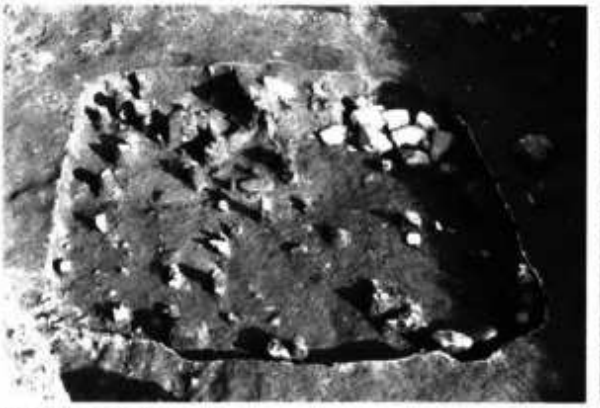
第4号住居址カマド

第4号住居址遺物出土状況

同 瓦出土状況

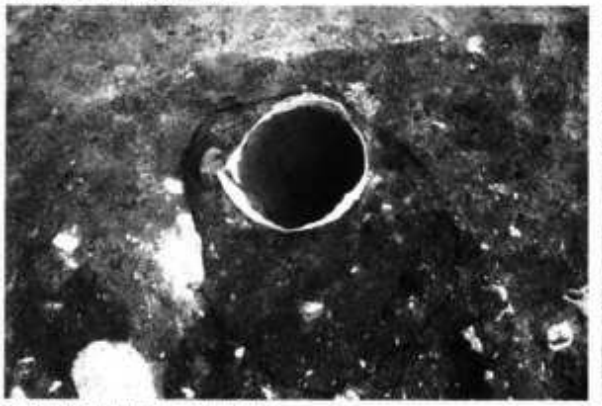
第7号住居址カマド

第8号住居址カマド



第8号住居址遺物出土状況

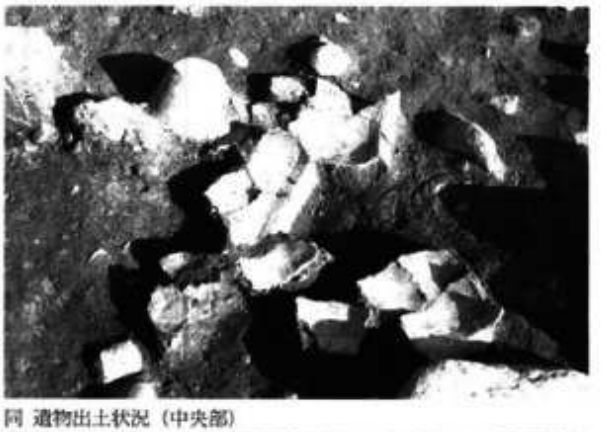
第12号住居址カマド



第12号住居址北東隅甕埋設状況

同 遺物出土状況

同 遺物出土状況（中央部）



同 遺物出土状況（中央部）

同 遺物出土状況（北壁）

第13号住居址（東から）

原畑遺跡

第13号住居址カマド

同 礫・遺物出土状況

同 円筒形土器出土状況

第14号住居址カマド

第15号住居址長頸壺出土状況

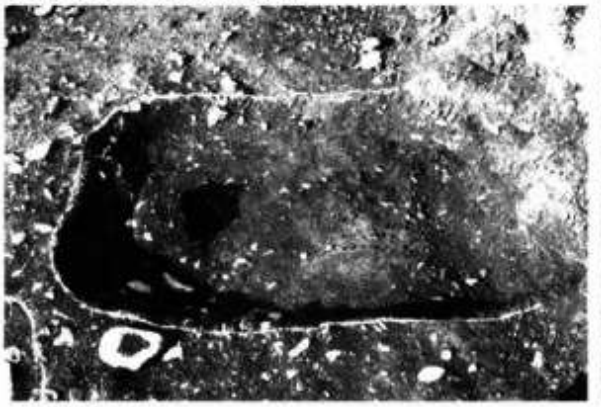
第18号住居址カマド

第18号住居址ピット内礫出土状況

同 礫・遺物出土状況

第18号住居址円筒形土器出土状況

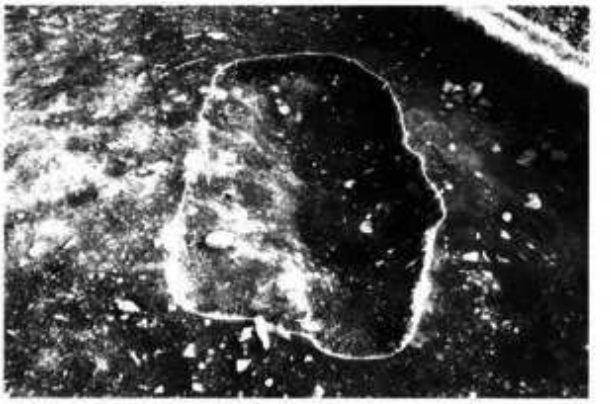
第19号住居址遺物出土状況



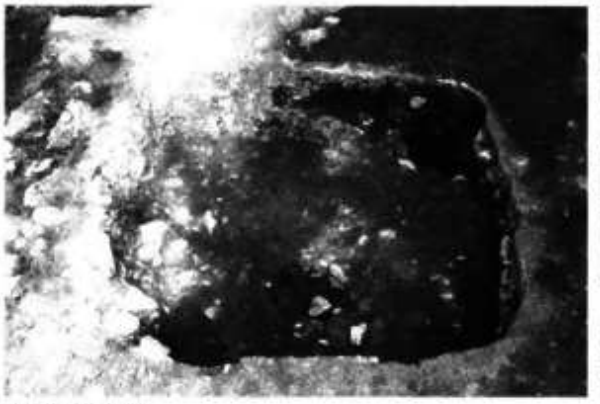
土坑1（東から）

土坑2・4・5・31（東から）

土坑14（西から）



土坑20（西から）



土坑29（南から）

土坑38（西から）

106

184

32

33

227

35

37

231

230

103

233

394

47

46

77

256

436

337

48

80

79

100

102

101

387

112

401

234

433

252

441

306

22

356

421

451上面

451

406

9

57

55

137

447

448

453

452

452

86

258

257

420

60

59

84

144

151

250

390

418

442

444

149

443

148

271

172

445

304

360

344

64

438

152

66

185

87

283

255

264

260

408

393

44

460

91